

を町人共エ、面倒なと押込で、駕昇上れば長兵衛ヤア
 こりや違ふたくと、喚けど更に聽入らず大坂の方へ昇
 て行く、お龜は歎き焦れしを下女や手代が手を引で、
 宥め歸れど立歸り留まり見歸り呼懸て、息をばかりに
 泣かはす、山時鳥臯月雨、涙の雨もふる道具やの聲は
 かりして佛は、隠れ笠屋の憂き名残、別れくりに
 三重成りにけり

中之卷

花聳と、地名にこそ立れ下草や、娘そ家の心齋橋
 女夫のあひは鵲や、笠やお龜は夕へより寝られぬ目
 元落窪み、フシ思ひ染みたる身の大事、
 中よき下女に

●花聳と云々、花聳といへば名は
 立派なれど、家の中心は娘なれば、
 聳は下草も同前なり。

●三十三番 大阪の札所なり。大
 阪三十三所のこと。「曾根崎心中」に
 詳し。

も語らねば、誰も斯とは白無垢を仕立る縫目大針に、
 二度と着まいと思ふにも、フシ涙先立つ折柄に、
 の娘友達三三人、お龜様内にかへ、
 七日、とふからの約束三十三番連立ませふ、
 へさんせ出さしやんせと、フシ何の氣もなく誘ひける
 観音様と聞くからに、
 も留守なりこれも仕立て仕舞たし、
 すまい、
 る事か参らしやれと云ふもあり、
 今のおじやつて見やつたら、
 ふ、ほんにお龜様もよい姑を持んした、
 廻りませふ、
 調父様

ふと、云ふて出るも常なれど、思ひあればや身にぞ染む、地斯る所へ與兵衛は今朝まで浮々彷徨ありき、心も空に行ともなく我家の門を徘徊す、お龜はちらと見るよりも、是誰もない大事な、これなふこれと呼はれば、笠をも取ずつゝと入り、二人ひつたり抱き付フシ臥し轉びてぞ泣きたる、稍あつて與兵衛、調ム、此白無垢を仕立るは、死ぬる合點か嬉しやと言へばチ、さればとよ、是れは斯はして置ども是非に叶はぬ其時は、私が方から知せをせふ、必らず夫迄短氣な心持んすな、こな様いかふ狼狽てじや心を納めて下さんせ、ひよんな心を持まひぞやと、力を付る其中にも、追がは年も童氣の、いつそ連立走りたいと、また絶り付抱

●入

入縁即ち入夫のとも。

き寄せ、フシ引寄せく、歎きける、有様こそは不憫なれ、下女のふりはさし心得、門に立て西東、心を付てゐたりしが、あれ立賣堀の伯母御様、駕が見へると駈入れば、こは何とせん伯母様の、目は見へねども内の者が見付やせんと、見世に立たる賣佛壇の、戸を明てこそは隠れけれ、地程なく駕を昇入れて、伯母も下ればお龜は是はよふこそと、チ手ヲ手をひき、奥に入りければ、供の女は駕昇に、錢をわたしも歸りませふ、晩方迎ひに参りませふと、云ふて其儘歸りけり、地をばは溜息ほつと吐き、調爰のは未だ戻らずか、今朝こちへ来て與兵衛が漸をめさつた故、地あるにもあられず氣遣しく、扱こそ見舞に、フシ來たるぞや、總じて入る入婿に

●唐物屋衆 「人倫訓蒙圖彙」に曰く、唐物屋、器物、香具、革、紙、薬墨、筆等より長崎着岸の物を買取りて之を商ふ所々にあり。支那和蘭陀等より輸入する舶来品を商ふ店にて今日の所謂貿易商なれば暴利を貪り贅澤を極むとなり。

●袖にする 女が男を振るとを袖にするといふ。商賈をそつちのけにするといふ。

●小路がくれ 「難波百事談」に曰く、船場中小路といへる所四あり。北濱より一丁南に、専ら心齋橋より西は西横堀に通ずるものを遊屋小路といひ、今橋と高麗橋通の中間にあるを浮世小路といひ、本町と

小言のあるは慣ひなれど、そなたや與兵衛が親々は伯母が爲には兄弟なり、調わごりよ達は甥姪なり、どちらに鼻負偏頗もない、まんろくを云ふ時は皆與兵衛めが悪いぞや、胸前垂に草鞋かけ親の辛苦一つにて、仕出いたる此身上、夫を學ぶが子の作法、調何であらふぞ唐物屋衆さへならぬ程に、ぞべくと着飾つて諸講の俳諧の、若いそなたを女房にもつて内の茶が呑み足らぬか、地茶屋へもちよこく遣ふと聞、意見をすればいふりを出し商賈は袖にして、小路隠れの家出のと聞く度ごとに此伯母が、胸には釘を打如く、言ふさへ涙が、フン翻るゝぞや、これなふお龜年はいかねど男を、持てば大人役、夫の身持悪ければ女房の名が出るぞや、

安土町との間を衣張小路といひ、南北久太郎町の間にあるをお前小路といふとあり。これらの小路はいづれも小料理屋待合の菓席なりしか。或は單に浮世小路のといふか知り難し。

●沙踏み 世間へ出て他人に揉れるを沙踏といふ。

●憎い者はいけて見よ 憎いと思ふ者も決して殺すなとなり。寛大有恕の意。

●娑婆世界 此の世をさしていふ。

戻つたりとも寄せ付ず江戸長崎へも追下し、沙を踏せて人にしや、地とは言ひながら與兵衛めは、氣の弱い生れつき無分別の出ぬ様に、女夫あひをよふしや、内に悪魔のある事も憎い者はいけて見よ、是も世上の不承ぞかし、ア、あさましや此伯母が、年は寄る目は見へず、連合には離るゝ子は養子なり嫁掛り、明日が日往生申しても骨を拾ふて眞實に、泣て呉るは與兵衛とそなた、子同前にいとほしく、よいが上にもよふ仕たく、朝夕の看經にも其方女夫を祈るぞや、お袋が此世にあらば是程苦勞は聞かじもの、怨めしの娑婆世界片時も早ふまいりたやと、咽入りく、或は憐れみ或は叱り、甥子を思ふ誠の泪、與兵衛もまろび出、ものは

言はれず手を合せ拜めばお龜は聲をあげ、只伯母様を
 母様と思ふて頼むとばかりにて、フン縫りあひてぞ泣き
 るたる理り過て憐れなり、地伯母は涙のひまよりも、
 前懐より縮緬一卷取出し、これこの緋縮緬は今はこの
 手は渡らぬとて、この前人に貰ひしが、色變りしか知
 らねども若い者は嗜みぞ、與兵衛と其方が肌の物に縫
 ふてしや、地男も女子も旅他國どこでどのよな事あつ
 ても、肌の物の善悪にて、常まで、フン思ひ知らるゝと
 地渡せばお龜忝けなしと、夫もろとも戴きて、跡まで
 清く顯はせし、心の色の緋縮緬、チクリ縮む一命ぞ果敢な
 さよ、フン時に亭主、地立歸り見世の道具を見廻す間に、
 あれ父様のと言ひければ、與兵衛裏へそろりとぬけ、

● 楓 戸のさんなり。

● 男ぎれ 男のきれ端なり。こゝは男らしき者は一人もゐずとなり、

細目に明たる倉の戸を明て内に窃と入り、樞をはたと
 落しける、詞長兵衛は不機嫌顔、ヤア伯母御出なされ
 たか、手代どもは一人もおらぬ、何處へうせたと受け
 れば、お龜聞も敢ず、はて忘れさしやんしたか一人は
 河内のおち様へ、一人は尼ヶ崎へ買物にやらしやん
 した、チ、夫を何の忘れはせぬ、地まだ歸らぬか野良
 共と、表裏を見廻して、詞是はく、男ぎれは一人も
 居ず倉に錠も下さぬか、地扱々無沙汰千萬と、眩やき
 く、錠おろし、鍵巾着に打入れて伯母御遊んでお歸り
 なされ、我等は町の年寄へ聲のすりめが談合に、參る
 と云ふて出けるは、フン苦々しくぞ見へにける、地お龜
 は様々心亂れ、伯母様些とお休みと、フン奥の間にこそ

●網代 川瀬に竹や木を編み重ね網として魚を捕る具。

●水晶の根附云々 水晶の玉を太陽に向ける時は、太陽の火玉の中心に吸集されて発火するをいふ。

●火繩 竹の肉をたき繩に捻り音しは鳥銃の口火を着する用にしたり。

入りにけれ、無惨やな與兵衛は網代の魚の如くにて、
藏の窓より顔出し水にても湯にても、せめて煙草呑み
たやな煙管火繩は懷中す、お龜來らば火が欲しやと、
フシ咽喉乾かし待けるが、地エ、思ひ付たりと藏の案
内覺へたり、水晶の根附尋ね出し艾を少し押當て、入
日の窓に差向へば、實に炎天の酷陽の氣、水晶に火移
りて、ナクリ艾燻り出けるを、フシ火繩に移し、やすく
と、煙草に氣をぞ休めける、地お龜は伯母を寢いら
せて藏をほとく敲きける、地與兵衛顔を差出し、地是
は何たる不仕合、云ふ事する事間に違ひ、獨り網に罹
りしは、如何なる因果と泣口説、お龜は思案や仕たり
けん、斯ふなる上は一心を据壁を破つて逃し、二人連

●替りの太鼓 狂言の替りを報ず

●嵐も三右衛門 *

にて在所へ行き今兄弟と公事をせん、此暮紛れに早ふ
くと言ひければ、チ、我もそう思ふ故壁は餘程崩せ
しが、壁下地の太鼓を切る音の響きては、如何あらん
と云ふ所へ、あれく芝居の替りの太鼓、サア此間が
よからふと脇指抜て切破る、音も嵐の三右衛門替り替
りと打太鼓に、隠れて餘所には、三重、知れざりけり、
地今が弟傳三郎斯くとも知らで來りしが、旦那は留守
かお龜様は奥にかと、裏へ通つて後ろより遠慮もなく
しつかと抱く、調エ、暑くろし誰じやいや、ム、傳三
郎か、主といひ主ある身に、此様な無作法は覺悟なふ
ては成らぬ筈、其根心が聞たいと騒がぬ顔で裏間へば、
ハテ根心とて別はなし、與兵衛の白痴めはどふでも爰

●手盛にさせる。奥兵衛は傳三郎に欺かれ、自分のものを自分に盗み出し、却て身の破滅を導きたるをいふ。

には置かれぬ談合、地君さへ合點なさるればしづが掣になるじやげな、但し阿呆がお好かと、フシ猶理不盡に抱き付、地ヲ、聞へた扱はかの讓状も、詞其方が欺して取らせたか、如何にもく町儀が何とも濟ぬ故、手盛にさせて喰はせたる才覺を御覽せと、言ひも果ぬにチ、夫れを聞ふと云ふ事よ、詞あれ間男よと、地聲立つ口に袂を捻迄で、絞殺さんとする所を奥兵衛壁より這出て、むんずと組んで引きければお龜は奥に逃げ入りける、地己れ不義者身上の敵と、掴みついて組合しが傳三郎は強力者、非力の奥兵衛を取て投げ、足をもためず逃失しは、フシ残念なりける次第なり、喧がしきは何事と亭主歸る折節に、手代も皆々立歸り裏へ通れば

●昨日の今日、昨日今日と同じ。

●八百屋お七、我が家に火を着け刑せられし女、人の知る所なり。

奥兵衛は、南無三寶と起き上り狼狽廻つて切明し、藏の壁へ這入る所を長兵衛飛懸り、兩足擱んで引ずり出し、詞ヤレ奥兵衛めこそ藏の屋尻を切たれと、地呼はる聲に驚き伯母はお龜に手を引かれ、そも實事かとはかりにて呆れ、果てぞゐたりける、地道具はあるか吟味せよと、鍵投出すを手代ども戸を明け内に走り入り、何も道具は違ひなく是ぞ不思議とふすばつたる火繩艾を取出すは、フシ詮方なふぞ見へにける、地親ははらはら涙を翻し、如何なる天魔が入變つたか、町衆を騙つて讓状を取出し、大耻かいたる昨日の今日、親の藏の屋尻をきり、此火繩の火は何にするヤレ罰當りめ、八百屋お七を見をらぬか、聲山立て町へ聞え下で濟ぬ詮

●碌な死 まんぞくには死ぬ事は出来まいとなり。

●語 こゝにては上よりおろす戸のとなしとみといへるなり。

議になれば、如何なるをきめにあふとか思ふ、そこをせめでもふびんさに、高い聲も得せぬはい、是でも己れが心には伯父をつらしと怨むらん、本氣ではよもあらじ、碌な死をせまいかと、却つて是がふびんなりと、涙を流し目を震はし、フシ色を違へて憤りける、お龜涙を押へ、これ與兵衛様うろたへまひ、言譯をなされと言へば、詞イヤ證據もない言譯見苦しげに何かせん、地皆我々が不運なり如何様になる逆も、親をも人をも怨みとは思ふまいぞ思やるなと、一聲云ふたばかりにて誰がもの云ふても返事もせず、歎き沈みし有様は、目も當られぬ風情なり、日の内は外聞悪し、表を締めて追出せと、部下して情なく引出せば伯母お龜、なふ今

暫しと取つくをもぎ離しもぎ離し、門より外へ押出し、潜戸をはたと指しければ、内には妻の叫ぶ聲外に夫の忍び泣、涙に曇る十七夜、月に別れて三重へ出にけり、宵より二階に引籠り、待てど暮せど其人の、そよと計りのおとづれも、早九ツの鐘の聲、書置涙に文字消て、先へ死んだましましならめ、萎れ佗たる折節に、竊かに人の足音す、そつと二階の障子をあげ、覗けば夫も搔暮て互ひに聲も立ばこそ、點頭合たるばかりにて、泣くづをれしぞ哀れなる、地用意し置しさがへに、夫の白き帷子緋縮緬に結びさげ、下せば下より受取りてコレ死ぬる覺悟と心得ける、地南無三寶西町より新町戻りの駕に提灯、走つて近く車長持、蓋

●むしこ 蟲籠窓のとも。

●さいかに お龜が二階より帯に傳はり下へ降りるを、丁度蜘蛛が糸を引いて降りるに譬へたるなり。

をへあけてぞ隠れいる、フシ稍遣り過し 地出ければい
つかは釘を放しけん、むしこをはづし帯結下、傳ふて
下ん其用意、夫は長持引出し、心を碎く二階には消る
ばかりに蜘蛛の、糸に懸れる身の命、露の便りの危う
さよ、憂さよ怖さよわなくと 三重震ひ傳ふをへ抱お
ろし、地二人が顔を見合せて息つき胸を鎮めしが、此
頃途絶し添寝の床懐しなつかし戀しやと、互ひにひし
と抱きしめ齒を喰しはり息をつめ、顔と顔とを打合せ
フシ身を悶へてぞ歎きける、地町の夜番が時申し、又
長持の蓋あけて、抱きあひてぞ忍んだる、夜番は物に
心をつけ、詞けはしく門を叩き立、これ起たく、二
階のむしこをはづひて上から帯がさげてある、長持も

●八軒屋 京橋三丁目、天満橋と天神橋との中程の濱をいふ。此の所淀川上下の船乗り場なり。

●先立ち失せし心中 「傳奇作書」にお龜與兵衛は梅田の墓所にて心中せり、故に其の文句の中に先立ち失せし心中といふは、彌市お高の情死となりとあり。或は「曾根崎心中」をばじめ、此邊にてありし心中と見ても差支なきが如し。

●今捨る身にも恐ろし 一命を捨れば何も世の中に恐るべきものはなき筈なれど、犬の吠ゆるを聞けば道に氣味悪しとなり。人情を穿ちたる詞といふべし。
●しの字を嫌ふ 死を嫌ふよりしの字を忌むは昔よりの習慣なり。

出してある盗人そうなと叫くにぞ、地家内一度に目を
覺し、二階へ上れば娘はなし、地お龜様が見へぬは夫
りや提灯よ釣鐘よ、八ツ過じや八軒屋河内よ堺よ川口
よと、足元へは氣も付かず、フシ手分をしてぞ追かけけ
る、地夫婦は隙間に長持よりそつと出て邊りを見、先
立失せし心中の戀の移りの香をとめて、梅田橋へと志
し二三町こそ走りけれ

末期の道行

江戸フシ今捨る、身にも恐ろし犬の聲、辻を隔て見返
れば、あれで生れし町所、家の馴染も十五年、其春夏
の此月は、祝ひ月とて物忌い、長歌しの字をさへも嫌ひ

●米屋町 唐物町と本町との間の町をいふ。(今南本町と稱す)お龜の家は北久太郎町心齋橋表とあれ、道行は心齋橋の一丁東井池筋などを北へせしものと覺しく、本町、安土町、備後町、瓦町、淡路町、平野町、道修町、伏見町、高麗橋、浮世小路、尼ヶ崎町、(旗檀木橋筋より西を尼ヶ崎町といひ、東は今橋なり。當今は凡て今橋筋と稱し、西横堀に架する橋に、尼ヶ崎橋の名残りあり。過番町(今の内北濱筋にして、其の頃は旗檀木橋西を過番町といふ)と大川まで一町残らず、町名を擧げ數へたり。

しが、死して死骸を知る人に其死耻も包ましく、其方の鬚亂れずや、いや我よりもおの様の、鬢撫附て搔なで、死んだ跡迄よい殿と、人に言はせま、フシほし明り、今宵の月を月々に、待しも遂に引かへて、ナクリ冥土の使ひ我々を、待らんものと搔くれて、涙曇りの十七夜二人が袖に宿しけり、よしや地獄へ墮るとも、たとへ佛に成るとても、必ず契り米屋町、本町筋の軒深く、思ひしみたる中なれば、埋まば同じ安土町、うまれ變りて又いつか、娑婆の便りの備後町、思へば我も元服し、私も若いに鐵漿つけて、のがれし塞のかはら町、三途の瀬戸の淡路町、越れば親の古里の、名にも別る、平野町、曙近き時太鼓どうくしゆ町、フシこれ

●立君 總縁のとも。當時浮世小路など淫賣の巢窟なればしかいふ。

●來ぬ人を 「來ぬ人をまつをの浦の夕風に、やくやもしほの身をこがしつゝの古歌を取れり。

●見ろめ 海草の名。尼ヶ崎町の尼を海士にかけたいふ。
●北濱中の島 旗檀木橋(今は此の橋なし、難波橋と淀屋橋との間にありて、中の島の剣先に渡りたるもの)を渡り中の島に出でたる如く作れり。

やこの修羅の太鼓の響きかと、共に驚く袖と袖、抱き寄せつゝ泣くばかり、聞けば私しも母様の三十過ての初子とや、其譲りかや馴染て、フシ一夜離れた事もなく、交す枕に子だねのなにか、ナクリ是も産まざる數ならば、根を堀る竹の伏見町、高麗橋の西東、床も定めぬ立君はこれも世渡る習ひとて、浮世小路の細き聲、唄ふてかへる其歌の、品あるなかにも來ぬ人を、まつほの浦の夕風に、焼や藻汐の身を焦す、夫は吾妻の物語、耳に聞きたるばかりぞや、そもじと我は浪速津の、貴賤群集の見るめかる尼ヶ崎町くはしよ町に、はや北濱や中の島、ナクリ明日は、天満の橋々賣て、梅田のくの堤をそめし、紅葉笠屋のな女夫の心中、男廿一お龜

●ゆんで 左の方を弓手といふ。無常の焼草は梅田の墓所あればなり。

●かつぼう鳥 と。杜鵑又は鶯喰鳥に似たり山林に棲みてかつぼうと啼くが故に此の名あり。山鳩の一種なるべし。

は十五、年にあはすりや、いたづらくじや、サア繪
双紙る、地餘所の口の端、フシア、餘所ごとに買求めて
は慰みし、此身の果を讀賣に、長地誰が節つけて田舎ま
で、唄ひ流さん蜷川、水も濁りて此世へは、いつ歸り
すむ根なし草、ゆんでは無常の焼草と、惜からぬ身は
おしからず、灰となさふか此肌、煙りとなるか此の形
惜しやいとしや悲しやと、引合し手を猶締めて、涙の
限り泣つくす、森の小鳥川千鳥かつほう鳥も聲さびて、
早東雲も近付ば、小田守る賤に忍ばんと、右へ下れば
網舟の目にやかゝらん行く先は、早曾根崎の神主の朝
清めする折なれば、今は詮方夏草の、人目堤の下かけ
を爰ぞ夫婦が最期場と、フシ泣く泣く休らひ立にけり、

地お龜は夫の顔を見て、連立つ冥途の道とは知れど、
いま今生の別れとて言たい事の何やらが、胸には有つ
て口へ出ず、飽程顔が見て死にたや、心なの短か夜と
フシ身を投かけて泣いたり、ア、愚かや愚痴や淺ま
しや、永き來世があるぞかし、去ながら心に懸るは其
方の父御、二人とも無き獨り子を、憎や聲めが殺せし
と、さこそ怨み憎しみの、是罪障となるぞとて、フシ共
にひれ伏し泣きければ、いや父様は男氣の思ひ諦め有
るべきが、いとしや在所のお袋様、しうとめなりとて
一日の、給仕した事もなく、大事の子をば嫁故に、失
なふた殺したとお叱りなされんこと一つ、目の不自由
な伯母様の、力と成るはこち女夫、さぞ今頃は泣き悲

●黒鐵の帳 鐵札ともいふ。人間死して地獄に墮つれば、閻王の廳前に引出され、生前の罪惡を記し、輕重によりて苛責を受るなり。

●蒼む花出る月 二人の年若く麗はしき姿を、月と花とに譬へたるなり。

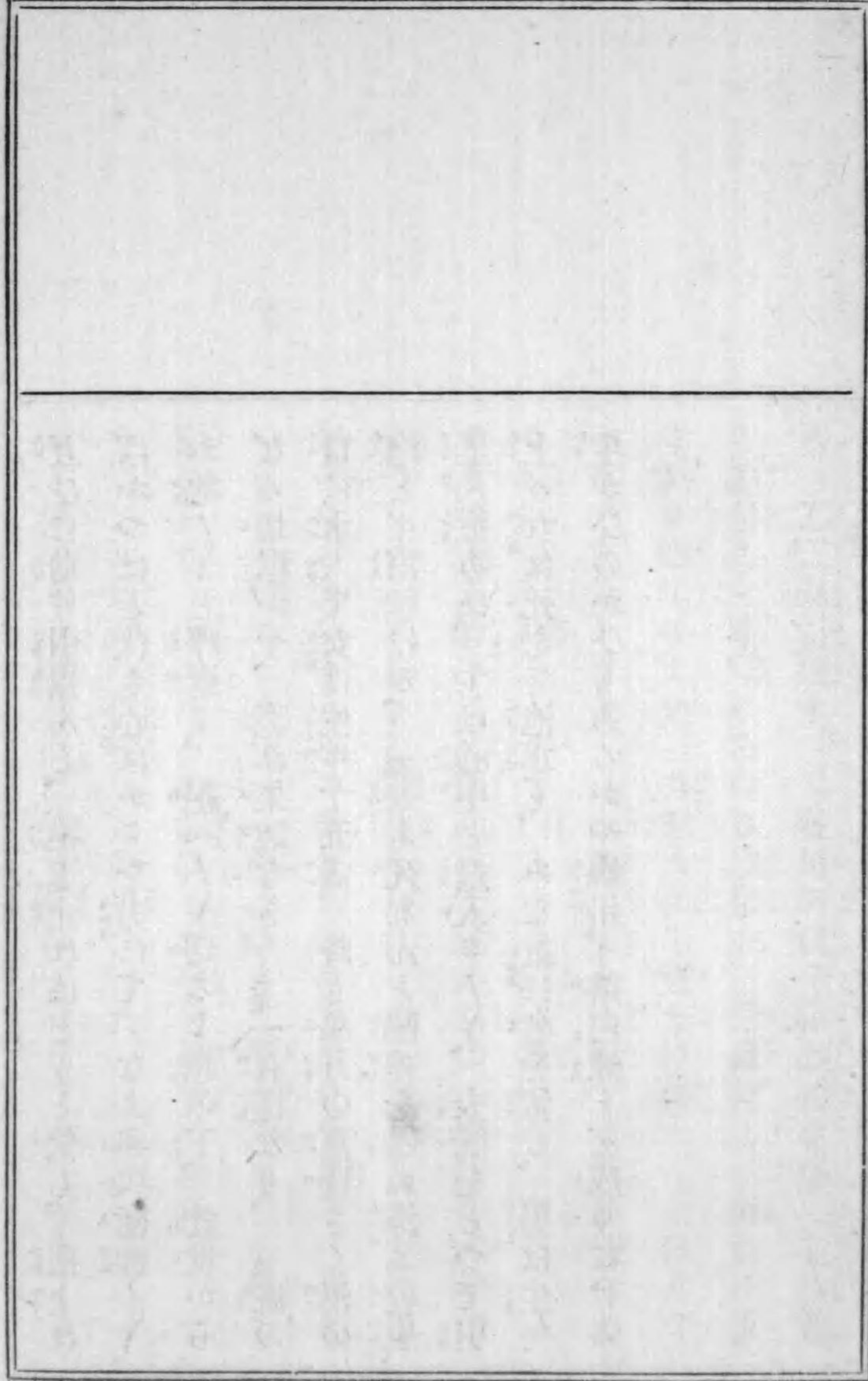
しみ目でもまはぬか、どうしたと、胸に塞がる是二つ、又母様の十三年觀音經を書ませふ、佛になつて下さんせと墓に向つて約束の、是が違ふた何やかや斯迄重き罪科の、閻魔の前には黒鐵の帳に付くと聞くものを、よい所へよも往かじ火水の地獄も厭はねども、夫婦別れて行ふかと、是のみ猶も迷ひぞと、聲もおしませず歎きける、遠が男は力をつけ、詞一つに行ふと別れふと皆一心の向け様ぞ、氷の地獄火焰の地獄、劔の山へ登る共、取交したる手は放さじと、心強くは言ひけれどまだ蒼む花出る月、玉の様なる若い者若い女の頑是なき、宥めらるゝも宥むるも、分て分たぬ涙なり、地あれ早東も白ふだり、サア念佛と云ければ、心得た

りと懐ろより髮剃二挺取出し、これも母様の額たれとて譲りたり、私はこれで死たいと泣くく出す其なかに、向ふの野道を入通ふあれよくと心は急ぐ、二挺の髮剃一つにとり南無阿彌陀佛と引寄すれば、お龜は常々信仰の南無觀世音菩薩様、母様の戒名きやうよじゆりん信女、一つ蓮に導き玉へ南無觀音様觀音様と、手を合せて待ければ、男は目くれさし俯向き、只泣くより外の事ぞなき、地エ、憂目を見せて何事と、夫の手を取り我が咽喉に押當れば思ひきり、南無阿彌陀佛と笛のくさり、髮剃の刃も折れよと一剗りは剗りしが、若き者の悲しさはとゞめの急所を知らずして、まだ息絶へず悶ゆるを疵の口を隠さんと抱への帯をくるく

と、二三遍引廻す、フシ憂目の程ぞふびんなる、我も臆
 て追付んと咽喉にあつる髮刺の、刃は鋸と折砕け皮肉
 ばかり切れけるを、力を入れて突きけれど、とほりつ
 べうはなかりけり、地南無三寶と髮刺すて傍に抜きお
 く脇指の、鞘をもつて引あぐる鏢は重し手は弱る、は
 ずんで剔る勢ひに脇指ぬけて樋の口の、井田の水草の
 漲つてぞんぶとこそは沈んだれ、エ、しなしたりこは
 如何にと這ひ下る堤の露、こぼれし血に足滑り、フシ池
 へどうと落たりけり、地池は深く泥土深し底の脇差
 探ねかね、浮ぬ沈みぬ漂ひしが今を最後の眼にも、夫
 を思ふお龜が心引揚んとや思ひけん、はふく岸によ
 ると見へしが眩む眼に氣も亂れ、同じく池へどうと落

互ひに助け引揚んと、抱き上ればどうと伏し、搔上れ
 ばかつばと伏し心ばかりを力にて、なふ奥兵衛様く、
 お龜くと呼返す、絶へく切るゝ息の下、此世から
 なる地獄かや、哀れ果敢なき、三重有様なり、地疵の
 口に水入て女は生年十五歳、時も臯月の菖蒲さく沼の
 泡とぞ消にける、地夫も死なんと脇差を尋ね漂ふ朝嵐
 里人折あひ、すは心中と飛入りく、夫婦をとつて引
 上る女は死して池水も、みな紅に名を留む、男は生て
 生がひのかひもあるかや蜷川、跡白波とぞ成りにける

(212)



あを
心中
卯月の潤色

上卷 末期の道行

江月フシ今捨る、身にも恐ろし犬の聲、辻を隔て見返れば、あれで生れし町所、家の馴染もフシ十五年、其春夏の此月は、祝ひ月とて物忌ひ、フシの字をさへも嫌ひしが、死して死骸を知る人に其死耻も包ましく、其方の鬢亂れずや、いや我よりもおの様の、鬢撫附けて搔きなでよ、死んだ跡迄よい殿と、人に言はせまフシほし明り、今宵の月を月々に、待ちしも遂に引きかへて、チクリ冥土の使我々を待つらん物と搔きくれて

●末期の道行 此の上巻末期の道行は、「卯月の紅葉」の大切の一段を其の儘用ひたるものなり。但し終りの「哀れは、つき有様なり」以下の文に少しばかり補綴あり。

(213)

泪曇りの十七夜、フシ二人が袖に宿しけり、よしや地獄
 へ墮つるとも、たとへ佛になるとても、必ず契り米屋
 町、本町筋の軒深く、思ひ染みたる中なれば、埋まば
 同じ安土町、生れ變りて又いつか、娑婆の便の備後町、
 思へば我も元服し、私も若いに鐵漿つけて、のがれし
 寨のかはら町、三途の瀬戸の淡路町、超ゆれば親の古
 里の、名にも別るゝ平野町、曙近き時太鼓、地どうく
 しゆ町、フシこれやこの修羅の太鼓の響かとともに驚く
 袖と袖、抱き寄せつゝ泣くばかり、聞けば私も母様の
 三十過ぎての初子とや、其譲りかや馴初めて一夜離れ
 た事もなく、交す枕に子種のないか、チクリ是も産すの
 數ならば、根を堀る竹の伏見町、高麗橋の西東、床も

定めぬ立君はこれも世渡る習ひとて、浮世小路の細き
 聲、唄ふてかへる其歌の、品ある中にも來ぬ人を、ま
 つほの浦の夕風に、やくや藻汐の身を焦がす、夫は吾
 妻の物語、地耳に聞きたる計りぞや、そもじと我は難
 波津の、貴賤群集の見るめかる尼ヶ崎町くはしよ町に、
 はや北濱や中の島、明日は天満の橋々うりて、梅田の
 梅田の堤をそめし、紅葉傘屋のな女夫の心中、男廿一
 お龜は十五、年にあはすりや、いたづらくじや、サア
 繪双紙え、地餘所の口の端、フシア、餘所ごとに買求め
 ては慰みし、此身の果を讀賣に、長地誰が節つけて田舎
 まて、唄ひ流さん蜷川、水も濁りて此世へは、いつ歸
 りすむ根なし草、ゆんでは無常の燒草と、惜からぬ身

はおしからず、灰となさふか此の肌、煙となるか此の形、地惜やいとしや悲やと、引合ひし手を猶締めて涙の限り泣きつくす、森の小鳥川千鳥かつほう鳥も聲さびて、早や東雲も近付けば小田守る賤に忍ばんと、右へ下れば網舟の目にやかゝらん行く先は、早曾根崎のみやづこの朝清する折なれば、今は詮方夏草の、人目堤の下蔭を爰ぞ夫婦が最期場と、フシ泣く泣くやすらひ立ちにけり、お龜は夫の顔を見て、連立つ冥途の道とは知れど、今今生の別れと言ひたい事の何やらが、胸にはあつて口へ出ず、飽く程顔が見て死たや、心な短夜と、フシ身を投げかけて泣きゐたり、ア、愚や愚痴や淺ましや、永き來世があるぞかし、去乍ら心に懸

るは其方の父御、二人ともなき一人子を憎や聲めが殺せしと、さこそ恨み憎しみの、是罪障となるぞとて、共にひれ伏し泣きければ、いや父様は男氣の思ひ諦め有るべきが、いとしや在所のお袋様姑なりとて一日の給仕へした事もなく、大事の子をば嫁故に、失ふた殺したとお叱りなされんこれ一ツ、目の不自由な伯母様の、力と成るはこち女夫、さぞ今頃は泣悲み眼でもまはぬか、どうしたと胸に塞がる是二ツ、又母様の十三年觀音經を書きませふ、佛になつて下さんせと墓に向ふて約束の、是が違ふた何やかや斯まで重き罪科の、閻魔の前には黒鐵の帳に付くと聞くものを、よい所へよも往かじ、火水の地獄も厭はねども、夫婦別れて行

かふかと、是のみ猶も迷ひぞと聲もおしませず歎きけり、
 道男は力をつけ、詞一つに行かふと別れふと皆一心の
 向け様ぞ、氷の地獄火焔の地獄劔の山へ登る共、取交
 したる手は放さじと、心強くは言ひけれどまだ蒼む花
 出る月、玉の様なる若い者若い女の頑是なさ、宥めら
 るゝも宥むるも分て分たぬ涙なり、あれ早や東も白ふ
 だり、サア念佛と云ひければ、心得たりと懐より髮剃
 二挺取出し、これも母様の額たれとて譲りなり、私は
 これで死たいと泣くく、出す其の中に、向ふの野道を
 人通ふあれよくと心は急く、二挺の髮剃一つにとり、
 南無阿彌陀佛と引寄せれば、お龜は常々信仰の南無觀
 世音菩薩様、母様の戒名きやうよじゆりん信女、一つ

蓮に導き玉へ、南無觀音様觀音様と手を合せて待ちけ
 れ共、男は目くれさし俯向き、只泣くより外の事ぞな
 き、エ、憂目を見せて何事と、夫の手を取り我が咽喉
 に押當れば思ひきり、南無阿彌陀佛と笛のくさり、髮
 剃の刃も折れよと一剗りは剗りしが若き者の悲さは、
 とゞめの急所を知らずして、まだ息絶へず悶ゆるを、
 疵の口を隠さんと抱の帯をくるくると、二三べん引廻
 す、憂目の程ぞふびんなる、我も聴て追付かんと咽
 喉にあつる髮剃の、刃は鋸と折砕け、皮肉ばかり切れ
 けるを、力を入れて突きけれどもとほりつへうはなか
 りけり、地南無三寶と髮剃すて傍に拔置く脇指の、鞘
 を持つて引き上ぐる鐔は重し手は弱る、はづんで刃る、

●三重以下の文句 前、卯月の紅葉、末期の道行と多少異なりたる所あり。紅葉の文句を次に出す。三重「有さまなり、疵の口に水入て、女は生年十五歳、時も早月のあやめ草、ぬまのあはとぞ消えにける。夫も死なんと脇差を、尋ねたよふ朝嵐、里人おりあひすは心中と飛び入り、夫婦をみつて引上る。女は死して池水も、みなくれないに名をといひ、男はいきていきひの、かひもあるかや蜺川あと白浪とぞ成にける。

勢ひに脇差ぬけて樋の口の、井出の水草の漲つてざんぶとこそは沈んだれ、エ、しなしたりこは如何にと、這下る堤の露、零れし血に足滑り、池へどうど落ちたりけり、池は深くて泥土深し、底の脇差探ねかね、浮きぬ沈みぬ漂ひしが今を最期の眼にも、夫を思ふお龜が心引揚げんとや思ひけん、はふく岸によると見へしが眩む眼に氣も亂れ、同じく池へどうど落ち互に助け引揚げんと、抱き上ぐればどうど臥し、搔上ぐればかつばと伏し心計を力にて、喃與兵衛様く、お龜くと呼交す、絶へく切る息の下、この世からなる地獄かや、哀れ果敢なき、三重「有様なり、朝出の土民が見つけ出し、ヤレ心中と呼ばはる聲に、里人おり合

●三十五日 お龜の死せしより三十五日に當るをいふ。

ひ池に飛び入り引上ぐれば、女は死して眞菰草菰や席に死骸を埋む、男は淺疵ながら死、殺してくれ死なしてくれと、泣叫ぶ間に縁者一門駈付けく、北久太郎町心齋橋古道具屋の跡取、聶養子と取々に見物人の山をなす、斯てはすまずと與兵衛を駕籠に打乗せ、ながらへしかひも有るかや蜺川、跡白波とぞ成りにける

中之巻

廣がりし、浮名は何と、地すぼめても、傘屋夫婦の心中と、歌にうたはれ繪に賣られ、或は狂言浄瑠璃のフシ三十五日に早なりぬ、父長兵衛は一人子を敢なくなせし其悔み、聶與兵衛が疵も又立賣堀の伯母諸共

●びらり帽子 *
 ●加賀笠 *
 ●大振袖の後帯 いづれも娘の風俗
 ●肩がいはる 威張れば自から肩がいはる故にしがいふ。肩身の廣いこと。

に、傳三兄弟引連れて河内の親の手に預け、天王寺の東門を、大坂の方へ歸りしが、地下女のふりは神子町を見遣りてわつと泣き出し、申伯母御様お今女郎、今迄は物見見物物参り、又は此のよな時節でもお龜様も打揃ひ、地びらり帽子に加賀菅笠大振袖の後帯、いかな者でも見返りてお供に付いた私等迄、ほんに肩がいかつたに大事の花を失ふて、物足らずなお供には歩けど足を引戻す、何時やら爰の神子町へ夫がお供のし納か、冥途の道の一人旅誰がお供しませふぞ、おふり何如じや斯じやと愛想らしい聲付が、耳に残つて有る様な元結一筋紙一枚、買はずに貰ふて遣ふたものお龜様に別れてから、五分で買ふた塵紙を涙に拭ひあげた

●文庫の蓋に梓弓 口寄巫子神おろしをする時には、先づ文庫を前に置き、其蓋の上にて梓弓を掻き鳴らし、弦音に生口又は死口を寄するなり。(前編、口寄巫の圖参照)
 ●お志の精霊 志す佛といふに同じ
 ●お十二銅 昔し神佛に賽する時白紙に錢を包み中程を捨てて捧ぐ其の錢を普通十二文に極めたり。(勿論上下の差あれど故にこれをお十二銅とも又お拾りともいへり。

とて、フン口説立てぞ歎きける、伯母も涙の乾かぬに又云ひ出して泣かしやるか、まことに何時ぞや口寄に此神子町へ来たと聞く、それも斯なる約束かや、最期の時は親伯母に云ひ残したい事もさぞ、問ふて取らせんいざ去らばと、冥途の闇の黒格子、チクリつじがもとへぞ立寄りける、フン神子の内には、心得て茶を持つて出る煙草盆、文庫の蓋に梓弓おくより神子も立ち出て御祈禱か口寄かお心ざしの精霊は、地目上か目下か古い佛か新佛か、神おろし致してはお十二銅が一包、御さき拔が百二十、フンお望み次第と云ひければ、ア、ア、禮錢はどうなりとも、三十五日の新精霊、荒血の上で死したる人、よう寄らつしやれ寄り給へと、おのお

●御さき拔 御潔拂のとも。六月の末なればみぞき拂ひをも兼たるものなるべし。
 ●荒血 お龜が及に伏して死したればしがいふ。
 ●千早振 神の枕詞。みそぎ拂は神に縁あれば用ひたるものなるべし。是より以下巫子が祈禱の詞なり。

●更科や伯母 屍を晒すといふより更科伯母とつけなるなり。更科姥捨山共に信州の名所なるると人の知る所なり。
 ●父御前 母御前より轉じたる詞但していごぜとは餘りはず。口寄などの口吻なるべし。
 ●我めい月 前に姥捨山のとあれば、我姪を名月につけたるなり。
 ●不慮の死 思ひよらざる死。變死などをいふ。

の珠數に手を掛けて聽聞するこそ哀れなれ、千早振る御さき拔の道清め、天清淨とは水火の清め、地清淨とは家内の清め、内外六根清淨とは世に亡き魂の道しるべ、六道四生のフシ清めぞかし、忝くは在せど神と佛は夜と晝、娑婆と冥土は日光月光出るも入るも同じ道娑婆往來八千度釋迦の子神子が梓弓、此弦音に寄來たは梅田に屍さらしなや、伯母様の手向ありがたや懐しの父御前、合の枕の與兵衛様忘れがたなき古は、生口寄せた我なれど、今死口に寄り人が、語りたそや問はれたやなふ、梅田に屍さらしなとは我めい月の面影よなふ、地姪一人伯母一人何とて我に知らせもせず不慮の死をめさつたる、目の見へぬ我なれば フシをば

●心中の作法 心中者に對する法律なり。

捨山か恨めしや、調山の枯木の一本立母なき身には伯母様を、天とも地とも頼めども 地ふちの木柱茅屋の雨、人こそ知らぬ屋の内に、直で立つたる人はなし、先へござつた母様の第三年も立ぬ間に、出船は遠く入船の親なるは世の習ひ、烏帽子寶の親父様内の今めに廻されて、こちと女夫は雨夜の星、何處に有るやら無いやらで、死なねばならぬ内の様語れば親の懺悔なり、下された緋縮緬形見になれとの端縫か、我名は苔の下紐も與兵衛様はおいとおしや、六尺だけに存生て二度の死をなされふか、二度憂死 地なされふかとフシ是れが迷となるはいなふ、調子、伯母が歎もそれ一つ心中の作法にて、死損なひし片々は試物になると

(226)

●比翼連理 比翼は羽を比へて飛ぶ鳥、連理は木理を連ぬる枝のこ



聞く、與兵衛が疵を養生し本復したる其後に、試物になるならば伯母は何とならふぞや、調和女も伯母が可愛くば片時も早ふ一道に、地取殺してはなせたもらぬぞ、いやなふ世間の心中と夫れは違ひがあらがねの、金銀づくの勤の身奉公人や主ある人、娘子などの添はれぬ中、狼狽死なぬ心中は、人殺同前の罪に沈むも、フツ世の作法、幼稚馴染の此方女夫、比翼連理の中はよし、何に不足は無けれども内では誰が點を打つ大かまの犬めらに、懲果て死ぬる身を云は、面々じかいとも、心中の外の心中ぞや、町衆在所世間へも此歎きを云ひ分けて、與兵衛様の命を助け、道心出家させまして、朝晩回向が受けたやなあ、調そこにつくば

(227)

にして、共に夫婦の契り親密にして一身同體なるに譬ふ。白樂天の長恨歌に「在天作比翼鳥、在地願爲連理枝」。
●點を打つ 和歌俳諧などの批判より出し語。批難するも。
●犬鎌の犬めら お今を罵つていふ。犬鎌は曲つた心のこ。犬めは畜生といふに同じ。
●道心 佛門に歸依すると。出家といふも同じ。
●千僧萬僧 僧を度して供養するに、千僧萬僧と僧の数が多ければ多い程功德多しといへばなり。
●酸でさいて飲む 酸でさいるとはいためるの意、目の敵となつて口やかましく詞むとにいふ。

●死人に妄語 妄語は虚言を吐くこと。

●幡天蓋云々 幡天蓋袈裟等を上て亡き母の跡を申ふどころか、母の残して行つた着衣裳までもがり取りたりとなり。

ふ兄弟の犬どもを、追出して下さらば、千僧萬僧百萬僧のとひ弔ひにもます鏡、黄泉の曇が晴らしたやなふ、調いや是れなふお龜様、女夫の衆が此今を酸でさいて飲む様に、言ひたいがい云籠めて死でもまだ云ひ足らぬか、榮耀が餘つて此方衆がはたへ死ぬるを己兄弟が知つたか、それに何じや兄弟の犬めらとは、チ、私や犬じや黒犬じや、地試物になる與兵衛の身體をがりくくくと噛でやろ、梅田堤でそなたの死骸、噛いで残り多いわいなふ、地なふ死人に妄語はなきぞよと、恩を知らぬは犬畜生身の皮剥いても母様の、御恩を思は、幡天蓋、袈裟の一重も上げはせず、着衣裳までももがり取り、家一杯に荒鼠、父御を誑す見苦や、

●旦那まさり 主人にもまさりたる意。
 ●提燈に釣鐘 一方は輕し、一方は重し昔より不釣合の縁談に譬ふ。

●ゆふつげ鳥 鷄の異名。

●うらはす 弓のはづのこ。

●邪見者 慈悲なく人に對して殘酷なる者をいふ。

詞それに弟の傳三めが旦那まさりにとぼし立て、提燈に釣鐘と主ある我が袖袂引き、與兵衛殿を失ひて夫婦になつて家の跡、地繼がふと云ふたを忘れたか、此方等夫婦は下人にて今兄弟は旦那顔、車は海へ舟は山皆逆様の憂さつらさ、語れば親の恥晒し、云へば詞のくずいをの、夜の衣の我夫の 地命を助け出家となし、家を晦ます黒雲を、フシ拂はゞ、晴る胸の月、地守の神とゆふつげ鳥の別は又の逢瀬あり、今は返らぬ三途の川影は留らず手に取られず、冥土の使繁ければ、浮世の名残是迄と、梓の弓のうらはづに弦走して失にけり、地伯母は涙に沈みながら、神子の前とも思はれず、詞長兵衛の邪見者亡者の寄口聞きやつたか、我は其方

●合カ * 輕薄、追従 輕薄は思慮舉動のそはくして落着ぬと、追従は人の後を附隨するも、薄情にして語ひ多きをいふ。

●内のさだつ 家の様子、即ち不取締の模様を見るの意。此の伯母の詞、詠り多く解しがたきものあり。
 ●摺み面 慾面といふに同じ。
 ●せこめ廻す 虚使するとなるべし。

の姉じやそや、身こそ貧なれ一文一錢合カは受けまいし、何輕薄が言ひたかろ 地現在弟に殿様付け、内外の者に追従するも母のない姪子共可愛がらせふ爲はつかり、月に一度しひて二度、三度とは、フシ往かねども地内のさだつも見取つた、此摺み面兄弟が、お龜女夫を踏付にせこめ廻すと云ふ事を、盲目でさへ知つて居る、其方に二つ眼は無いか、但し知つての指圖か、お龜は其方が死した、お龜を返しや姪返しや、如何にてかけが可愛とて、我子に思ひ返るとは、酷いそやつらいぞやとせき上げせき上げ泣き叫び、傍なる竹杖追取りて、姪の敵と長兵衛を、散々にこそ打つたりけれ傳三も今も絶り付き、是申伯母御様、詞人中と云ひ女

●分立 別に據ると。
 ●公事みや 公事は訴訟の事。みやといふは公事と聞と同音にて聞は宮より出るゆゑ、俗に訴訟の事をくじみやといへり。
 ●貧の病 「貧は病より苦し」又「四百四病より貧の苦み」などいふ古諺より取れり。

●胸慾 貪慾の訛りかといふ。殘酷非道の事。

●盲目打 目が見えされば何處と嫌ひなく無暗に打つをいふ。

中の身如何に弟御なればとて、地近頃非道千萬ともぎ放す手を振解き、ヤア非道とは誰が事、其非道と云ふは己等兄弟、同じ女子と生れても、己等とは違ふたぞ善悪は嚙分ける、エ、扱此伯母が手前ともかうもするならば、お龜夫婦を引取つて分立て商ひさせ、公事みやしても己等に、がやく口を利かせふか、貧の病に肩身もすぼり、可愛やきよはな甥姪を、踏付にさせたよなあ、せめて片目見ゆるなら、起居素振に氣を付けても、かふやみくとは死せまじ、其胸慾な心からは二人が死に出る體を見ても見ぬ顔しかねまい、恨しの者共やと、盲目打に擲り打ちく、フン聲も惜まず泣きけるが、地不憫やお龜が存生に、己等が奢る面叩きた

●落居

事の落着するをいふ。

からふ打ちたかろ、若い身なれば齒ぎしみして堪へた心思ひやる、是はお龜が打つ杖と折る、計りに四ツ五ツ、又ちやうくと打ちつけて、今は打つても叩いても死んだお龜が歸るにこそ、よしなき罪を作りしと、杖をかりりと投捨て、前後不覺に伏沈み、聲を計りに歎きしはことわりせめて哀れなり、至極に詰り一言も傳三兄弟顔を下げ、ふしめになれば長兵衛もやうく涙を押止め、調道理とも尤も共皆某が誤なり、此上は身に替て與兵衛が命を助け、出家させ娘が願を立て申す、地落居の後は今兄弟家を追出し申すべし、外聞と云ひ親の身でのめく、生て居る心、伯母御推量遊ばせと、又さめくと泣きければ、ヲ、夫はせめても其詞

違はぬ様に、頼むぞや、調ハ、神子殿へも面目なや、
 いつぞや爰へ生口寄せに参つたげな、地美しい娘こそ今
 大坂の口の端に、かゝる梓も縁ならめ、拜んで下され
 頼みますと、出れば神子も門送り、いとしば様やと諸
 共に思ひの数も百廿、袖に涙を包錢繋がる因果や、三重
 巡り行く、フツ月にも日にも、地秋風と捨て果てたりし
 與兵衛が、生がひも無き身なれども、親伯母の心黙止
 されず、髮刺こぼし發心遂げ、妻の菩提も我後世も、
 助け給へと云ふ文字、其名を助給法師と改め、二度難
 波の故郷へは踏返さじと足曳の、大和の國平群谷、大
 念佛派の庵室に、フツ知邊を求め閉籠り、妻の位牌の手向
 草、地ゆうくたる谷に下りては去此不遠の水を荷ひ

●足曳 やまの枕詞。
 ●平群谷 大和國平群郡に平群山あり、此の山中のなるべし。大念佛派の本寺は大和に七ヶ寺あれども、庵室とあれば末寺なるべし。
 ●ゆうく 幽々なるべし。深遠の貌。深山幽谷など。

ばんくたる山路に薪を拾ひては、十萬億土の月をよ
 ち、チ霜に憧れ霞に伏し、櫻が閉さす柴の戸も、躑
 躑にあけて今年も早、卯月半ばになりけり、地相住
 の道心は二三日以前より、石山参りの留主なれば、助
 給一人佛前に心も細き鐘の聲、ろさんの雨の世捨人、
 捨ても捨てぬ面影は夢ともなく現とも、無人爰に有り
 く、地昔を見るも、次第、歸るさ知らぬ死出の旅、
 露の仇駕籠、フツ急がん、地戀と言ふ其たう網にからま
 れて、浮みもやらぬお龜とは、フツ外には人も水くらき、
フツ澤邊の螢、フツ稲のとの、影かあらぬか簾のひまに、
チクリ漏るは卯の花白妙の、フツ雪のな、振袖ちらくと
 な、ありし昔に奈良團扇、フツ風かるくと、フツ駕籠昇が、

●ばんく 盤々、めぐりくたる形容。
 ●十萬億土 極樂浄土をさす。佛説に極樂は此の娑婆世界を去ると西方十萬億土にありと。
 ●霜に憧れ霞に伏し 俗塵を離れし生活をいふ。
 ●石山参り 近江國石山寺。西國三十三所第十三番の札所。
 ●ろさんの雨 廬山の雨は白居易の詩「關者花時錦帳下、廬山雨夜草庵中」とれり。白氏は廬山の邊に草庵を結びて住めり。ある雨の夜、前句には朝に在る我友の榮華にてこるさまを賦し、下句に我の山莊に雨の夜淋しく在るをいへり。

●たう網 とあみ(投網)のと。

●おぼろ駕籠 藤籠とさながら幻の如く、與兵衛の眼には駕籠と見えながら、現實ならぬをいふ。

●とほん 氣抜け、放心の體。

●空耳 何となく人の來るけはひ、溪流の音や或は自分の耳の故かと疑ひしなり。

●魂魄に氣を奪はれる 宇頂天と

地昨日の旦那今朝の幻、夢の浮橋一つ橋跨げじや合點じや、跨げじや合點じや、手にも取られぬおぼろ駕籠姿の山に肩替る、賤が袂も幽なる、地折節助給は念佛に氣を屈し、茫然と眠けざし物に化されたる如く、うっかりとして表を見れば、山家に見馴ぬ女中駕籠、不思議と思ふ氣も付ず、身をも所も打忘れ、フッとほんとしてぞ居たりける、地細谷川の小石原息杖の音かまびすく、川瀬が鳴るか空耳か、女の聲にて高々と、詞北久太郎町古道具屋笠屋與兵衛様と申すお方は、此邊では御座らぬかと、地尋ぬる聲と諸共に、フン駕籠は庵に近付きたり、地助給は元より魂魄に氣を奪はれたる夢心地、詞チ、これこれ其與兵衛は爰じやくと、地扇

●櫛の葉の水 櫛は墓前に捧げる花、關伽桶などの水をいふ。

を上げて打招く、ヤレく嬉や、彼處じやげな、駕籠の衆頼みますまちつと急いで下さんせと、機嫌よげなる高笑ひ、程なく駕籠は庵室の、柴の戸口に昇据ゆる、地簾を上ぐれば、妻のお龜、莞爾なる緑の眉、芙蓉の目元わさくと扱ても熱い事かな、それそこな櫛の葉の水一つ、下さんせと、汗押拭ふと見へにける、詞いやいや水はいらぬもの釜の下を焚付けふ、して先今日は駕籠に乗つて、何處へ行きやつた事ぞと云へば、さればいな、今日は四月十七日觀音様の御縁日、此方様と父様と中のよふなる願立に、二十二社廻り仕まして、其次手に神子町の、黒格子お辻の方へ在所の衆が呼ばしやんして、一寸逢ひに寄りました、地去年こなさま

●おりのすだれ 降りてゐる簾なり。
 ●亂れて失る 掻き消す如く失るをいふ。
 ●藜の羹 山中などの質素生活の状態をいふ。

の生口を寄せてから近付になり初めて、再々私を呼出して父様にも伯母様にも、折々は逢ひまする、神子殿さへ合點なれば、何時逢ふと儘なるに、なぜ此方様も折々は、呼出しては下さんせぬと、そゞろに咽ぶ恨みの涙、世に亡き人と氣も付かぬ、夫の心ぞ哀なる、地ム、先駕籠は預からふ、爰へ通りやと呼びければ、嬉や誰もなさそふなど、裾を搔取る身も軽く、おりの簾捲き返す、フッ駕籠は、亂れて失にけり、地助給内に案内し、調是れ見や今は此身持、結構な事はなけれども、地浮世の世話を餘所に見て藜の羹かみふすま、先盗人の恐れなく寢覺がよいと云ひければ、お龜は庵の體を見て、ア、ほんに扱も氣樂な住居じや、釜一つ

●しみふり 揉み瓜のと。
 ●秋茄子 秋茄子嫁に食はずなといふ古諺あり。
 ●相伴 他人に従つて馳走に預るを相伴といふ。
 ●世界の樂 日本一の樂といふに同じ。

鍋一つ谷から水を汲んで来て、山から柴を折つて来て米ごしくと洗ふて、組板に白瓜菜刀取て、てきくくやてきくくくや、てきくくしやんともみふりに、なれく、茄子秋茄子嫁を譏る姑はなし、相伴は如來様火吹竹は一本、火箸は二ほん國中に恐いと思ふ今めは居ず、此方様と只二人寝たけりや宵から長枕、寝ともなくば起通し、誰が叱らふとも思はゞこそ、世界の樂とは此住家、女夫一所に居る内に、切て一日片時でも斯した暮はしもせいで、今是が何になる何ほ此住居でも、女房がなふては些と事が缺けませふ、調鍋蓋と女房は無ふて叶はぬ筈なれど、鍋蓋あつても女房が無い事の缺けぬは不思議じやまで、ほんに忘れた其筈じや

●けし程もない 少しもないの意。
 ●うさん 疑はしきを。
 ●拷問 事實を白状せざる罪人に苛酷なる肉刑を課して白状せしむるをいふ。

●振かつめ 振かつめは振種つめ袖にてそなたの色は若いのが年増かと詰りたるなり。

地道具と女房は有合せ、尤もじやく道具屋の娘じやものと、とんと背けて身をすねて、フシ口舌仕掛くる目元なり、地色氣を離れた道心も、何様やら心浮いて来て、詞ヤアいかふ口が上がつたの、斯して居ても面白い事けし程も持ちませぬ、うさんな事が有るならば拷問なされと云ひければ、それ其口が憎いはいの、此方覺へがござらぬか、立賣堀の伯母様の聞けばあの奥兵衛は、家の茶が飲み足らぬか茶屋へもちよこく遣ふと有る、其詞を覺へてか、夫から尋ぬる折もなく、今まで胸に溜つて居る地穿鑿せふ計りに、今日は遙々來ました、茶屋で此方の參る茶は新造の振かつめ茶か但は白の白茶か風呂で焚いた煎じ茶か、私が様な薄茶

●白茶 白人の毛。
 ●風呂 湯女の毛。

●こうにもたぬ こうは功、役にもたぬの意なるべし。

●愛着戀慕 愛着はかはゆしと思ひ込む。戀慕はこひしたふと。父子夫婦の間に起る念。

は、交した詞も醒切つて水臭ふて吞まれまい、互にこひ茶の初昔私は忘れは任せぬと、衣の袖にひつたりと、フシ抱き付いてぞ泣きにける、地助給打ち笑ひ、エ、こうにも立ぬ格氣じやなふ、詞今は左様の色茶もな、く只お茶湯で暮します、地去ば釜を焚付けてお茶湯一服供へませふと、火打箱引寄せて、はたくと打ちければ、お龜すつくと立上り、なふ熱や堪へがたや、愛着戀慕の迷の火焰、縁に引かれて石の火の身を焦す浅間しや、是迄なりと駈出る、地我を捨て何處へぞ、暫しくと縫れども、影も形もなき人の、ありとは見へてその原や伏屋に立てる我妻の、フシ位牌に隠れ消えにけり、地ヤレお龜女共、お龜くと尋ぬれども木精許

●中有の闇 佛説に人の死後七々四十九日間は婆娑を去りて未だ極樂淨土にも達せず、即ち兩途の間に迷ひをるといふ。此の期間を又中陰ともいふ。

●むかはり 一週年のと。向きかはるの意かといふ。此淨瑠璃解題

に姿もなし、ま一度顔を見せよかし、つれなの人やと
 かつばと伏し、消入りく、歎きしが、やうく正氣
 つき、調ア、狼狽たり南無三寶、思へばお龜は死した
 る者、扱は魂魄止まつてまざく、詞を交せしか、地不
 便の者の心やと、又咽び入るばかりなり、地エ、口惜
 や淺ましや去年一所に死ぬるならば、迷ふともともに
 迷ひ浮むともともに浮むべし、つれなくも死に後れ、
 中有の闇に迷はせし、調今出家とはなりたれ共、智識
 智者の身でもなし、文盲不學の青道心、念佛回向なし
 たる逆、亡者の功德によもならじ、地今日は卯月十七
 日此の命日の明けぬ間に、今宵の中に自害して來月の
 むかはりは、未來で一所に附添はんと胸を定めて死を

にも述べし如く、寶永四年四月「卯月紅葉」出で、「潤色」は其の六月に出しものなるが、しかし淨瑠璃には、むかはり即ち翌年の同じ月に助救が自殺したる如く趣向立たるものと見ゆ。

急ぐ、戀しき人は先にあり、此世に残す心はなく、涙
 もこぼれぬ死用意、無慘と云ふも愚なり、地ヤア待て
 暫し大坂の伯父在所の親、恩深き伯母のあり、狂亂し
 たりと歎きをかけ、不孝の罪も恐ろしや、一筆づゝの
 書置を残さばやと、佛前の經机引寄せて油も細き燈火
 の、消ゆる間近き我命、心あまりて事足らぬ、筆
 の、すさみぞ哀なる、フシかゝる所に、地相住の道心石
 山より立歸り、調何と助給御無事なか、今下向致した
 やあえいと、地平包どうと下して休みける、助給はつ
 と思ひしが、調イヤ此坊主はいろはのいの字も讀書な
 らぬ幸ひと、まめで下向羨ましい、今にいかい参りか、
 在所の文を書きかけた釜にぬるみも沸いてある、洗

●桶の上の切荒布

●齋非時 *

足して休息あれと云ひつゝ筆を早めける、道心何の氣も付かずヲ、構はずと遊ばせ、詞扱石山の繁昌京大坂がうちあける、ヤア夫に付き戻りがけ大坂へ立寄り、此方の里へ見舞ふた在所にも何事なく、長兵衛殿も御息才、立賣堀の伯母御から 地念比の言傳進上物を渡さふと平包押開き、來月の十七日は、お龜様のむかはり、盛物になされてと是れ菓子袋、お齋でもなされふばと、大坂の名物ひの上の切り荒布、嵩高な計りて錢安な物なれど、是齋にも非時にも重寶な、一分が二ツ届けます、梅雨も近く土用前、喉の疵が發つたら、此藥を參つて随分命延はつて、伯母様の後世菩提頼むとある言傳、詞是れは又白縮緬のしゆきん帶、衣

●おろり

おろりかの詠り。

●合縁氣縁 *

の上によからふと氣の付いた伯母母様、地必ずおろかになさるゝな、幸ひ文の次手なり、皆々慥に届いたと念頃に遊ばせ、愚僧も一宿住り様々御馳走忝ないと、一寸入筆頼みます言傳どもは明日、長道中の草臥我等は最早休みますと、我事計り言ひ仕舞ひ フシ奥に入りてぞ臥にける、地此間に助給は書置細々と書終め、伯母よりの贈物一つに取つて押戴き、位牌の前にも供養して暫し絶入り歎きしが、詞扱もく難有や役にも立たぬ甥一人、ある時は氣を痛ませ心を盡させ身を碎かせ、地苦勞の上に苦勞を掛け一日盡せし孝行なく、不孝第一の某を勘當不興も仕給はず、如何なる合縁氣縁にや親も及ばぬ御鴻恩、送りも遣らず自害して又も

●堅牢地神 土公即ち地の守護神をいふ。

●奈落 地獄といふに同じ。

●後夜 一夜を二分し、夕より夜半までを初夜といひ、夜半より朝までを後夜といふ。後夜の鐘といへば夜明の鐘なり。

●八聲の鳥 鶉のこゝろ。

や歎を掛けん事、不孝の上の不孝の科日月の怒を受け
堅牢地神は大地を破り奈落に沈め給ふべし、罪業深き
此身體と、我と我身を搔抓り、喰付きて聲を上げてぞ
泣き居たる、地や更渡る野寺の後夜、八聲の鳥も啼
交す、明方も近付きたり、後れじものと位牌に向ひ、
詞是れお龜去年の五月に伯母御より、緋縮緬を下され
て御身と我が肌廻り、自害の耻を隠したり、地時しも
あれ今宵又白縮緬の紵帯、是れも二人が申し受け永き
形見と身に附けん、我も受取る受取れと、位牌のひれ
に結び附け、端を左手にしつかと搦み斯持つたる心こ
そ、最期は後れ先立つとも手に手を取つて行く道は、
只一筋の白縮緬伸ばさぬ時刻只今と、髮剃取つて押當

●人脈筋 脈は念所にて、もしこ
れを絶てば命終るが故なり。

てしが、ア、思へばく、名残惜の伯母御様、身を達者
に長生し後生弔へとて只今も、お薬迄も下されし志を
無下になす、御恨み御免あれ神も佛も御慈悲に、我等
を地獄に沈めても伯母御の二世を助けてたべ、南無阿
彌陀佛と髮剃を咽にがばと突立て、笛のくさを勿切
つたり、まだ死兼て目眩く、苦痛はせじと追取直し、
人脈筋を四ツ五ツ、聲を掛けて刺通し、うんと計りに
かつばと伏し、反つ返しつのだれを打ち、苦む中にも
妹背のしるし、お龜が位牌に抱き付き、むかはり待た
ぬ花橘、昔の人と短夜の、雲隠れして世の人の、袂し
ほるゝ藻鹽草書置に名を 三重残しける

●わたらの長持 漆塗などの下地を堅固に塗るを堅地といふ。
 ●はん櫃 半櫃のなるべし。此の所は「老木却て春を迎へ」の筆法にて、わたらは堅固といふよりも寧ろ古き意味に取るべし。又半櫃は當世向に出来なれど、風呂の下の薪となるを諷したるなり。
 ●老少不定 老ひたりとて先へ死すべきものもあらねば、若きとて必ず後に死ると極つたるにもあらず、即ち老少不定、何時いかなる事に逢ふかもしれずとなり。
 ●會者定離 相ひ會する者は必定して別離有り。經文に「世皆無常、會必有離」とあり。
 ●一河の舟、一樹の蔭 「一樹の蔭にやどり、一河の流を汲むも、皆これ他生の縁」といふ事諷曲「白柏子」に見えたり。「説法明眼論」に、「或處一村宿、一樹下、汲一河流、一夜同宿、一日夫妻皆是先世結縁」とあり。

助給書置 下之卷

調古道具屋與兵衛入道助給、末期に親伯母の御方へ申し残す書置の事、地つらく思へば、老木返つて春を迎へ、蕾める花の先に散る世の習しかたちの長持、嫁に傳はり出来合はん櫃風呂の下の霞となる、老少不定の境會者定離の掟、末世一代教主の如來も、免れがたしと思召せ、それ一河の舟に棹を指し、一樹の蔭の合宿りも他生劫の縁と聞く、況んや親となり子と生れ、伯母と言はれ甥となる、一日養育の御恩は蘇迷廬之山より猶 高しとこそ承はる、まして多年の御面倒 警を取る物なし、殊に去年五月の十七日不慮の御難儀

●蘇迷廬の山 須彌山のこと。そのいろは梵語なり。妙高山と譯す、大海の中にありて金輪の上に據る、日月之に依りて廻り、諸天これに依り、七山七海環列し、高さ三百三十六萬里、縱横また之に同じ。六道四生二十五界、皆此に依りて住せり、山腰に須彌海有り、高廣嚴飾諸山に超出するを以て山王と號し、山體眞金色なるを以て金山と稱す、最頂に帝釋天王の居所ありて喜見城といふ。

●順道 親は子に先立ち、若きものは老なるものより後るゝを是順道といふ。

かけ商 命を捨る身の損銀を、よそめには榮耀者たはけもの、氣違者と人の譏世の嘲、親伯母の御歎き存せぬ我にも候はず、然れども生て居られぬ心中、今更申せば人を損ふ毀ち家の、立つ方もなき夫婦の者、涙で暮らす朝夕は、湯水も喉に錠前の懸硯の海かへ干しても、書盡くされぬ我身の上、二人が胸に埋れ木の身にならずして、誰人か、推量には及び申すまじ、其節お龜諸共に、相果て申す程ならば、二度の歎きは掛けまじき、迎も助かる程ならば、ながらへ出家成就して御恩の伯母様情の親、百年の御壽命過ぎ目出度く往生あそばさば、御菩提を弔ひ奉るこそ、順道とも孝とも申すべけれ、去年はお龜が憂を見せ、今年是我等

●五倫の親 五倫は石塔の土をいふなるべし。即ち次の借老同穴と同意にて、夫婦は土となるまで相親むの意なるべし。

●借老同穴 生きては共に老ひ、死しては同じ穴に葬られんを期する夫婦の契を云ふ。

●鴛鴦の襖 鴛鴦は夫婦中の睦じき鳥にして常に雌雄離れず、人もし其の一を取り去れば、他は悲みて思ひ死すといひ傳ふ。それより夫婦中のよき事に譬ふ屏風といひ襖障子といふ。皆團房の裝飾なり。

●從兄弟同士 從兄弟夫婦なり昔は血統の絶ゆるを嫌ひたれば、從兄弟同士の結婚頗る多し。

●水入らず 夫婦の間には少しも隙のなきをいふ。

●鼠入らず 水入らずとまで眞面目にて、一轉鼠入らずと洒落たり。鼠入らずは今もいふ月棚の土。兎角古道具が附いて廻るもおかし。

が歎きを掛け、お心を苦め申す事、罪に罪を塗長持、孝行の元直に外れ申すなり、去ながら子弟主従父子夫婦、五倫の親み何れおろかは無き中に妻となり夫となり、借老同穴の枕屏風、鴛鴦の襖障子、疵も破れもなき契、今捨賣には成りがたし殊にお龜と我等事從弟同士の水入らず、鼠入らずの竹戸棚、フシ釘も離れぬ中と云ひ、去年最期の折からも、一所と思ふ頼みにて、廿歳に足らぬ女の身、清く相果て候ひしに、我等思はず存命し、チクリ六道の辻に只一人今やくと、フシ左こそ待兼ね申すにや、フシ現に現れ夢に見へ、幻に來り歎く様、見る度毎に片時も存へて有る心、思ひ遣らせ下されとよ、今は此世に亡き妻は二度娑婆に掘出しする、

●無常 人の死生、世の轉變の常なきをいふ。「釋民要覽」に「生滅輪廻是謂無常」人の死するを無常の嵐に誘はれるなどいふ。

●輪廻の塵 佛説に、人の死生、善惡の應報、事物の興亡など絶えず變りて休まず、さながら車輪の廻轉して始終なきが如しとの意。

●無明 佛説に、一痴暗の心體は慧明無きが故に無明と云ふ」と即ち事理の説法に開味なるをいふ。此の愚痴の爲に起る妄念よりして來世の因と爲す。

●穢土は假の世 穢土とは淨土に對していふ。其の地坑坎堆弄穢惡充滿す。即ち娑婆世界をいふ。假の世は此の世のこと。

●有漏地無漏地 *

小道具屋の身にもあらず無常の、風の荒道具、身蓋揃はぬ離れ物、フシ浮世の直打更らになし、輪廻の塵の置古し、地無明の夜市に賣下げられんよりはと、今宵亡妻の忌日を期して去年お龜が死したる髮剃、縁と縁とを合せ砥に掛け、廿二歳一睡の夢を拂つて、せいげつおのれが眉間に施し、今月今日髮剃の、双に滅し畢んぬ、悲きかなや娑婆に親伯母冥土に妻、未來に情現世に慈悲、中に憂身を挾箱、何時の世にかは地一對のひと蓮に生るべき、是れも因果の車長持轟く穢土は假の宿、有漏路無漏路の中休、割籠辨當茶辨當、フシ剥ぬ間の戯れなれば、誰か端に残るべき、たとへ此度存へても重ね簞笥の引出の、一重足らぬ如くにて、お龜な

●下品、上品 (九品の淨利を見よ)

●法界 佛説に一切衆生身心の本體なり、即ち眞如なり、妄念に依りて差別を生ずれども、本不生不滅にして諸佛と衆生との本體なり、所詮外なきが故に法界と名づけ、聖法を生ずるが故に法界と名づくといへり。

ければ甲斐もなし、去年一度に死したりと、思召し切
り給ひ、歎きも悔みも御留め只佛壇に指向ひ、夫婦の
御回向有るに於ては、六尺屏風の隔もなく眞直に受け
取り、先立つ妻の跡繼となり、共に三途のかは葛籠、
一荷に手を取り打ち渡り西方淨土に一文字、越ゆるは
下品下用櫃忽ち上品膳棚に到らんと、思へば最期急げ
共、返すくも伯母御様、御名殘惜き椀家具、法界ほ
かいの御回向偏に頼み奉る、南無阿彌陀佛彌陀佛と涙
を染て書留む、切誦同音 毎日評判朝暮の供養、佛法繁昌
の回向を得るも其身の果報と承はる

傾城反魂香

解題

寶永二年八月十五日初日、近松門左衛門五十三歳の作なり。此淨るりに關する事は饗庭篁村氏の『巢林子撰註』の解題に盡きたれば、其全文を左に掲ぐべし。

此の傾城反魂香は狩野古法眼元信が土佐光信の聲となり土佐氏について繪所の預となりし事實を本とし吃の又平が大津繪のことを交へ遠山が死して後姿をあらはしてうつゝに熊野参りするを反魂香の故事にあてゝ外題とせり。これに名古屋山三不破伴左衛門の二人を出し、三國の歌川敦賀の遠山とて越前に名高かりし兩人のうち遠山をも光信が子として出したれば人物はよく揃ひ作もまた妙をきはめたり元信越前守に叙任し越前法眼とも號したれば其縁に取リて先づ越前に到りて遠山に出會ひてより事起るは順序あり元信厄に迫りて虎を描けば眞虎と現じて其難を救ひ、又平死に臨んで形を模せば石面に徹り

て苗字を許さる、又平の書ける大津繪脱け出て敵を防げば、元信の筆の襖の熊野山遠山と手を引きて登るべし、吃の女房に早口あり廓のやり手に氣轉物あり、佐々木の屋形揚屋の座敷、大津街道、三筋町の大門口、事も人も所もよし、巢林子傑作中の傑作なり、巢林子この又平について吃の研究ありしか後にまた、信州川中島合戦に山本勘助の女房お勝を吃とし、節のある事は吃らす急場の難儀を云解くに琴を弾きて唄ふことに用ひたり。

此篇中の又平女房前の「長町女腹切」の伯母と同じく其名なし、彼は當時の世説に憚りありとも是は架空の作なれば遠慮すべきところなし、此貞婦烈婦夫に女房共と呼ばれ、地に女房とのみ唄はれたるは本意なきやうなり、此作は宇治加賀掾方にも取り外題も其まゝ、語り(勾欄)にかけたるや否やは知れず、只熊野道行の前末を省きたり、また寶曆二年竹本座にて「傾城名筆鑑」と外題をかへ吃の又平の段を其まゝおきてあと少しづゝ作りかへて出したり、此時女房の名をお徳とせり、石面に繪像脱け名字を許され大頭の舞を舞ひ勇み進んで姫君を取返しに行かんとするとき、此までは少々文字をかへしのみ原作通り、將監立て繪像を書いた

る手水鉢を二つに切割り都誓願寺の佛の引事ありて、舌は本心の臍、今石面の繪を切て心の臍を立割つたれば吃る事はあるまじといふ、又平驚きよろこびて舌を廻すに少しも吃らず、らりるれろまみむめも狸百疋棒百本など早口に云試みいよゝ勇んで出行くことにしたり、此改作は吉田冠子なれば我が人形を働かせ榮あるやうに斯くしたるなるべし、此の改作行はれず淨るりにも芝居にも今に原本通りなるは悦ぶべきなり。

名古屋山三の事は、土佐の淨るりに作り、江戸にては歌舞伎狂言に仕組まれ、名優中村七三郎が元禄十一年京都に登りし時もこれを演じて好評を博し、當時人口に膾炙したる人物なればこゝにも用ひしなるべし。

傾城反魂香

近松門左衛門作

●白きを後と花の雪 「論語」に「繪事後素」とあるに據れり。其の意は繪の事即ち彩色する事は、素き下地ありてより後にするといふ意なり。されど此の意義を取りたるにはあらず、此の淨るり凡てが繪師の事に關したれば、繪に縁のある古語を引きたるまでなり。

●聞に北野の時鳥 (要註) 鳴く、とて聞にきた野の時鳥とせしに、鳴く、とてにては疑の詞なりとて時鳥鳴かず鳴け聞かんき、に北野の時鳥として時鳥忽ち鳴しといふ傳説にとり前の見る事より聞事にうつり、北野とせしは後に天神の告ありしことを云ひいだす爲なり。

●はね馬 巨勢金岡は宇多朝の畫人にして、人物又馬を畫くに有名なり。嘗て朝廷に藏むる所の、金岡の畫ける馬、毎夜秋の月邊りに出

次第白きを後と花の雪、く、野山や春を畫くらん、
 地聞に北野の時鳥初音を鳴し其昔、清涼殿に立られし、
 はね馬の障子の繪、夜ごとに出て萩の戸の萩を喰しも
 金岡が、筆のすさみの跡絶えず、傳はる家や畫工の譽
 れ、狩野の四郎二郎元信、丹青の器量古今に長じ、心
 ばへよき男ぶり、親の繪筆の彩色に、フシ生れつきなる
 美男なり、地比は文龜の彌生の空、天滿天神の告あり
 て、越前の國氣比の浦へと旅羽織、我は笠着て大小の、

て、萩を食ふより、勅して金岡に筆を以て畫の馬を繋ぐしむといふ傳説を取りしなり。名家の奇特を叙して、後に大津繪又は畫虎の脱げ出づる伏線となす。

●狩野元信 狩野派の祖、世に古法眼と稱す、足利義政の時の人。丹青は彩色繪のとなれども、一般に繪畫をさしていふ。即ち丹青の器量といへば畫才なり。

●文龜 後柏原天皇の年號なり。今を去る四百七十年、足利義澄將軍の時なり。

●氣比の浦 越前國敦賀郡、氣比の浦は敦賀灣一帯の海濱をいふ。

●でつちが腰 煙管筒を丁稚の腰にさすといふ事より、越の白山にかけたるなり。白山は加賀に屬すといへども、越前との國境にある所より、當時管轄争ひあり、されば加賀の白山といふと同時に、越前の白山ともいへりしなり。即ちこゝは越前こしの白山なれば後者に屬す。

●歸る山 越前國の名所。

●湯の尻峠の孫抄子 湯の尻峠は南條郡にあり。こゝに茶屋あり孫抄子とて抱着の咒を出す。

柄にも袋させる筒でつちが腰の白山も、去歳の縁にか
 へる山、山の頂き青々と、雲にうつらふ月代の、湯の
 尾峠の孫抄子、盛こぼしたる花重、重ねくし旅籠屋
 が、情もあつき爛鍋の敦賀の濱にぞ着玉ふ、地四郎二
 郎一僕を招き、調ヤイ雅樂之介、外の弟子にも隠し此
 所へ下りしこと餘の儀にあらず、近江の國の大名六角
 左京大夫頼賢殿と申すは、佐々木源氏の旗頭高島の屋
 形とて、系圖所領ならびなき大將なるが、將軍家の御
 意を受け、本朝名木の松の繪本をあつめらる、然るに
 奥州武隈の松と云ふ名木は、いにしへ能因法師さへ跡
 なくなりしと讀たれば、地名のみ残つて知る人なし、
 我是をかきあらはし、譽を得させ玉はれと、天滿天神

●敦賀 北國第一の港。古しへは角鹿と稱す、仲哀帝此の地に行宮を設け、筒比宮と號す。當時三韓との外交は此の地において折衝せられたり。

●高島の屋形 高島は近江國の郡名。

●奥州武隈の松 相馬街道の道分にある、二木の松又鼻端の松ともいふ。菅原元善任國の時、館の前を初めて植し所の松なり、其の後孝義の任國の時、之を伐りて橋となすと。能因法師初め奥州に下りし時は此の松を見たるも、後に來りし時には既に松なかりしは、「武隈の松は此度跡もなし、千年をへてや我はきにけん」と詠じたり。此の歌を取りしなり。

●呼ばるゝ (要註)此の初段すべし、諸がりりまた狂言がりりなりされば僕に向ひて云ふが、即ち他人に聲をあけて問ふやうにうつれり、されば原本こゝはシテ、ワキの印あり。

●越前布 牛頭布、島布、割織布等いづれも越前國の名産なり、されば綿も名物の一なりしなるべし。齊藤實盛 實盛は越前の産にて、

を祈りし所に、武隈の松を見んと思はゞ、越前の國氣比の濱邊に行べしと、あらたに靈夢を蒙れども、地それは陸奥こゝは越路、何をしるべに尋ぬべき、あはれ里人の來れかし、フシ物問はんとぞよばはるゝ、ワキ 所の者の御用とは都人にて有げに候、御尋ね有たきとは何事にてばし御座候、シテ御覽の如く都の者、天神の教によつて松を尋ぬる仔細あり、此所にこそ名高き松の候はめをしへて玉はり候へとよ、ワキ 是は思ひもよらぬことを承はる物哉、此北國にてお尋ね有ふならば、越前布越前綿、もしくは實盛の生國なれば、御供の奴の髭にぬる油墨などのお尋ねも有べきに、名高い松とはさすが優しき都人、先當國の名木は、西行が鹽こ

戦死の時白髪を染めて老武者なるを隠し、事既に前にいへり。

しの松、あそふの松若が物見の松、金が崎には義貞の腰掛松、山のを山松庭のを庭松、門には門松酒にははま松、こえたはこえ松ねちたはねち松わり松たい松ぬつぼり松、我等がむす子に岩松長松と申すみどり子もあり、庄屋の名は松兵衛、若い時には相撲取、あか松ぶちわつた様にござ有しが、今老松になられて力ももとより下り松、腰も屈んでゐざり松くと所の人はよび候、ヤア、誠に天神の御告とあるに思ひ當つた、當所敦賀の町に名高き松の御座候、是ぞ京にも類なしと心をかけぬ人もなき、色よき松の候が、もし左様の松ではござなく候か、シテ實にや往來も慕ふとは疑ひもななく我等が尋ぬる名木よ、急いで見せて給はれかし、

●松の門立〔要註〕遊女の門立といふとあり、これより敦賀の遊廊となる。まぶこそ潮の満干なれば情夫に逢ふことさしひきあるをいふ。
 ●誰をか知る人にせん「百人一首藤原興風の歌」誰もかもしる人にせん高砂の松も昔の友ならなくに。
 ●土氣の賤の里 田舎を土臭しなどいへば、土氣の賤の里と鄙下したるなり。よねは遊女の異稱にて米に通へば、田舎は却て都よりもよれの行義はよしとなり。

ロキ いつも夕ぐれごとには此所へ顯はれ出給ひ候、ヤア、早あれへ御出候、我等は御暇給はり候べし、御逗留の間御用の事は承はり候べし、頼み申し候はん、
 心得申して候、地高き名の松の門立立なれて人待がほの暮ならん、町は敦賀のかけ作り、まふこそ潮の満干なれ、誰をかも知人にせん、フシ此さとの、松となりしも、親の爲、賣れ買れて北國の、土けのしづの里なれど、よねのそだちは上田の、水損なしの太夫職名を遠山とよばれしも、人にのほれの戀の坂、おろし歩みの道中は、花の立木の其儘に、フシぬめり出たる如くなり、地雅樂之助是申し見事なものがそれそこへ、それくといへば、四郎二郎、ヤアなんと、松が見え

●はまつた

欺されたも。

●こなさあ

こなさんの詠り。

たか顯はれたか、寫しとめんとふつと立、女郎にはたと行當り、是は借松かと思ふてはまつた、地本の松を尋ねて見ん、でつち來いと行ちがふ、袖をひかへて是申し、此遠國の我々と、京の廓の松様達とくらべさんすが不覺の至り、地しかし不粹な御方には松と見られて嬉しうなし、杉と云れて腹立ず、桑の木とも榎の木とも、こなさあに似合ふた、あほうの木とも見さんせと、むだことなしの云ひ捨は、フシ田舎よねとて笑はれず、地オ、御機嫌そこねし御尤、實々松とは太夫様、我等は悪ふ心得て不調法な御挨拶、まつびらまつびらおわびこと、是を御縁にお知人に成ましたし、下拙ことは狩野の四郎二郎元信と申すわづかの繪書、

●土佐光信 光信は土佐宗家の畫人にして、狩野元信と同時代の人畫所預となり右近將監を経て刑部大輔從四位下に叙せらる。光長光起と土佐の三筆と稱せらる。

さる御方より武隈の松の圖を仕れとの仰、則ち天滿天神の夢想に任せ、此所にて名ある松と尋ねしを、地太夫様との取違へ、是は斯も有ふこと、御了簡ついでにおつきあひもあまたなり、願ひのかなふ便もあらば、御世話頼み奉ると、フシ思ひ、入てぞ語らるゝ、地女郎はつと顔を詠め、偕は狩野の四郎二郎元信様とは御身の上か、恥をつゝむも時による、何を隠さんわしことは、土佐の將監光信が娘なるが、父は一とせ勅勘受け今浪人の憂き渡世、此身に沈むは申さずとも推して泣て下さんせ、詞偕武隈の松の圖は土佐の家の秘傳の繪本、もらす事は叶はねども、昨夜不思議や天神様の夢の告、狩野といふ繪師下るべし、武隈の松を傳授せよ、

●松根によつて云々 「和漢朗詠集」に「松根に倚て腰を離れば、千年の翠手に滿つ」の句あり。

●三木とつらねし言の葉 前の武隈の松を、橋季通が「武隈の松は二

父が出世の種ならんと、地見たはまざまざ正夢と、語りもあへぬに四郎二郎、感心感涙肝に染み、天を禮し地を拜し、懷中の繪筆繪絹をひろげ、サア遊ばせ、フシ御傳授頼むと悦びける、詞いかにも傳へ申さんが、親の許しもなき中に筆取る事はいかゞなり、地ア、何とせん實に思付たり、あの御供の人の立姿を松の立木になぞらへ、笠を枝葉の笠となし、こゝにてまなび見せ申さん、それにて寫しとめ給へ、是そこな奴様、詞こゝへござんせ雇ひましよ、ない、地くく、手ふる頭をふる年ふる松の、松根によつて腰つきも、千年のみどりうつけしは作意なりけり、先歌人の見立てには、一本松を二木とも三木とつらねし言の葉の、それは老

木を都人、いかゞと問はゞ見木と
こたえんと詠じたるによる。

●千貫枝 (箋註) 此一枝千貫の價
ありなど賞する詞、千貫松といふ
名木伊勢にあり、夫等をわけて書
流したるにて、次の筆捨枝なども
筆捨松あればかりしならん。
●かたくま松 肩車松なり、天津
乙女の肩車のやうにかりしと形
容し、次に腰掛枝とはいへり。

木の松が枝なれど、
若木の、やつこの
くく、此膝のふし松のふし、
前へ地すりの下枝に、
ぬつと出せし片足は、
慮外千萬千貫枝、
筆捨枝や久方
の天津乙女のかたくま枝や、
フシこしかけ、
枝の三がい
松、月にさはらぬ枝々の、
さぐれ小枝の松かけを、
サ
ア沖こぐ舟のほの、
ほの見えて、
地さすかひなには壽
福の枝、
をさむる手には不老の枝、
たれて雪見のひか
への枝、
是々これく、
ずつとのびたるながしの枝、
松は非情の物だにも、
つたへし心は色はなほ、
地さな
がら青々條々として、
松のいき木の、
いきくと、
フシ
わかやぎ立る其風情、
地狩野は一點違ひなく書つらね
たる筆勢、
何れをうつし繪、
いつれを立枝、
フシまがひ

●天神様より大夫様 天神様の告
げといふもあれば、それを遊女の
位の天神大夫と洒落たるなり。
●島臺 洲濱の臺の上に、松竹梅
を作り、時結鶴龜などを飾るもの
にて、婚禮の時などの飾物。又蓬
菜ともいふ。

●不破の伴左衛門 不破名古屋の
賴當は、土佐少藤正本、名古屋山
三に出たり、淨るりにては是等を
や早きものといふべし。

つべうぞ見えにける、
地元信家の幸甚たり、
早速歸り
本懐とげ、
此報恩には御身の上父御の事も請取申し、
萬の御禮は本國よりと立歸るを、
是申し、
詞神の告に
任せしからは恩にはかけず末かけて、
情を思召すなら
ば、
地必ず外に内儀様持てはし下んすな、
奴殿頼みま
す、
何が儲く、
調天神様より大夫様、
地追付お二人
連理の松、
中に立たる此松は島臺持ての取結び、
千年
萬年萬々年、
とち付ひつ付松脂のはなれぬ、
中とぞ
三重、
ことぶきし
フシされば江州、
地高島の館、
左京の大夫頼賢卿、
參
勤の上洛有り、
執權不破の入道道犬、
同く嫡子不破の
伴左衛門宗末、
國を預る留守居なり、
御家の繪かき長

●長谷部雲谷 雲谷等顔のこゝろ。等顔は雪舟の風を慕ひ、更に一派を立て、雪舟の別號雲谷を取て姓とす。但し門左衛門の爲めに雲谷が敵役になりしは氣の毒といふべし。

●雪舟 幼にして禪林に入り僧となる。如拙周文を師とし墨繪の妙術を得。大明にて四明天童第一座の班に升つて皈依す。元信より先づ約五十年なり。

●名古屋山三 名古屋山三郎後山左衛門と稱す。尾州名古屋の産なり。初め蒲生氏郷に仕ふ。後辭して流浪し、出雲のお國と親み慶長年間歌舞伎の曲を演す。これ我邦

谷部の雲谷あはたし敷、入道親子が前に手をつかね、
 近頃過言に候へども、某ことは雪舟の嫡傳として代々御扶持人、此高島の御屋形にて、繪筆を取て誰人か拙者が上につき申さん、然るに此度狩野とやらん申す二さい、武隈の松を書しとて過分の恩賞を下され、故參を踏付御前にはびこり剩へ、今日は奥方へ召され姫君様より、御料理を下さると承る、殿様の御留守誰が許しての推參、御家老の仰一國に違背申す者はなし、きつとお仕置然るべしとぞさしへける、調道犬うなづき、づとと寄れ雲谷、總じてこの四郎二郎めは、相役名古屋山三が取持にて召出された、山三は元來御小性立、前髪の酒林で殿を酔せし男傾城、地口はしの

歌舞伎狂言の嚆矢なり、山三及びお國の事を仕組みたるは、淨るりにては土佐の正本の「名古屋山三」及び「阿國歌舞伎」あり、歌舞伎にては中村七三郎の當り役にて、元禄十三年京都にてこれを演じ、頗る好評を博したり。門左衛門が、こゝに山三を出し、七三郎の影響たるを論を俟たず。

●酒林 酒屋の店頭に杉の葉を束れて看板となすものなり。さながら若衆の大前髪を房々したるに似たるを以て、前髪酒林といひ、男色の關係より出世したるとを罵つていふ。

●口ばしの黄な小雀 雀の兒は黄の黄なるより、轉じて乳臭き小兒の稱となり、青二才又は乳臭き小わつばなど人を罵る時にいふ。

●ぬしづく 七百町の領主にありつくをいふ。

黄な小雀が家老並に列り、威を振ふ其山三めを甲にきて、のさばり廻る四郎二郎、我々親子が睨めども、事とも思はぬ奇怪さ其方とても同前たり、又乙の姫君銀杏前は、御愛子なれども脇腹ゆる御臺所を憚り給ひ、田上郡七百町の御朱印を付られ、京都有徳の町人か由緒ある御家中へも、下されんとの御内意故、某嫁に申し請、此伴左衛門に縁邊し七百町をぬしづかんと、あてはめて置いた物姫君狩野めに心を通はし、地今日密々祝言有と、奥目付より聞たれども、御意とあれば詮方なし、御在京の其間は山三めも留守なれば、きやつが方人する者なし少しにても過りを、随分見出せ聞出せ、慮外をせば打殺せ、御留守の間國中は某がさばき

なり、此不破といふ鰐が見入れて餘り程はあらせまい、
 ためして見たい新刀はないか、一の洞か二の洞か、望
 んでおけといひければ、雲谷甚だ笑壺に入り、政道正
 しき御家老様、御屋形のしん柱と、フシ追従たらしく見
 苦し、地かくとは知らず四郎二郎、櫻の間に伺候し、
 御姫君いてふの前様より御掛物を仰せ付られ、持參仕
 り候御取次頼み奉ると、地いへ共入道伴左衛門じろり
 と見たる計りにて、返答もせずねめ付る、ヤアしれ者
 よ、そばには雲谷、いか様我に手を取らするたくみ有
 り、立歸るも不覺なり、幸々、奥へ通路の鈴の綱、ふ
 りはへ引けば鈴の音、チクリおふと、こたふる、フシ女の聲
 宮内卿とて中老の局立出、ヤア狩野殿か、
 地 御姫君様の

お待ちかね、お直の御用も有とのおこと、サア、こち
 へと有ければ、畏つて四郎二郎入らんとすれば、伴左
 衛門聲を掛け、まて、
 地 御家の控を知ずんば
 なぜ物頭には伺はぬ、知て背くか不届千萬、上よりお
 許しなき時に双物を帶し、奥方へ參ること禁制との御
 條目、
 地 あれ大小もいで引ずり出せ當番くと呼はれ
 ば、宮内卿いや是は私ならず、姫君様より殿様へ御伺
 ひ、即京より名古屋山三どの、指圖にて、奥へ召る、
 四郎二郎、何のお咎ござらふと、いへども更に聞入れ
 ず、御留守を預る家老の耳へ、承はらぬ御意なれば、
 殿の御意でも叶はぬこと、
 地 ソレ伴左衛門もいで取れ、
 まつかせと立上る、四郎二郎も身構へしてすがらば切

らんず眼ざし、左右なくも寄付ずサア、わたせくと
 フン詞でおどす計りなり、地時に奥よりお腰元つかつ
 かと出、調是々いづれもお姫様より御意がある、四郎
 二郎殿には直に御用の事あれども、丸腰でなければ奥
 へ通さぬ御法度とあれば、是非に叶はず姫君様此所へ
 御出との仰なり、四郎二郎は御用人、其外の男の分、
 雲谷は云に及ばず、御家老殿を始め御前へは叶はぬ、
 皆御廣間へ立ませい、立ませいとの權柄さ、道犬親子
 無念ながらつと立て、サア雲谷姫君の御前へは、男
 たる者罷出ず、男でもないやつ原に、侍のじぎ無用の
 沙汰と、四郎二郎に刀のこじり、打あて打あて袴の裾
 ふみたくくつて睨み付け、チクリお次の一間にぞ出にける

地御留守といひ女中の邊、なほ穩便に事ともせず、御
 好の掛物梅に泡雪雉山鳥、仕つて候と紐を解いて掛け
 れば、此由披露いたさんにサア先ゆるりとお茶しんぢ
 やと、肩は奥に、あいくと愛想らしき聲々の、男の
 そばへよる事は常になし地の煙草盆、落雁かすてら羊
 羹より、菓子盆はこぶ腰元の、フン饅頭肌ぞなつかしき、
 地物に臆せぬをのこなれども、女中の色に目うつりし
 て、氣を取られたる折ふし、十八九なる脇詰の、後結
 びも格別に、銚子盃前に置き、しとやかに手をついて、
 私はお姫様のおくし上藤袴と申すもの、しみぐお咄
 致しませいとのおことぞや、御存じの通り御手かけ腹
 の御姫様、御臺様への憚りにて大名高家のお望なく、

心次第縁次第と田上郡七百町、御朱印にぎつて殿好
 み、つれないはそなた様、いつぞやより種々と御乳人
 お局、口の酸い程勸めてもどうでもお受ないとの事、
 おいとしや姫君は餘りの事に戀焦れ、私をお寢間へ召
 し、ヤイ藤袴、せめてのことにそちなりと、四郎二郎
 と名を付けて、心ゆかしに抱いて寝よ、そちもおれを抱
 して、姫かはいひと云ふてくれともがきごとがおい
 としき、とんと下紐打とけて、ねる程だく程しめるほ
 ど、二人の心せくばかり、どちらぞ男になりたいと云
 ても泣いても叶はゞこそ、詞なふ大名の手わざにも有べ
 き道具のたらぬのは、地ひよんな物とおむづかる、
 自らにいなせの返事聞切り参れとお使、わたしも一

●改易 *

●にべもなし *

●ごど、不明(變註)には期を押す
の期、もしは期度などかくべき

分立つやうに御返事なされとのべにける、元信額を疊
 に付、冥加に餘る仕合せながら、詞度々御返事申すご
 とく諸傍輩の嫉と申し、欲心にまざるゝこと世間の嘲
 り、よし御機嫌に違ひ改易仰せ付らるゝとて、地御恨
 候まじ御受としては成りがたし、よき様に御取なし頼入
 とぞ云切たる、詞ハ、ア膠もなふ埒あいた、いかにと
 しても上つ方へ左様な慮外申されまじ、少し物に品付
 て、始より約束の女房有と申しなば、御胸のはるゝ事
 も有る去ながら、其女房は何者とごどをつかるゝ念の
 爲、今こゝで私と夫婦かための盃して、とつと前から
 藤袴と契約ありと申さば、地いかな主でも大名でも此
 道計りは先が先、此談合はどうござんしよ、ヲ、ウ幸

●きりり

不明。

ひ望むところサア盃仕ふ、調いやくいやく、我
 とても假にはいや、佛神かけての夫婦ぞや、誓文誓
 文繪筆を取らぬ法もあれ、かうじやくと抱き付く、
 近頃嬉しい忝けなし、是祝言の盃と一つ受て元信に、
 妻の盃いたゞく作法儀式は固ふと、四海波、腰元中が
 謠ひつれ、奥より御局島臺に、七百町の御朱印箱、姫
 君様の御祝言、フ三國一とぞ祝ひける、地四郎二郎合
 點ゆかず逃んとするを、抱きとめ、藤袴とは假名ぞや、
 自らこそは銀杏前、誓文立の盃いやはならぬとの給へ
 ば、調いや吾等の名さしは藤袴、外に妻は是なしと
 なほ意地張れば、腰元衆、そんならほんの藤袴早ふ早
 ふとよび出す、お茶の間のきりりかゞ五十餘りの厚化

●三平二満 おかめ又お多福のこと。
 即ち三平は額と鼻と腮と高くなる
 べき所が平くして、二満は兩頰の
 膨れたることなり。
 ●しやちらこはい 上方語にて硬
 くこはりたるをいふ。

粧、三平二満の口べに、しなだれかゝる會釋顔、是が
 なんの藤袴、しやちらこはい皮ばかまと、どつと笑ひ
 のどやくや紛れ、盡せぬ妹脊と成り給ふ、地かゝる所
 へ不破伴左衛門宗末、雲谷を伴ひ、遠慮もなく座上に
 ずつかと直り、調コレ四郎二郎、汝いかなる野心にか
 御屋形を調伏し、亡さんとの存念有り、きつと詮義を
 遂ぐべき旨父道犬が下知、申分仕るか直に繩をかけふ
 かと、早繩たぐつて見せかけけり、四郎二郎ちつとも
 騒がず、せめて形の有ことには申譯も有べし、御屋形
 調伏とは此方の云分より先御咎の證據、承まはらんと
 ぞ答へける、雲谷下座より、こりやく證據は某よ、
 總じて繪書の秘密にて繪をかい調伏すること、人は

●ほろゝの聲 雉子は啼く時、必ず羽ばたきす、之を遠くより聞く時は、ほろゝといふにぞ、雉子の啼をば俗にほろゝ打つといふ。

●かなぶち 鐵難なり。

知らじと思へども此雲谷が見付た、此掛繪は和主が筆、梅に山鳥雪に雉、抑も當家は高嶋の御屋形と號す、山篇に鳥とかいて嶋とよむ文字なり、梅の梢に、山鳥の高々とまりしは、これ高嶋にあらすや、雉にほろゝの聲あつて雪は降るとの心あり、讀下せば高島ほろぶの調伏、狩野とは狩の野とかけり、姫君と心を合せ屋形を滅し、一國を己が狩場の野原にせんずる表相、地重罪脱れず繩かゝれと、取付く所を引はつし胸板はたと蹴倒す間に、飛かゝる伴左衛門が眞向、刀の柄にてはつしと打、直に拔んとする所を、かくし置たる取手の者、十手八方かなぶちをぶち立、ねら伏せて、高小手に縛め、黒書院の床柱に、思ふさまに縛り付、

●枕槍 枕刀といふに同じ、女中護身の槍なり。

●鳥居立 兩脚を開きてつゝ立たる形容、二王立などいふに同じ。

姫君の御朱印を、うばひ取れと群るを、女中手々に枕槍、長刀にて引つゝみ圍ひ防げば、あまさじと、フン奥をさして追つめける、地腰掛に扣へし雅樂之助、かくと聞より堪られず、駈廻つても奥方の勝手は知らず中口の、明ずの門くだけてのけと扉をたゞき、詞狩野四郎二郎元信が弟子、雅樂之助之信といふ草履取、主といひ師匠なり、死る道なら共に死なん、高が繪書のでつちづれ怖い事も有るまい、相手の首取る分のこと、地開けよ明よと貫の木も、折るゝばかりに踏みたゞき、フン鳥居立にぞまたがつたる、地元信内より、雅樂之助か満足した、身に過りなき上に慮外をして姫君の、御身の過ち氣遣し、歸れ〜と呼はれば、詞ア、慮外

(276)

といふも事による、明ずば踏んで踏破ると、地喚きちらせば、雲谷不破、雅樂之介を打殺せと、引かへして門の貫の木、はずす所を付入に、雲谷が小額すつばと切下げたり、あいつたよと跳り上り、二人拔連打かくる、あなたへ追つめこなたにさへ、城下をさして三重切出る、四郎二郎ちだんだふんで、エ、佞臣共むざくとは死ぬまい、親より傳へし一心の繪筆はこゝぞと観念し、右の肩に齒を立て、ふつくと喰破り、口に我身の血を含み、襖戸に吹かけく、フン口にて虎をぞ書たりける、地てんもくらしいの眼の光り、怒り毛怒り斑怒り爪、フン千里も駈けん勢ひなり、道犬は姫君の行方尋ね廻りしが、先繪書めからしまはんと、

●てんもくらしいの威。

〔要註〕電目雷

(277)

●虎は千里、虎は千里往つて千里還るといふ俚諺あり。

太刀を抜かんとせし所に、地俄に吹來る風騒ぎ繪に書く虎は形を現じ、牙をならして吼かゝる、道犬も強力者、組とゞめんと挑みあふ、虎は猛つて爪を磨ぎ、あたりを蹴立て、三重揉合しが、元より不思議の猛獸地道犬が襟髻、ひつくはへ打かたげくるりく、くるくるくくるりくともつて廻り、一ふり振て投げければ、塀を打越し、敷石に、面を摺てぞ打付けらる、地虎は勇んで元信の縛を噛み切、背をさし向けてそばへたり、元信頓て心付、袴の股立しぼり上、ひらりとこそは乗たりけれ、虎は千里の足早く風に嘯ぶく身も軽く、追來る敵を追ちらしかけちらし、堀も築地も跳りこへ、飛こへ、はねこへ駈り行く、豊千禪師が四睡

●李將軍 李廣の事なり。李廣射法に長じ、或時草中に虎の伏すを見むともあるか。

●獸君 獅子又は虎の如きは、古來獸の王と稱せられたるより、君の字を附したるものなるべし。

●三井寺 長等山園城寺と號す、大津に在り。天智、天武、持統天皇三代の勅願寺なり。

●矢橋、粟津 ともに近江八景の一。

●信樂城山 伊賀の國境にあり。

の虎、李將軍は虎をくむ、繪に書く虎を動かすは、古今一人のつたも一人、天下一人一筆の譽は世にぞ三輩殘りける、フシ實に獸君の一靈、地山野に蔓り草木を踏み折り、田畑を荒すこと斜めならず、近郷の百姓聲々に三井寺の後から藤の尾迄は見届けた、此山科の藪かげへ逃こんだに極つた、地皮に疵をつけずたゞ殺せぶち殺せと、フシとりぐ喚き評定す、庵の内より棒ついて小提灯さげたる男、詞や何者じや人の軒、うての殺せのとはうさんなりとぞ咎めける、イヤ是は矢橋粟津の百姓共、此頃信樂城山から虎が出て暴れるゆる、隣郷が云合せ此藪へ追込んだ、捜させて下されと、口々に呼はれば、侍あざ笑ひやい、虎と云ふ獸が日

●かんひの筆 「饗註」元の頗羅字は秋月の事なり、今はかんきといへど、昔はかんびと讀し見え、萬寶全書のふりがなもかんびとあり、あながち葉林子の杜撰にもあ

本に出たためしなし、十方もないこと夜盜押入の手引か、此庵を誰とか思ふ、土佐の將監光信といふ繪師、子細有て先年勅勤を蒙り此所に逼塞し、將監年は寄たれども某は門弟修理之介正澄といふ者、油断はせぬと棒ふり廻しいさかふ聲、將監夫婦障子を明け、聞いた、天地の間に生ずるもの有まいとも極めがたし、地諸共捜せと槍熊手ひつさげくゝるいゝ聲、松明ふつてかり立る、一村竹の下蔭に、そりやこそ物よと火を上れば、暴にあられたる猛虎の形、人に恐るゝ氣色なく、フシ背をたはめてぞ休み居る、將監横手を打つて、詞あら不思議やがんひの筆の竹に虎の筆勢に少しもまがふ所なし、是は誠の虎にあらず、名筆の繪に魂入て

らす又ひとときの書損にもあらざる如し。
●狩野祐勢 元信の父にして狩野の祖なり。

●七足去て師匠を拜す 古談に七尺去て師の影を踏すといふとあれそれを取りしなるべし。

●虎の順 「鑿註」順はずの意か。

顯はれ出しに極まつたり、然も新筆、今是ほどに書んず人は、狩野の祐勢が嫡子四郎二郎元信ならでは覺なし、いづれにもせよ證據には足跡あるまい、物はためしと百姓共、わが草分けて尋ねれども、虎の足がたあらざれば、かき手も書手目利もめきき、前代未聞の名人やと、心なき土民等も、フシ拜むばかりに信をなす、地修理之介七足去て師匠を拜し、調ア、有難や此虎を見て、繪の道の悟を開き候其しるし、地我筆先にてあの虎を消し失ひ申すべし、名字名乗を授け御許しを受たく候と、懇望あれば、將監悦び、オ、今日より土佐の光澄と名付べしと、印可の筆を與ふれば、修理は頂き墨を染め、虎の順にさし當、四五間間を置ながなら、

●よいお山云々 若し繪に魂の入るものとすれば、美しき遊女を賣いて貰ひ、借金に消して貰ふとは、蟲のよき話にて思はず吹出すべし。滑稽の筆妙なり。
●浮世又平重起 岩佐又兵衛のこと。其の傳詳ならず且數説あり、今其の概畧を述べれば、岩佐又兵衛は勝重と稱し、浮世繪といふものを書き初めしより世に浮世又兵衛と稱す。父は織田信長の命に背きて自殺したる荒木攝津守村重なり、又兵衛乳母に誘はれて難を避け、越前の岩瀬氏に養はれて、其の姓を冒す。慶長年中京師に出で、土佐光則の門に入り大和繪を學び、後ら一家の風をなし、越前侯に仕ふ。諸所當時の風俗人物、遊女白拍子等遊興の戯畫を作るに巧みなり。

●火打箱 小き家の形容。
●天津のはづれに店借云々 此れ天津繪のとなり。「近世奇跡考」に「天津繪或は追分繪といふ、いづれ

筆引く方にしたがつて、頭前脚後脚胴より尾先に至るまで、次第に消て失けるは、フシ神變術ともいひつべし、地百姓共舌をまき、孫子までの咄のたね、詞なふあの上手な繪書殿に、よいお山を十人ほど書て貰ひ、金儲けがしたいといへば、一人が聞て、オ、く、冬年お目に掛つたら、借錢乞の帳面を此から消してもらはふもの、お暇申すと打笑ひ、在所へ在所へ歸りけり、地に土佐の末弟、浮世又平重起と云ふ繪書あり、生れ付て口吃り、言舌あきらかならざる上、家貧しくて身代は、うすき紙子の火打箱、朝夕の煙さへ、一度を二度に追分や、天津のはづれに店借して、妻は繪の具夫は繪書く、筆の軸さへ細もとで、上り下りの旅人の、

の時代より書はじめしにや詳ならず始は佛畫を書きしが、後には種々の戯れ畫を書き出したり云々。詳しくは同書及び「嬉遊笑覽」にあり。或は其の筆者を浮世又兵衛といひ、或は大津又平といふも、前に述べたる岩佐氏の浮世又兵衛とは同名異人なるべし。此の淨るりも當時の巻説に據りしものなるべく、其の畫工の吃なりし事も何か據り所あるにや。

●日かげの師匠 日かげ者といふと。光信は今勅勸を蒙り官職にはなれ籠居しなるを以てなり。

●目禮 又平が口吃りて詞を交すと難ければ、唯顔付にて應答をするをいふ。

●竹筒 酒を入れる器。

●關寺 高觀音 關寺は逢坂の邊にあり。高觀音は近松寺のとも。

童すかしの土産物、三錢五錢の商ひに、命も錢も繋ぎしが、日かげの師匠を重んじて、半道あまりは夫婦づれ、フシ夜なく見舞ふぞ殊勝なる、地夫はなまなか目禮ばかり、女房傍から通司して、詞まだ是はおよりませぬ、誠^{まこと}にめつきりと暖かに日も長ふなりまして、世間は花見の遊山のとざはくざはく致しまする、こなたは山かげ御牢人の、おつれくをいさめの爲、嫁菜のひたしに豆腐の煮染、地竹筒でも致しまして、關寺か高觀音へお供して、春めく人でも見せませふと、めをと申して居ますれども心で思ふたばかり、詞道者時分で店はいそがし、洗濯物はつかへる仕事にははか行かず、日がな一日立ずくみ何をするやらのらくら

●急げば廻る これは古歌に「急げばはれ瀬田の長はし」とあるを取れり。矢橋の渡しは便利なれども、湖水の上時に災難あり、瀬戸へ廻れば路遠けれども、心易しの意。

●吃りとしやべり 近松の文いづれの所にも滑稽あり、こゝも思はず一笑せしむ。

と、地急げば廻る瀬田鰻只今膳所からもらひまして、練貫水の大津酒ゆめくしうござりませれども、此春から御仕合が直つて、鰻の穴から出るやうに御世にお出なされませ、詞ほんにつべこべくと私がいふことばつかし、地此方の人の吃とわたしがしやべりと、入合せたら、地よい頃な、めをとが一組出来ませふア、フおはもじやと笑ひける、地北の方聞給ひ、詞フ、よふこそ祝ふてたもつた、今宵は奇妙な事あつて修理は名字を許され、土佐の光澄と名乗るぞよ、地そなたもあやかり給へとあれば、又平時節と女房を、先へ押出し背を突き、我身も手をつき首をさげ、訴訟有り氣に見えければ、女房心得進み出、詞誠に道すがら百姓

●藤の色かたげたお山　これ藤姫なり。

●禁中繪所　朝廷において繪の事を掌る司。
●小栗　小栗宗丹のなるべし。元信よりは少し前の人。

衆の咄を聞き、身は貧なりかたはなり、弟弟子に土佐を名乗らせ、兄弟子はうかくといつ迄浮世又平で、地藤の花かたげたお山繪や、鯨をさへた瓢箪のぶらぶら生ても甲斐なしと、身を揉での無念がり、尤とも哀とも連そふ我等の心の内、申すも涙がこぼれまする、奥様までは申せしがお直の願ひは此時節、今生の思出死しての跡の石塔にも、俗名土佐の又平と御一言のお許しは、師匠の御慈悲と計りにて涙に、むせび入れれば、地又平も手を合せ、將監を三拜し、疊に喰ひ付泣居たり、詞將監もとより氣短く、ヤア又してはく、かなはぬことを吃めが、こりや此將監は、禁中の繪所小栗と筆の争ひにて、勅勘の身と成たるぞ、今でも小栗

にしたがへば富貴の身と榮ふれども、一人の娘に君傾城の勤をさせ、子を賣て喰ふ程の貧苦を凌ぐは何故ぞ、土佐の名字を惜むにあらずや、修理は只今大功あり、己に何の功が有る、地琴棋書畫は晴の藝、貴人高位の御座近く参るは繪書、詞物も得云ぬ吃めが推參千萬、似合ふたやうに大津繪かいて世を渡れ、地茶でも呑んで立かへれと、フシ愛想なくも叱られて、地女房は力を落とし、こなたを吃に産み付た、親御を恨みさつしやれと頼みなくく、又平も、我咽ぶえをかきむしり口に手を入れ、舌をつめて泣けるは、フシことはり、見えて不便なり、地時に籤の内よりも將監殿、光信殿と呼はつて、痛手負ふたる若者椽先によるほひ立、詞狩野の

弟子雅樂之介は御見忘れ候か、實にもく、雅樂之介先
 こなたへと座敷に入れ、承はれば四郎二郎殿、雲谷不
 破が悪逆にて、難に遭ひ給ふ段々具に聞く、氣遣しと
 有ければ、さん候某も供仕り、雲谷と戦ひ斯様に深手
 を負ひ候、頼み切たる名古屋山三殿は在京、元信危う
 く候ひしが漸くのがれ、落うせたと承はる、こゝに
 難儀の候は、姫君銀杏の前元信をあはれみ、七百町の
 御朱印を持って落給ひしを、敵奪ふて下の醍醐にかくれ
 し由、地二度姫君屋形へうつし、御朱印奪ひかへさで
 は、ながく繪師の瑕瑾なり、某手負の身は叶す、御加
 勢頼み申さん爲、忍び参り候と、語りもあえぬに將監
 皆聞迄に及ず、狩野と土佐は一家同前力に成て参らせ

ん、され共きやつ等と太刀打はいつかなく、かなふま
 じ、姫君にも怪我あらん、どふぞ辯舌のよき人に、御
 屋形の御意といはせ、たばかり取かへす分別がござ
 らふ、いづれも云てお見やれと、額に小皺頼杖つき、
フシ各々小首をかたぶくる、地又平何ぞ云たげに、妻
 の袖引背中つき指さしすれども、合點せず、しんきを
 わかし女房を引のけてつと出、師匠の前に諸手をつ
 き、つをのみこんで、調此うつ手には拙、せしやが参
 り、姫君もゴウ御朱印も、ウ、くくくうば奪ひ取て
 歸りましよ、將監きつと見、アヤ面倒な吃め、思案な
 かばに邪魔入れる、地そこ立てうせぬかと、叱られて
 もおちるにこそ、調イヤ膝とも談合と申し、口こそ不

●ふん正すけ定 (撰註)山城鍛冶に永昌あり、其の弟子に介定あり之をいふ也。
 ●命の相場が一分五厘 浮世一分五厘といふは當時流行せり、世の中を軽く見たる譬なり、八文字屋本に「浮世一分五厘」といふ草子五册あり、以て其の流行語たるを知らるべし。又須彌山は最も重き故に、命は軽く名は重しといふことに譬へたり。

自由なれ、心も腕も天下にこはい者がない、拙者が分別出し、叶はぬ時はゑん正すけ定、あつちへやるかこつちへ取るか首がけのばくち、命の相場が一分五厘、浮世又平と名乗ては、親もない子もない身がら一心、命は掃溜の芥、名は須彌山とつりがへ、悴の時から舊功なし、命にかへて申し上るも師匠の名字をつぎたい望、ばつかり、拙者めを遣されて下されませ、申し、申しさりとては御承引ないか、吃でなくば斯うはあるまいエ、くくく、恨めしい咽笛を、かき破つてのけたい女房共、左りとはつれない御師匠様じやと、聲をあげてぞ、泣居たる、詞將監なほも聞入なく、片輪のくせの述懐涙不吉千萬、相手に成てははてしなし是

●おとまし うとましの轉。

々修理之介、御邊向つて思案を廻らし奪ひ返し來られよ、地畏まつたと云より早く刀ぼつこみ立出る、又平むんずと抱とめてマ、まんくまつてくれ、詞師匠こそつれなくとも、弟子兄弟の情じや、此又平をやつてくれ殿ともいはぬスツすすつくすり様、こりや又平、某矢竹に思ふても、師の命は力なしこゝをはなせ、イ、くくいやハ、くくくはなさぬ、はなさねば抜いて突くぞ、ツ、つきコ、くくくころせ、ハ、くくハ、はなせ、くくとねち合ふたり、詞將監夫婦聲をかけ、はなせくと止むれども、耳にも更に聞入れず、女房取付、詞アレ御師匠様の御意がある、地おとましの氣違

やと、もぎ放せば女房を、取て投げはたと蹴て睨み付
詞己までが氣違とは、地エ、女房さへあなどるか、片
 輪は何の因果ぞやと、どうと座をくみ疊を打て、聲も
 惜まず歎きける、フシ心ぞ、思ひやられたる、地將監重
 ねて、汝よく合點せよ、詞繪の道の功によつて土佐の
 名字をついでこそ、地手がらとも云べけれ、武道の功
 に繪書の名字、讓るべき仔細なし、ならぬくと云切
 給へば、女房居直り、サア又平殿覺悟さつしやれ、今
 生の望はきれたぞや、此手水鉢を石塔と定め、こなた
 の繪像を書とゞめ、此場で自害し其跡の、おくり號を
 待つ計りと、硯引寄せ墨すれば、又平うなづき筆を染
 め、石面にさし向ひ、是生涯の名残の繪、姿は苔に朽

おくり號 諡號即ち戒名のこと。

るとも、名は石魂にとゞまれと、我姿を我筆の、念力
 や徹しけん、厚さ尺餘の御影石、裏へ通つて筆の勢、
 墨も消えず兩方より一度に書たるごとくなり、地將監
 大きに驚き給ひ、異國の王義之趙子昂が、石に入り木
 に入るも、和畫においてためしなし、師にまさつたる
 畫工ぞや、浮世又平を引かへ、土佐の又平光起と名の
 るべし、此勢ひに乗つて姫君御朱印諸共に、取かへせ
 と有ければ、はつとばかりに又平は、忝なしとも口ど
 もり、禮より外は涙にくれ、をどり上り飛上り、フシ嬉
 し泣こそ道理なれ、地將監夫婦悦び、心功にて志しあ
 つけれども、敵に向つて問答せんこといかゞあらんと
 の給へば、女房聞もあへず、常々大頭の舞を好き、わ

●御影石 花崗石なり、攝州御影山より掘出すを以て名あり。

●王義之 晋の人なり、草隸に巧みにして、わけて書を善くす。

●趙子昂 宋の人、經史に通じ詩文に巧に又書畫を善くす。殊に畫は山水木石花竹人馬等精緻を極む此の作凡て室町時代の繪師の事を仕組める故に、引合に出る人物多くは書畫に名ある人なり。石に入り木に入るは其の筆跡の神文又は版木に彫刻せられたるをいふ。

●土佐光起 土佐光則の男なり、光信光長と土佐の三筆と稱せらるゝ名手。元祿四年歿す。但し浮世又平が光起と改稱したるといふは所謂狂言繪語なり。

●大頭の舞 慶長の頃、笠屋三勝といふもの女舞大頭の座元なり。

これは平家物語、盛衰記等の趣を
論ひ物に作り、太鼓に合せて、これ
を舞ふ、其の衣裳は天冠を戴き、狩
衣を着け大口を穿く、これを女舞
大頭と名づく云々(簀笠雨談)元
祿頃半七と心中したる笠屋三勝も
此の女舞の流れなり。

●去程に鎌倉殿 此れ大頭の舞の
文句なり。

●義経 ぎけいと讀む、頼朝をら
いてうなどといふに同じ。これは
鎌倉時代宋朝より渡來せし僧侶
が、名乗りを音にて讀みしに始る。

●山水男 山水はさびしきと。不
景氣な男といふに同じ。「色道大
鑑」に、「山水物はさびたる事に
ふ、少分なる事にもいふ、山水を
畫がきたるは淋しき體なれば斯い
へる歎しと。

らは諸共つれわきにて舞れしが、節のある事は少しも
吃申されずといふ、地やれ夫こそは屈竟よ、試みに一
節目出たう舞ふて立て、あつとこたへて立上り、古き
舞を身の上、なぞらへてこそ舞ふたりけれ、舞詞去程
に鎌倉殿、義経の討手を向くべしと、武勇の達者を選
ばれし、それは土佐坊、是は又、地土佐の又平光起が
師匠の御恩を報ぜん、身にも應ぜぬ重荷をば、大津
の町や、追分の、一繪に塗る胡粉は安けれど、名は千
金の繪師の家、今墨色を、あげにけり、詞かくて女房
勇みをつけ、又もや御意のかはるべき、はや御立とす
よめける、チ、いしくも申されたり、身こそ墨繪の山
水男、紙表具の體なりとも、朽てくちせぬ金砂子、極

●樊噲張良 樊噲は勇、張良は智
を代表する漢の高祖の臣。

●諸人の繪本 諸人の手本の口合。

●火ようじ 火用心の約。

●うつ立 打ち立。
●やごとなき やんごとなきに同
じ。並々ならぬ貴きとなり。

彩色に劣らじと、勇みすよみし勢ひは、ゆるし、頼も
し我ながら、あつばれ繪筆のけなげさよ、唐繪の樊噲
張良を楯についたと思召せ、お暇申してさらばとて、
打立出る勢ひは、誠に諸人の繪本ぞと、チ、ほめぬ
者こそ 三重(なかりけれ、フシ)逢坂の關、地あけぼの近き
火ようじのこゑ高島の屋形には、六角殿の姫君行がた
見えさせ給はぬとて、旅人の改め問屋の詮議、フシ土を
かへさぬ計りなり、地又平は今朝七ツたち、門出祝ふ
中腕に、例の熱爛三杯引かけうつ立所に、やごとなき
上臈のすあしの土に身もくづおれ、伏見の方よりうろ
くと、是こそな者、調京の道を教へてくれ、わらん
じとやらいふ物を、地はかせてくれと詞つきの大へい

さ、調又平むつと顔に立はだかつて返事もせず、地女房走り出、大抵のお方でない、威のそなはつた見處ありとお傍に参り、調恐れながら御屋形の姫君と見参らす、我々は土佐の將監が弟子吃の又平と申す繪書の夫婦、狩野の弟子雅樂之介に頼まれ、お迎に参る折からなり、必ずつゝませ給ふなど、地さゝやけば嬉しげに、チ、自らこそ銀杏前、道犬雲谷が追手すきまなし、よい様に頼むぞやとの給へば、又平土邊に額をすり付け、悦びの色いさみの色、氣をせけばなほ物いはれず、心を仕方の腕まくり、りきみ反打居合のまね、ぬき打なで切をがみ打、組合ねち首手にとつて、にぎり拳の武士氣をあらはし、埴生にかくまひ参らする ナクリ夫婦

●八丁走り井 八丁は大津へ八丁にて、走り井は其の附近にある名水なり。

が、所存ぞ頼もしき、地程なく八丁走り井の間屋組頭、組町引具し、おこしかへつて聲々に、六角殿の姫君朱印を盗み出給ひ、御家老より御穿鑿、裏屋小路もあらためよ、別して繪書は家さがしある、人は勿論犬猫も、地内を出すなと裏口門口はたくくと、さしもの又平取りこめられ、フ狩場の鹿の如くなり、地不破の伴左衛門長谷部の雲谷、着込みの兵百騎計り、むら立來つて家々に押入りくさしがしける、又平一期の浮沈ぞと、女房諸共姫君をおしかこひ、憐をがはと蹴破つて、ぐつとぬけたる壁あつき、氷の様成るだんびら物、さし出す首をかたはしから、キ、く、く、く、切りならべんと壁にそふてぞつゝ立たり、調雲谷聲をかけヤア

く是ぞ音に聞く、土佐が弟子吃の又平めが住家なり、たよきこぼつて探して見よ、地承はると一番手とつたく、とつたくとどつと寄しが、しどろになつて引返し、詞なふ怖やすさまじや、何かはしらず家内には人大勢みらくて、或は奴の形もあり又は若衆女もあり、人間計りか猿猪驚熊鷹、爪をとき立眼を怒し寄つかるゝ事でなし、地なふく否やと身ふるひし、フシ舌を巻いてぞ恐れける、地何をぬかすうろたへ者、人三人とも住まれぬあばら屋何者か有へきぞ、察する所見世にはつたる三文繪を生物と見違へしか、怖いと思ふ心から眼が眩んだ腰拔共、それく部をこちはなせ、ぬるいくと下知すれば、鳶口引かけゑいやくととな

●露の命を君にくれべい「増補松の落葉」卷四、大津追分繪師の歌
●命を君にくれべい、追分のだるま繪、座頭はしりぬに犬が吠えつゝ猫が三味ひく酒のむ奴、愛宕祭りに袖をひかれた伊達な若衆が魔手にすゑて、ふれやれく大鳥毛く、浮世のんせいふんらんらんしんらんどんらん十三佛かけ針くし針た、みばりい、池のわすげかさよりほに、そろばんつふ關の清水はうき名どころ。
●染しだいなし 奴の着物にて紺のだいなしのも。
●等巖 雲谷派の祖は等巖といへり、似たやうな名をよいか減に附したるものなるべし。

んなく見世をはなしける、内を見れば不思議やな、云しに違ひもあら奴の、影ともわかず幻とも、まだほの暗き曉の、鳥毛の槍先そろへしは、土佐が魂うつし繪の、精靈なりとも知らばこそ、我もくとかけ向ひ、うてどもつけども手にとられぬ、露の命を君にくれべいと、染しだいなし 地きらひなし相手えらばす防ぎたり、雲谷が弟子長谷部の等巖、數にも足らぬかす奴我に任せとまくりかゝれば、片肌脱いだる立髪男、大盃をひらり、ひらりとひらめかし、眉間にふつたる唐辛子、チ、から、チ、からから錦、フシあやめも分かず引かへす、地師匠の雲谷たまりかね、かたはしより打みしやぎ手なみを見せんと飛でかゝる、やさしややさも

●きどく頭巾 「嬉遊笑覧」に「きどく頭巾は、前に覆面を付たるなり、其後天和貞亨ころ専ら女の着たる頭巾にて、今時はきどくと呼り、又氣まゝともいへり、五元集に「目ばかりを氣まゝ、頭巾の浮世かな、などいひしは元祿の頃なり。」

●めくら打 座頭のめくら打、例の滑稽なり。

●枕がへし 「後撰夷曲集」に「芝居にて枕返しの曲を見て腕を曲げ枕がへしをする人の樂は其の腕にありなん」とあり。「響註」(前畧)

のよ、女わざにはきどく頭巾、藤の竹刀を押取のへ、
ひんまふてはたと打、しとゝ打をひらりとばし、
うけつ、ほどいつ、麻衣の、玉だすき、地かひか
ひしき若き法師の現はれ出、勇かゝれる有様は、なみ
や鯨の瓢たんく、持てひらいて鉢たゝき、たゝけは
すべりうてばすべり、ぬらり、ぬらりと手にたまらず、
フゝあぐみ果てぞさゝへたる、不破が郎等犬上團八
そこのき給へ人々と、討て出るや現の闇の、座頭一人
とぼくと、とぼつく杖をふり上げく、めくら打に
うつてんげり、あまさじ物と續いてかゝる、團八が弟
犬上三八、二八計りの小人、枕がへしの曲枕をつ取り
く、はらりく、はらりく、うつ波枕數枕枕重

●枕がへし 曲枕といふ手づまもありとなり、野郎白人など専ら遊びしなりと。波枕、數枕、枕重などは其の曲名なるべし。

●逢坂のゆふつけ鳥 「古今集」戀の部「逢坂のゆふつけ鳥も我ごとく、人や戀しきれのみ鳴らん」。同註に「ゆふつけ鳥は庭鳥なり、四境の祭にて、昔木綿をつけてはなされしなり云々。されば夕吉鳥と書くは非なり。」

ねに、地打亂れ、フちりくく、にこそ引たりけれ、地伴
左衛門怒をなし、手にも足らぬ雑人原、しや何事か有
べき、武士の刀の鹽梅見よと、眞一文字にかけたりけ
り、あらずさまじやこはいかに、姿は沙門かしらは鬼
神、鬼の念佛かみくだく、牙を鳴らし角をふり、向ふ
者のまつかふ、榿木をもつてたゝき鏡、くわん、く、
く、く、く、耳にこたへ骨にしみ、進みかねて
は引足も、隼荒鷹驚熊鷹、一度にさつと飛び來たり、
群る勢を八方へ、追立蹴立つゝき立く、翼の嵐夜明
の風、三重鷺の聲々、逢坂の、フゆふつけ鳥に、地しら
しらと、白みわたれば白紙に、有し形は彩色の、繪に
うつりたる筆の精、フ天骨の妙とも謂つべし、地又平

●天骨の妙「古今著聞集」に、伊豫入道幼くて繪をよく書く條に、愚息の小童が書て候といはれければいよ／＼尋ねて可然天骨とは是を申候云々。天骨とは筆に精神の籠つたとなるべし。

●熊手かくなは十文字

勇んで女房の袖を引き、物は云たし心すゝんで舌廻らず、たゞウ、く／＼とばかりなり、詞エ、ここな人、敵がつめかけ事急な、まはらぬ舌をいはれぬこと、地舞でく／＼と云ければ、チ、舞それよく／＼氣がついた、今目前の不思議を見よ、我等が手柄で更になし、土佐の名字をついだる故、師匠の恩の有がたさよ、敵の中へかけ入て命限りに追ちらさんと、太勢に分て入り西から東、北から南、蜘蛛手かくなは十文字、割立追廻し、さん／＼に切立られ、さしもの軍兵、地たまりかね八方へ逃ちつて、フシ残る者こそなかりけれ、地さあしてやつた此上は、コ、く／＼こゝには片時もかなふまじ、都の方へと姫君を、チ、く／＼く／＼あふ坂山の

●日の岡

●里は都の未申 島原遊廓は都の坤に當るゆゑにし、いふ「一目千軒」に曰く「此一廓鬼門に口を開きし事を天神の神主歎かしく思ひて丑寅を未申に轉じ上の町を下の町と名附し也なほ三筋町(六條)の餘風を捨ず西洞院と名を残せし也凡て廓は一方口なり京島原も今の東口ばかりなりしに享保十七年西口開きし也。但しこゝは室町時代の事なれば、島原といはず、六條三筋町の事にせり。

●ふもんが馬場 一の板橋を思案橋二の橋を衣紋橋といふ。此の邊

時鳥、まだ初聲の口はどもり、心は鐵石かなおとがひに、まさつたすくれた、こへた峠は日の岡の、石原草原足もしどろに、どゞく／＼、どもり廻つてのゝのく／＼のぼりける

中之卷

地里は都の未申なり、通ひても、通ひたらぬぞ三筋町の西の洞院中道寺、ゑもんが馬場の一方口、まだ大門の遅櫻、忍びて開け一番門の東がしらむ、ドン、どんと打たる太鼓の番太、詞者やら大門口に切られて居ると呼はる聲に、地くつわ屋揚屋、茶屋おろせ廓の年寄立合、見れば年比三十計り屈竟の侍、二つ重ねの白無

りないふなるべし。

●一番門 〔箋註〕廓の大門をあけるに一番門二番門などありしなるべし。

●くつわ屋

●おろせ

●毛彫 模様を極めて細く彫刻せるもの。

●波に山王祭 山王日吉権現は比叡山の鎮守にして、江州志賀郡坂本村にあり、祭禮は四月廿三日、此の時神輿唐崎に渡御し、船祭なれば波に山王祭といへるなり。七所は、祭神上中下各七庫あればしついでなるべし。

●天川珊瑚珠 〔箋註〕阿瑪港の珊瑚珠なり。

●管領所 室町時代、新波細川島山これを三管領と稱し、天下の政事を司る。しついでに管領所といへるは、其の名を借りしのみ、徳川時代における町奉行所をさす

垢白茶字に縫紋絳絹裏に、源氏雲の裾ぐもみ、南蠻ころの大小、對の金鰐毛彫は波に山王祭七所、御物蒔繪の印籠天川珊瑚珠はさもなくて、大疵五ヶ所肝先にとゞめありと、委細に書付、管領所へ訴へさせ、死骸を圍ふ横はしこ、二階から女郎買人やりての龜は首のばし、松は寝ぼれた顔出し、まだ起きくのかぶる共、つね彌いく野と手を引舟も走つて来て、堀にくらかけ木に取付、かほる様あれ見さんせ、吉野さまの大膽な掃溜山へ上つて、海老の皮で足つかんすな、突たら大事か、切られて死ぬる人さへ有ると、フシあだ口々のやかましき、詞あの切れて居る人は葛城様の大盡、不破伴様に似たじやないか、ほんに左様じや伴様に極まつ

た、地サア伴左衛門が切られたと、京童の物見だけく、手負見がてら傾城見に、フ群集は押も分られず、地すはや檢使と人を拂ひ、管領の雜式、供人引具し、死骸をといて疵改め、詞江州高島の執權不破の伴左衛門に極つたり、偕此者の買たる傾城は何といふ、意趣ある者の覺はなきか、口論などはなかりしか、眞直に申せ當分かたくして、後日に知れなば曲事なりとぞ仰ける、年寄罷出、上林の葛城と申す太夫を、千二百兩にて請出さるゝ筈の所、名古屋山三と申す浪人衆と葛城と、行末深い約束とて談合なりかね申せし故、兩方意趣を舍み居られしが、是ならで覺え候はずとつまびらかにぞ云わくる、雜式一々口書し、名古屋山三は浪人なれ

ども元は伴左と傍輩、地旁大事の詮義なり、先葛城
 がやり手を呼べ、やり手出ませと呼ぶ聲に、玉は臆病
 年寄なり、やゝ恐しや私が出て何といはふ、縛られた
 らどうせふぞ、なふ悲しや目がまふた、フシ氣付はない
 かと泣居たる、地是では埒が明くまいどれぞ機轉なや
 り手衆を、頼んで見んといふうちに、出ませくと頻
 りの使、エイ思ひ付た一文字屋の和國に付て居る、み
 やといふやり手は越前の敦賀で、遠山とよばれた全盛
 の太夫、戀故今はあの體、すゞどげなふて智恵まんま
 ん、閻魔の廳でも云ぬける此みやを頼まう、アレく
 あそこへ大福帳かたげて來るは、みやじやないかと云
 ふ所へ、おしよばからげのいそがしげに、詞皆さん是

●すゞどげ

鏡げの詠。

●おしよばからげ 醫の風評ならす仲居などの風なるべし。

にござります、まあくきやうとい事が出事まして、
 御苦勞でござんす、地云捨通るを、是々おみや、詞檢
 使の衆葛城のやりてを召るれども、玉は愚鈍で臆病な
 り、何をお問なされふやら云教へてすまぬこと、廊中
 の頼ぢや、葛城がやり手になつて出て、請返答をして
 たも恩に受ふと云ければ、彼の死骸の傍へ出るることか
 ア、ゑづ、去ながらいやと云も仔細らし、地云そこな
 ふたら大事か、口に任せてやつてくれよ、フシてんぼの
 かはとぞ出にける、詞雜式かなぶちよこたへ、已は葛
 城がやり手めか、用有て召出すに何として遅なはる、
 横着者氣隨者とかさをかけて叱らるゝ、ア、あのさん
 はいの頭から叱らんす、何の氣隨でござんしよ、十二

●きやうとい

*

●ふづ おそろし又こはしなどいふ場合に、西國にてふづいといふてんぼのかは、「和訓栞」に「世に放縱不拘の人を指して轉蓬者といへり」ともそれと同意にて、エ、儘よ、やつてのけふといふに同じ。

●ごあんしよ

ごあんしよと同じ。

●辨慶やりて 大勢の女郎を引廻し四方八方掛持するを、辨慶やりてといふなるべし。其の理由は辨慶が七ツ道具を使ふ如く、手の繁き故ならん。

●緋の袴 遣手は赤前垂なれば、洒落れたるなり。
●鑰の穴から天のぞく、又針の穴から天のぞくともいへり。

●卯はら辰も、 灸の忌日なれば、即ち卯の日には腹辰の日は腹これらには灸をすすすと。

●茶の子 朝の茶の子など、晝食

人の太夫様を一人してまはせば、地辨慶やりてがいそがしき、口舌の中を押へだて、打物わざにてかなふまじと、日に幾度のわび言やら、夜の身持は揚屋の吸物同前、ちよつちよと座敷へ出る度に一杯づも呑む酒に、ふらく睡りのいきだをれ、朝から晩まで緋の袴、花色繻子の巾着も、中は秋の夜の長紐、提た鑰の穴から天をのぞけばほのく明、よね様達の身仕舞風呂の、手洗水の髪洗ひの、鍋よ杓子よ臼よ杵よ、正月しまへば節句朔日今日は二日の拂日なり、灸もすゑたし卯はら辰もよせなかにほら、商賣にはかへられずかは切こらへて出る心、其様に云んすな廓は諸國の立合、常住きつてのはつての是程の喧嘩は、おちやこのく茶の

夕食などいふ重要な食事にあらず極く手軽き食事なれば、凡て容易くやり得るをお茶の子といふ。

●引舟 * 目の鞘はつす 「吾吟我集」に「の

子ぞや、ア、フン仰山など笑ひける、雑式怒つて、いやさ己が身の上は問はず、此件左衛門千二百兩にて葛城を請出すとな、傾城は賣物直段極る上からは、名古屋山三が妨げ云ても叶はぬ筈、然るを違亂に及ぶとはうぬらもがりと覺えたり、きり手も知らいでかなはぬ筈、眞直に申せと詞あらく問かくる、少しも臆せず會釋して、御意の通り賣物とは申しながら、神佛の奉加と同じことで、金出しながら拜まするは恐らく世界に傾城ばつかり、地買ふてくれるが嬉しいとて親がかりやお主持の、戀路の闇の一寸先、見えぬ所を傍から見、かひての御身もすたらず女郎ものぼさぬ様に、舵を取るが引舟、目のさやはつすがやりての役、大事に

くとも我目のざやなはずさずは
何の用にか太刀のきつさきしとあ
り。眼なくばり意を働すとなるべ
し。

●酒に浸し。今のアルコールに浸
けると同じ。

かける證據には世間に心中十あれば、廊に一つあるか
なし、伴左様は御大身お金に不足もあるまいが、御主
人の御耳に立、お身の害とも成る時は御一門の評議に
のり、詞人をはぐの欺すのと、落る所は廊の難、こゝ
のいきを立るが色里のたしなみ、身請の談合破れたも
伴左様のお身の上、大事に思ふ上の事でござんす、
地道でさられさんしたは、そこまでは存じませぬ、定
めし死にともあるまいし、尤も逃ても見さんしよし、
そこに如在もあるまいが、先の相手が強いが、身の取
廻しのわるさか、フシ知らんでやんすと答へける、地檢
使の人々もてあつかひ、よいはくもう黙れ、一時に
詮議なりがたし死骸を酒に浸し置、後日の評定たるべ

●悪業 てんがふといふに同じ。
金をくれるべき遣手に水くると
は、戯言にも程があるとどこま
でも役人を馬鹿にしたる口吻。

し、それくとして役人ども、桶をしつらひ死骸を納め、
酒汲入れて繩搦み、フシ牢屋へやれと昇上たり、詞雜式
重ねて、年寄く商賣なれば傾城には構なし、去なが
ら夜前よりの買手共事すむまで名所を、一々に書とめ
よ、こりややり手め、重ねての詮議には水をくれる用
心せよと、おどして立ども、おちもせず、エイ置かん
せ、詞金くれるやり手に水くるとは悪業など、笑ひ
をしほに云じらけ、先を拂ひて立かへる、權威を見せ
て突ならず鐵棒の音三味線に、ひきかはりたる三筋町
戀の市場と、三重なまめかし、名古屋山三春平は、通
ひなれにし六條の、道には石がいくつ有るまで、よみ
覺えたる一貫町の、フシ茶屋が、葎簀の、よしやよし、

●與右衛門 「醉餘小錄」に、島原の門番を代々與右衛門と呼ぶ、定紋を印とする事は八千代に始るよし好色大鑑にいへりとして、與右衛門の畫像を出す。然れば二代の後胤は、二代目の與右衛門なるべし。平 ひらは、名古屋山三春平の替名なり。

●奈真漬 酒に漬けたればしかいふ、遣手などの人を人とも思はぬ口吻寫し得て妙といふべし。

●せんぎまんぎ 詮議を同音千騎ともぢり、直ぐ萬騎と引かけたるなり。

●外様 公儀の役所をいふ。

地里になげ打命ぞと、大門口の與右衛門も、門番には二代の後胤、平の供して口かるく舞鶴屋にぞ入にける、地亭主傳三を始とし、あまたの女郎やり手まで、是は様子はお聞なされふが、先四五日もお出なされぬがよい筈、日頃意趣ある伴左衛門、切手は名古屋山三じやとどこともなしの取沙汰、葛城様の御案じ我等夫婦の氣遣ひ、此みやが辯舌で今日はすらりとやりました、伴左衛門が死骸を奈良漬にして後日の詮議、これにお客の名所書しるせとの云付、お身に覺がなふてから、せんぎまんぎもやかまし、お前を外様へつくばはせては此傳三が立ませぬ、帳面にとめぬ間に先お歸りと云ければ、調イヤ傳三そうでない、お手前こそ

●かづら様 葛城様の略。

念頃、廊中女郎衆へ苦勞をかけた此山三が穿鑿にあふ悲しやと屈んで居る程ならば、里通もよねまじりも頭からせぬがよし、先和國様からお禮申す、大事のやり手をおかしたなされ忝ない、儲みやの働らき心ざし詞の禮はいふ程ふるい、三千石取た山三が手をついて頭をさげる、額に千石兩の手に二千石、地主人の外一生に此式作法はみや一人、フシ是が禮ぞと手を付けば、調ア、勿體ないなんのお禮が入ませふ、ちよつとかづら様にあはせていなせましたい物じやが、私が行けば目に立、和國様一筆しんせて下さんせ、いや文もいかゞじや、私しら直に誘ふて、遊びに出る顔でつれまして來ませう、地サアみんなござんせと、フシ座敷をこそは立

●外戚腹
腹のとも。

又下借腹とも書く、妾

にけれ、地然らばこゝは人も來る、二階へお通りなされといへば、調ヤレ何が怖ふて隠れふぞ、伴左衛門をきつたるは誰とか思ふ、此山三が手にかけ討てすてたるぞ、葛城が意趣はわづかのこと、かれめと傍輩たりしとき、狩野四郎二郎を身が取持にて奉公に出せし所に、伴左衛門親子雲谷といふ繪師をひき、御在京のお供のるす、無實を云かけ刃傷に及び、四郎二郎は行方しれず、剩へ外戚腹の姫君いてふの前、四郎二郎に心をかけ御祝言ある筈を、さまたげ入て狼藉し、某までも譏奏し、浪人の身となりたれば重々が遺恨あり、殊に四郎二郎はかくれもなき名筆、大内繪所の官にもすゝむ身を、某強ひて國にとゞめ難義をかけて見て居ら

●ふせう 不祥の假名遣ひなるべし。武家で生れたおかげといふやうな意味。
●立腹 立なから切腹するをいふ。剛毅な士の態度。

れず、姫君と夫婦になし四郎二郎さへ出世すれば、本望く生けておかば四郎二郎にいか成る仇をかなすべきと、傾城の意趣を幸ひに討て捨たる伴左衛門、地知れて切腹するばかり、四郎二郎故に捨ん命、いさゝか惜いと思ふにこそ、武家に生れたふせうには、大門口で立腹きり、新造衆や禿共、芝居でするよな事して見せうヤア葛城はどうじやの、亭主うたへと三味線の天柱に顔を筋かい身、絲の音色も目の色も、フシ人をきつたる體はなく、地亭主は結句色違へ、先お咄はいらぬ物、内外の者共必ずあだ口聞くまいぞと、わななくみるひ手酌にてめつたに飲んでぞ居たりける、みやも聞より驚きて、偕は我二世までと、思ひこふだる四郎二郎

●あのさん あの人といふに同じ。
麻詞。

●どふついで 解しがたし(要註)如何釣てか、とうつしてか、或はついでての脱字か。

様にかくまで深き恩を見せ、お命をも捨んとはア、頼もしや忝けなや、詞我こそと名乗て一禮いはふか、いやく、姫君とやらへ聞へては、御祝言の邪魔ぞと遠ざけらるゝは知れたこと、地只よそながらあのお方の爲に成り、お命を助けるこそ我夫への奉公と、思ひ定めてコレ傳三様、詞お侍の覺悟の上を、女子の了簡推參な事ながら、あのさんに腹切らせ恩を受けた四郎二郎、いづくの浦で聞付てもよもや生ては居られまい、地人の由縁は知れぬもの、どれからどれへどふつとて、誰が悲みとならうやら、山三様お身の難、のがるゝくめんは有まいが、詞思案は今でござるぞやと、よそをいふのも夫のこと、案じて餘る涙の色、フシ胸なでおろすも

●能ふあたゝかに (要註)能ふあたゝかに、の下に左様はさせますまいとあるべきを例の語意にして略したるなり。

●下からどうも 上の事は下からはわれぬの意。

道理なり、詞チ、我身が云通り、追取て廊の迷惑、御仕置には法が有る、腹切たいと仰つても能ふあたゝかに、見苦しい罪にあはた口、下からどうもはかられぬといへば、山三はつとして、ア、ウよい所へ気が付た、三味線所でないわいの、相手は主持こちは浪人、あはれ者にしなされ、木鼻のとまつたやうに獄門などにさらされては、先祖一家の恥辱、今さつばりと腹切ても、其段からは死骸まで彌恥は重なる、地工、主持ぬ身の無念さよと、齒切をしてぞ涙ぐむ、みやは聞くほど我男の、身にせまりくる悲しさの、どうぞよい分別して、進げて下され頼みますと身に引かけて歎く體、てい主しばらく思案し、是々よい仕様あり、詞此へより

やと小聲になり、是をついでに葛城様を、とんと請出し奥様に定める、時に親方と肌を合せ、手形の日付をとつと跡の月にして、外様へは借宅見たての其間廊に少し逗留分、すれば御夫婦といふものよ、昨日まで伴左衛門が、くだいた状文握つてからは密夫の證據慥なり、女敵討は天下のお許し、千人切てもきり徳、此の分別はどうあらふ、地みやは悦び、オ、できた、めでたい、智恵者めとあをぎ立れば、詞ア、無上に目出度がるまい、當分請出すお金がない、若し御腰の物をそれまでの質物に遣されば、私に加判で太夫様をたつた今門を出して見せませふが、お侍にお腰の物とはなふおみや、どうも申しかねるわいの、ハテおのし

●左文字 南北朝の頃、博多の鍛冶、左衛門三郎某の鍛へたる刀の稱、正宗の弟子なりと。銘に左の字を切る故に左文字といふ。

の御身計りか不便になさるゝ四郎二郎まで、命を助かることなれば、御了簡遊ばしませと、手を合せるやら歎くやら、山三も共に、涙をうかめ、ヲ、く、何が儲く、皆の衆に苦勞をさせ、何しに否と云ふぞ近頃過分千萬、コレ是は重代の左文字、二千五百貫の折紙あり、惜しとは思はねども、七歳の時より今日まで終りに脇指一本で、他所に居たこと知らぬ身が、刀の冥加に盡たかと、涙は雨やさめ鞘の、脇ざし、ばかりで奥に入る、フシうしろ姿を見送りて、おいとしゃく、傳三様どうぞ首尾して下さんせ、まきぞへが入るならばわしが縷子の帯もある、八丈の裕もござんすと、歎けば共に泣聲の、地ヲ、きどくに能う云やつた、おれ

●のらぞんざい

*

●煙草のんでも云々

*

も男ちや氣遣すな、嗚を總嫁に賣てなりと、埒を明けぬといふことは、フシないて出づるぞ頼もしき、みやが憂身の、うき思ひ、口でいはねば氣につかへ、目に流るゝは百分一、むねに涙のとゞこほり、山三様に骨折るも、男の心の、フシ悲しみを、思ひやり手となつたるも、のらぞんざいでなられふか、戀がこふじて遠山が此のさまになつたとは、知らぬか聞ぬか男めが、何所に居るやら死んだやら、なしも礫もうつとりと、煙草のんでもきせるより咽がとほらぬ薄けぶり、人の見ぬ間に思ふほど、泣くを所在かあぢきなや、地内を首尾して葛城は走て来るよりかけあがり、調みや殿こゝにか、いかい世話であつたげな、忝ないぞや土になつて

●物日 紋日のとも物日といへど、こゝは前に「今日は二日拂ひ日」とあり、即ち物日なり。

●鼓弓 三味線の小形にして換を用ひず、小弓の弦を以て鼓す、故に鼓弓といふ。其の音最も悲哀なり。其の起源詳ならず、寛文四年

も忘れはしませぬ、おれが心をさつしてたも、ほんに物日なかにやせたわいな、こなたは今は何の苦もなふて樂である、やり手の身は羨しい、地山様は奥にかの、一寸逢ふて來ふぞや、後にくと云捨て、フシ行を見るにもなほ涙、地つらいぞういぞと云ふ中にも、男をそばへ引つけては、憂を凌ぐも力がある、此の身には苦もあるまいとや、明暮つきあふ人目にさへ樂な様に見えるもの、遠國隔てた男氣に思ひやりのないことは、むりとも云れず去りとては、せめて有所が聞いたと、フシこゑを、立ねばないじやくり、地氣もしづみ入る時しもあれ、心細げな鼓弓の聲、あはれ催す相の山、相の山われになみだをそへよとや、ゆふべあしたの、

版「糸竹初心集」に「抑も日本に三味線を弾きそめし事は、文祿のころほひ、石村檢校と云ふ琵琶法師あり、ある時琉球の島に渡りけるに、かの島に小弓といひて、絲三筋にて鳴す物有り、小さき弓に馬の尾を絃にかけて引なれば、小弓とはいふとぞ云々、これも確説とはしがたけれど、三味線とは同じ頃渡來せしものなるべし。

●相の山 「ゆふべあしたの………：聞て驚く人もなし。こゝまで相の山の歌なり。

●通りや 相の山の門付を断りしなり。

●どふぶくら *

●野邊とてあなたの 冥途の友となるまでが相の山なり。

●やつていなそ 手の内をやつて去らせんとなり。

鐘の聲寂滅、あらくと響けども、聞いて驚く人もなし、
 詞通りや、只の時さへ相の山聞ば、あはれて涙が溢れる、
 地かなしゆてならぬどうぶくらに、あだ聞ともない通りや、
 通りやといひて涙をおしのごふ 相の山「野べよりあなたの友とては血脉、一つに數珠一れん是が、冥途の友となる、詞ア、したるい手の隙がない、通りやくくと云聲に、心に苦のない新造禿、ばらくと走り出、
 詞こちら好ちや相の山、地聞て泣きたい所望くくと立かゝる、詞エ、いちの悪い子供ちや、それ程何が泣きたいこと、地やつていなそと巾着の紐をといて取出す、
 錢は一せん二世の縁、きれてもきれぬ笠の中、泣沈みたる顔見れば、戀し床しの四郎二郎、互にハア

●さいら *

●定めなき世に 「是が寢覺の友となるまでが歌。これは相の山ぶしを我身の上の事にやつて歌ふ。

、ハア、と計りに目くれ、心はしみぐくと、抱きつきたふも、あたりには禿が目元小賢く、こらへるだけとつゝめども、咽びふくろび泣きゐたり、地ア、いなせましたらよい物か、まちつとあはれな心をうたふて聞せて下さんせ、地あつと涙にするさゝら、鼓弓の弦も細き聲 相の山「定めなき世に、捨られて身の寂滅が、知らせたく文は、かけども便なし、ひとりねざめの、友とては夢に、見た夜のおもかげが是が、ねざめの友となる、地折しも二階奥座敷、來いよくと手を叩く、あい／＼あいと禿ども、立つ間おそしと走りより、是こふした事も有ふかと憂命をも捨なんだ、よふ顔見せて下んせと、すがれば、男も抱きしめ、涙の外は聲も

●鬼界が島に住む心が、康頼成経等に置去られて、孤島に悲しき生涯を送りしを、我身に譬へたり。

なし、なふ戀しいの床しいのとは、たいてい戀路の習ひぞや、それをとんと打越して、主親方にもそむきし故、奈良伏見まで賣渡され、今此京でやり手となり、花の都も我身には、鬼界が島に住む心、胼霜やけに苦しみて、手足の苦勞はなりもせふ、心をいためるばかりじやない、力わざにも、才覺にも、叶はぬものは逢ひたいと、思ふてやるせがなかつたと、フシあまへ口説くぞ不便なる、四郎二郎もつきせぬ涙、チ、道理道理いとをしや、調度々文でも云ふ通り、そなたのかけにて大事の繪を書き譽を取る、契約違へず身請をせふと思ふ間に、不慮の事ども命が有るといふ計り、恩をきた名古屋山三我等ゆるゑの浪人、行先もくめてた

●蘆屋釜の下繪 室町時代、筑前遠賀郡蘆屋村にて、土佐光信、狩野元信等の名工の下繪にて、松竹梅などを鑄出したる釜にて、茶人の珍重する所なり。

いといふ字は書様も忘れて、今は團扇の繪芦屋釜の下繪に露命をつなぎ、大津で問へば奈良にといふ、難波で聞けば伏見とやら、地是は采女雅樂之介、兩人の弟子の介抱で、丸四年目に顔を見て、嬉しい事はどこへやら、おれといふ者ないならば疾によい仕合、前垂鑑はさげまいと、親御の事まで思はれて、生た心はせぬぞとて、男泣に泣ければ、地ナウそふ打明けて下んすがほんぐの御眞實、わしはいつそ親のこと思ふ所へいかなんだ、私に罰が當らずは當る者はあるまいと、くどき立れば四郎二郎、二人の弟子も共涙、さよらの竹もいにしへの、フシ紫竹に染るばかりなり、調や、有て四郎二郎先いふべきは、名古屋山三春平此所にて不

●げしう けしくの音便。異様な
る。但しこはどうしても意

破の伴左衛門を討て、詮義にあふよし洛中の是沙汰、
意恨のものは某ゆる、聞捨ておかれぬ挨拶、廊の説は
どふぞといへば、さればいなア、委しい事も聞きました、
山三様にする世話は、こなさんへの奉公とさまぐく心
を碎いて、何の波風ない様に、十の物が九つ追付埒が
明く筈で、あれ奥にじやわいなア、是は大慶先通つて
對面せふ、イヤく待んせそりやならぬ、こな様を尋
ね出し、姫君と夫婦にせねば侍がすたると、今も今い
ふた人に逢はずと往で下さんせ、エ、愚痴なことばか
り、我故に一命を果さふといふ山三じやないか、逢ず
に歸つて人外の名を取れか、げしう逢せまいなれば此
で腹を 地切らふかと、脇差に手をかくる、ハテ死な

●餅屋のお福 「用捨箱」に、寶曆
の頃刊行なし、お伽鳥つくしとい
ふ草紙に見えたる圖なりとて、餅
を擡ぎたる傍に、馬の顔にお福の
面をかぶせたるものを掲ぐ、畫の
小書に「もちやのためのおふくな
りけり」とあり、此の馬に面を被せ
たるは、餅屋の看板なりと。

●どふぞく 如何く。

んせではないはいの、詞外に奥様持つまいといふ誓文
立てあはんせ、チ、姫君は儲置たとへ餅屋のお福でも、
山姥と祝言するとても、山三が詞を一たん立ずに置れ
ふか、地エ、世間見た様にもない氣がせばいぞやと耻
しむる、世間は唐まで知ても氣は武藏野ほど廣ふても、
大事の男を人にはそはさぬ、山三様に逢ふて四郎二郎
が女房は、此みやでござんすと罷出てことわらふ、
詞ヲ、云たくば云や詞の中に脇指を、此腹へ突こむサ
アどふぞくと 地詰られて、泣より外は何を云も大
切さ、そんなら云まい息災で居てくだんせ、去ながら
どふぞ云拔らるゝなら、云ぬけて見て下んせとまだく
どくくの忍泣、尤もく男のつら役、かふいふとて何

の如在があるものぞ、弟子衆こちへと涙ながら、奥へ行く間も惜まれて、調是采女様雅樂様、祝言の咄が出たら云消して下さんせと、地頼む返事の否應は涙にまぎらし入にけり、心もとなさ危なさに心騒ぎて落付ず、襖の際にさし足し、立聞すれば伴左衛門を討とめた物語、調ア、嬉しや女房ごとは出ぬそふな、まちつと聞ふ、あの呷きは何じや知らぬ、聞たい迄と耳を寄せ、地ア、悲しや連て歸つて姫君と、めをとにせふと云くさる、調こちの男が利口そうに、こなたの詞は背きませぬと、地ぬかし面は何事じや、エ、聞まいものを腹の立と、耳をふさいづ立つ居つ、フシ身をもみ歎くぞあはれなる、地舞鶴屋の傳三郎やり手引舟下男、いきり

●酒吞童子の首

取りにくいもの

切て大聲上げ、調こりや〜葛城様の身請さらりつと埒明た、跡の三月二日に隙をやるとの一札、王様の御綸旨より高直な物握つた、乗物の戸をくわらりと明て今でも大門お出なされと、地わめく聲に人々悦び走り出、ア、〜お手柄〜酒吞童子の首より取にくいこと、調主持ぬ身はこゝが過分、手を引合ふて門を出て、名古屋山三と葛城と後々までの咄を残さふ、ヤア亭主近付になつて置きや、狩野四郎二郎元信めぐり合ふ計りに、地互の苦勞は知る通り、身は葛城を請出す、四郎二郎は大名の御姫様をほり出す、祝言の夜は勝手へ見舞や、儲みやの禮は今申さぬ、前垂鑑を捨てさせ、武家か公家か町人か望次第に數ならねども、拙者が親

分先姫君の祝言には、待女郎に頼もふと勇みかけても
 なげ首に、目も泣はらして返事もせず、こらへかねて
 つゝと出、云んとするを四郎二郎、柄に手をかけ腹を
 さすれば手を合せ、なくくしされどなをたまられず、
 思ひ切ていはんとす、四郎二郎胸押明け、すでに斯よ
 と見せかくる、詞ア、く申し四郎二郎様、わたしや
 何にも申しませぬ、御災息で姫君と夫婦になつて下
 さんせと、わつと叫び伏ければ、共にせきくる四郎二
 郎、ヲ、よい合點く、廊の衆は涙脆く目出たい事
 にも泣たがる、身請する女郎衆に名残惜いは尤もなが
 ら、他國へ行ず死はせず、追付逢ふ泣きやるなど、
 他に云ふさへつゝみかね、目はうろろうと成りにけ

り、詞サアお乗物が参つた早うお出なされませ、いや
 く乗物古いと立出れば、一家の太夫天神鹿戀、葛
 城様さらばや、さらばでござんす、門迄送れ跡賑かし
 打たり舞たり舞鶴屋傳三が萬受こんだ、置土産をやり
 手衆おはるおなつといさめども、みやが心はあきから
 の、腰の巾着ぶらくと物さびしげにぞ 三重 見えに
 けり、フシ花の三月 地はや過て娘の年も廿棹、いつの
 間にかは長持に、桐の葉しげるよめり月、いてふの前
 の御祝言、名古屋山三のはからひにて、四郎二郎元信
 を北野の社人に借座敷、名古屋が家の子世繼瀬兵衛與
 添にて、供女中の出立や、地黒地淺黄紅ひはだ、フシ右
 近の馬場にぞ着給ふ、地並木の櫻暮かゝりまだ人顔も、

●女のざい

女の分際略。

白無垢着たる若き女の横合より、嫁入の供先、押割押割、打もたよくも事ともせず、しつかと縋つて引く程に、乗物の戸はくだけはなれ、姫君あつと叫び給ふを、胸ぐらつかんで引ずり出し、土手に押付引据たり瀨兵衛刀の反を打、六尺徒士衆追取まはし、そこをばなせ放さずは、打殺せねち殺せと口々に呼はれば、
 詞 姫君制して、ア、だまつて居やかまやるな、嫁りする身に女のざいで只の事とは思はぬ、四郎二郎殿の手かけか但し時のたはふれに、末では妻にせふなど、男の當座間に合を、一筋な心から其恨であらふの、我身に知らぬ事ながら、殿を持つ役なれば聞くまいとは云ぬ、道理さへ立ことて負る道なら負もせふ、又筋もな

●七本松 北野にあり、又一夜の松ともいふ、其の故は昔し菅神の告げによつて、北野右近馬場に、一夜のうちに松千本生ず、七本松は即ち千本松の名残りなりと。
 ●頭のかゝり 何といひ出すべきか詞のかゝりを得ざりしとなり。

●西所が原 最勝河原のとも。五三昧の外の火葬場なり。

い道云て見や、我にも手も有り足も有る、地銀杏前が理不盡と云れてはおとなげない、相手向ひにしておきや、サアなんぞ聞ふと、口はろくちを分ながら、胸はしどろの山坂や、顔はつゝじの如くなり、女ためいき顔を上げ、ア、さすがでござんすな、詞 其美くしい出様には、こふ取た胸ぐらをはなし様に困つた、地 我とても中々狼藉する氣は微塵もなく、お乗物に縋つて歎きを申しお情を受ふと、七本松から跡先には是まで伺ひフシ参りしが、あたまたの掛りが如何もなく思はず慮外致せしなり、仰々しい白無垢着たは討はたしての何のといふ、おどしでもみせでもない、思ふ願が叶はずば、西所が原か舟岡へ直に飛ふと思ふ氣で、私が爲のしゆ

●舟岡 舟岡山、山城五三昧の一。
●しゆら出立 死仕度のも。

ら出立、高いも低いも女子には、大なれ小なれ此氣はあれど、云ぬで持た世の中、色に出さぬをたしなみと、心で心を叱つて見ても、いかなる欲もはなれふが男に欲は得離れぬ、去とは汚ない氣、耻かしゆござると聲を上げ、フン譯をも云ず泣居たり、瀨兵衛を始め女房、御祝言の時刻違ふ、調道行ばかり云ずとも、入事計り申せくとせめければ、チ、御尤もく私土佐の將監が娘、幼名はおみつ親のうきせに身を賣り、越前の敦賀で遠山と申せし流の者、地四郎二郎殿とは故有て、起請一筆かゝねども、釘かすがひよりはなれぬ中、調身も持つし方々をうろたへ、今は六條三筋町上林が内みやと云ふ、地流れの身より淺ましい、や

り手はしてもおのれやれ、一度は狩野元信が内儀といはれふくと、四年が間の氣のはり弓はつたりと弦切れて、泣にも力あらばこそ、むり共そん共餘り無法な事ながら、長ふは入らぬ一七日、今宵の嫁入を下されば、跡はお前と萬々年、七日添ふて別れて後は、此世の生顔見せまいし、たとへ死んでも彼人の未來の回向は受ますまい、もふ此跡は申しませぬと、涙を流し手を合せ、フンし轉ぶこそあはれなれ、地姫君呆れて坐せしが、聞ば笑止いたはしや、いやと云はたいてい、どうよく者といはれふず、心得たといふから迷惑するは我一人、新枕はどうかうときほひかゝつて行く嫁人、道から貸して歸るとは咄にも聞ぬこと、こちや義理づ

(334)

くめになつたかと、聲を上て泣給ふ、フシ道理の上の道理なり、やゝ有て涙をおさへ、ム、よし／＼合點した、詞そなたが其思ひからは男も心にかゝる筈、二人の縁のはなれぬ中へ嫁入しておかしうない、蓋もかけごも打あけたこそ夫婦なれ、男をかしてやる程に互の心をはらしたも、去ながら餘りかけごをあけ過し、底抜きやつたらこちや聞ぬと、涙ながらにの給へば、ア、有難やと遠山は、姫君に抱き付、かすお心よりかる心、御推量遊ばせと、泣聲よそに飛梅の、フシ神もあはれみ給ふへし、地サアとてもなら早いがよし、元信は豫より、傾城好と聞き故、此小袖を見や廊模様云付た、是着て行きやと打かけぬいて、七日といふも忌々

●飛梅の神

天満宮のとも。

(335)

●嫁の手道具 誰も知る事ながら、近來おひ／＼略式となりて、中流以下には用ひざるも多く、又時代の推移によりて廢れ、今は名稱の存せざるものあり、御厨子は厨子の敬語にて櫃を立てたる如く、棚

●此の時の地藏菩薩 俚諺に、借る時の地藏顔、濟す時の闊寛面。

し、來月一ばい貸ぞや、ア、お心ざしは有難けれど、ついに別るゝ此身なり、然らば七々四十九日の中は私か夫と思召せ、此分で死んだらば、さだめて男の餓鬼道へ落ませふと、泣々立てば姫君、そふいふて皆吸乾しやんな、どこぞ少しは残したも、こちは是から腰元つれてひろふてもどる、あの乗物で皆供しやと、歸るさを見て遠山は、姫君様の情ほど我身の罪は重なる、かる時の地藏菩薩に捨られ、かやす時の閻魔の廳、どふ云てのがれふと、涙をかこふ神垣や、神も佛も見通しに、すいもあまいも梅青む、北野のかり屋に、三重よめ取の、フシ嫁の手道具、地御厨子鏡臺うちみだれ箱、葛籠貝桶狭箱、長刀もたせてやり手のみやが、來

あり舞戸などあり調度書畫などを載す。葛籠は衣裳入れ也、貝桶は貝合せの貝殻を納める器、行器の如く蒔繪などにす。

●こく餅 何も模様なく唯圓く白き紋をいふ。中世の武士、矢口の祭の黒餅を家の紋とせしに起るといふ。麻上下の紋なり。
●つきくし 似合はしきと。

るとは思ひがけもなし、其心底の届きしこと姫君の情といひ、かたぐく黙止がたければ、門弟雅樂之介采女準人大學など宗徒の弟子共、すべくまかなひ春平にも内意を得、表向は銀杏の前、御入有りしと披露すれば、方々の音物、樽よ肴よ巻物よ、太刀折紙の馬代銀五十目掛の蠟燭の、明ぬ暮ぬと賑ひて、今日五日目のあさ上下、雑煮のこく餅子持筋、ツキくし、つくくしくぞ見えにける、フシ其日も漸うかたぶく比、名古屋山三春平は、お見舞申すと案内ある、雅樂之介出向ひ先以て此度は姫君御了簡美しく、おみやも念晴れ元信心も落付申す事、地皆是貴公の御蔭門弟中も忝けなく悦び存じ候といづれも禮をなしにける、是は迷惑元信

●ぎやうな 仰山のと。
●無紋の色 淺黄上下、編笠すべ
て葬禮の出立。

爲と存ずれば、各同前の大慶、調借今日は五日め五百八十の餅をついて、里歸りといふこと縁邊の式法なれども、親もとは遠所祝ふて我等が宅へ呼たいと、葛城も申すが、一寸尋ねて見たいとあれば、うたの介打笑ひイヤ尋ぬるに及ばず、頓て別るゝ日限のめをと寢入る間も惜いとて、顔と顔を付き合せかぶりもふらぬしたゝるさ、地里歸は借おき臺所へも出られませぬ、それはぎやうなくひ付やうそふして互に飽かせたら、跡の爲には珍重、元信筆は達者なり、一日一夜に半年のフシ仕事は出来ふと笑はるゝ、地かゝる所に無紋の色に淺黄の上下、編笠取て入るを見れば舞鶴屋の傳三郎、出口の與右衛門、打しほれたる風情なり、調名古屋を

●なめ過ぎたふだうけ なめ過ぎ
 たは無禮にも程があるの意。ふだ
 うけは不道外にて冗談に事を缺い
 て、祝言の場へ葬禮の衣裳などを
 着けて出るとは以の外と咎めたる
 なり。

●やくたい *
 ●骨佛 死體を火葬して後の骨を
 いふ。

はじめ、門弟中興さめて、是傳三あんまり夫は粹過た、
 聞ぬといふことあるまい葬禮の戻りに、祝言の家へ立
 よるはなめ過たふだうけ、可笑ふない歸れくと苦々
 敷叱られ、鼻うちかみて目をすりく、姫君様の御祝
 言と遠慮いたして見ましたが、脇から沙汰が有てはお
 恨の程も如何と、鼻が心を付まして、今日七日目の墓
 参りついてながらの御しらせ、地常々氣立が結構で、
 おみやとは云ず佛々と申したに、あつたら佛をやくた
 いもない、骨佛にしてのけたと、さめくとぞ泣居た
 り、詞人々更に誠とせず、酒に酔ふたか狂氣か、みや
 は少し様子あつて姫君にかはり、四郎二郎と祝言し、
 五日前より奥に夫婦並んでじや、たわけた事ぬかすま

●蓮臺寺 船岡山の下にあり、眞
 言宗。

●五輪 方圓五個の石を積立たる
 石塔。地水火風空を象りたるもの
 故五輪塔といふ。但しこゝは卒塔
 婆のことなるべし。

い、イヤわたしをたはけになさるゝが、七日前に死ん
 だ人が五日前に来るものか、蓮臺寺せんよ様の御引
 導舟岡山で灰になし、和國様を始め女郎衆から名代に、
 禿共が灰よせ五輪まで立た物、何の偽り申しませふと
 眞顔にいへば、人々もぞつと怖氣も立寄て、詞して眞
 實か如何して死なれた事ぞと云へば、眞實かとはいと
 しぼげに、常が癪持ぶらくとはしなから、一日と寐
 れた事もない人が、いつぞや葛城様身請の晩から頭痛
 すると引こんで、地夫から枕あがらず、次第に重つ
 てくる程に、お客衆のひきかくで、柳原の法印様半井
 の御典藥幸ひと和國様へ、對馬の客から参つた朝鮮人
 參、尾張大根見る様なを刻もせず丸ぐち、人參の風呂

●いづくに立ぬ

役に立ぬも。

吹を一期の見はじめ、人參でも鐵砲でもいかな咽を通すにこそ、もうないに極つた私をよびよせ、調今迄はかくした遠山といふた昔から、四郎二郎様と夫婦の契約し、めでたふ願かなふたら、夫婦連で熊野參りを致そふと、願をかけ此笠の紐も手づからくけました、是を着て四郎二郎様熊野へ參つて下され、死ても心は連立たふ書置もしたいが、口でさへ盡されぬ筆には中々まはらぬと、目をほつちりとあいて南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と七八遍は聞きました、地なふ肝腎の時には念佛といふ物も何のこくに立ませぬ、なむあみさへすうくだぶつ迄やらずに、ころりと取ていきましたと、わつとさけば人々も、地偕は定よと手を打て、フン皆々

袖をぞしぼらるゝ、地名古屋も呆れ居られしが、疑ひもなく夫に引るゝ魂魄、かりに形を見せけるぞや、左もあれ様子を尋ぬる爲、腰元衆くよびければ、あいと答へて奥より出る、調なんとおみやは機嫌はよいかと云ければ、ア、機嫌よふにこく笑ふてござんする、去ながら志ありとて、酒も魚も口へよせず、檀の香の煙たやすな、煙たゆれば此に居ることならぬとて、お寝間の内は抹香でふすぼりますと云ければ、して四郎二郎はどうしてぞ、調ア、さればおみや様の頼みで、お寝間の襖に熊野山の繪を遊ばいてござんする、地偕はみやの幽靈疑ふ所もないとあれば、腰元驚ろきア、怖や、なふ知いで傍に居ましたと、膝の傍に這よりて

●野干 狐の異名。

フシ身を屈むこそ道理なれ、詞雅樂之介心を決せんと
 思ひ、左もあれ狸野干のわざも有り、誠の死したる幻
 は、形あれども影うつらずと承はる、地某参り直に逢
 ふて笠を渡し、燈火をたて實否をためし申すべし、か
 たぐは小庭より障子の影を御覽あれ、たとへ怪しい
 事ありとも必ずわつと云まいぞ、何が怖いこと有ると
 誰も口では夕暮や、小氣味の悪き籬が本、軒に數蚊の
 餅つきも、其の前垂のなごりかと、心細くもたゞずめ
 り、詞うたの介何心なき調子にて、是は暗いお座敷み
 や様はそれにか、火を點したら能うござらうと云聲す、
 ア、さればいな、心の迷ふた身の上闇に闇を重ねるつ
 らさ、地はらしてほしやと夕顔の、黄昏照す行燈の、

●數蚊の餅つき 夕暮に蚊群の上
下するを、俗に餅つきといふ。

●五輪とみやがものごし 障子に
映る影坊子は卒塔婆なれども、其
の動くものごしはおみや其儘なり
と。

●牛王の告 起請を書く度に熊野
の烏か三羽づゝ死すといふとは既
に訛けり、其れを敢てするなれば
罪深く、牛王の告恐ろしとなり。

障子にうつるを能く見れば、元信はもとの人體にて、
 女の影は五輪とみやが物ごし計り、人間の地水火風の
 風もろき、木の葉にむすぶかけろふの、露の姿そあ
 はれなる、地四郎二郎はらうくとつかれわびたる如
 くなり、雅樂之介なほいぶかしく、詞此菅笠はさとの
 便に参りしが、何に入る事ぞと云ば、なふ嬉しや嬉し
 や、ほんに是が欲かつた、私が熊野を信ずること、敦
 賀では遠山三國での名は勝山、伏見へ賣られて淺香山
 山といふ字を三度つき、夫故に木辻では三つ山と付ら
 れし、地思へば熊野三つの御山の名をけがし、牛王の
 とがめも恐しく、お主と一所にして下さらば、連立お
 禮に詣でませうと、笠の紐までくけ置き、追付別るゝ

身なれども、一日でも斯う添ふからは、願は叶ふた同
 前神佛にうそはないと、此禊戸にお山の繪圖を頼みま
 し、調参つた心で拜まんと思ふ所へ此笠は、どふした
 便に來たことぞ、餘の事は何もいはずか、地又の便に
 傳三殿へたとへいか成る事ありとも、四郎二郎様へ歎
 きのかゝる事などは、知らせまして下さんすなと、よ
 う云届けて下さんせと、苔の下まで我夫、フンいたはる
 心ぞ不便なる、地サア夫婦連で参りませふ、こなさま
 は勝手へ行て、後夜の鐘のなるまで念佛きらして下さ
 んすな、似合ふたかしらぬと、笠打きたる五輪の影、
 五つのかりの夢うつよ、よその事ではなくなかも、も
 との座敷へ人々は、宗旨々々の手向草、題目眞言念佛

の、回向にふくるも 三重

三熊野かげろふ姿

歌あらしやあたら夜や、夫婦の中にさく花も、一夜
 の夢の詠とは、知らぬ男の、いたはしやと、フン泣より
 ほかの、ことはなし、昔の朝の身じまひに、髪にたい
 たり裙にとめ、そよとふくさの色かぜも、今焼香に立
 つ煙り、反魂香と薫るかや、香爐の灰の灰寄も、順を
 云ふならこなさんを、我こそあらめさかさまの、水の
 流の身のならひ、ところくの死水を誰に取られんあ
 さましと、ナクリよそに、いひなす、言の葉を、世にな
 き人とはそも知らず、ア、いまくしい、おひ木の末

●反魂香 漢の武帝、李夫人の死
 を悼むと深く、今一たび逢ひ見ん
 と欲し、方士をして反魂香を作ら
 しめ、之を焼くに李夫人の姿、香
 の煙の中より見るといふ。

(346)

●照手の姫 照手の姫の事は、小栗判官の説經、古淨瑠璃にて能く人口に膾炙する所なり。照手は横山の姫にて、小栗を慕ひ、館を遣れ出て、瀧州青墓の長が許に水使女となる。常陸の小萩は其の時の照手が假りの名なり。身を旅籠屋の水棚は其の時の事をいふ。
 ●がきあみ 古淨瑠璃以來がきあみとあり、餓鬼病なるべし。即ち一種の癩病。

の、思ひ置はよしなやな、こちもそなたもわか松の、
 千代の盃ざゞんざ、フシ濱松の音、七本松の七本を、
 女は卒堵婆に數ふれど、男は今日の七五三、嫁入事せ
 したはふれも、今は誠と嬉しげに、手を引き合ふて笑
 ひ顔、我は朝顔しほみゆく、花の上なる、露とは知ら
 ぬはかなさよ、月はかけてもみつの山、チクリ 娑婆の便
 りは片便宜、文も届かず言傳も、フシはで心のくまの
 路や、照手の姫のやつれ草、常陸小萩も夫ゆる、身を
 旅籠屋の水棚の、はしに目鼻のがきあみを、夫とは更
 にしら絲の、縁はきたなき土車、心は物に狂はねど、
 チクリ 姿を物に狂はせて、説經ひけやく此車、ゑいさら
 さらく、地さゝの葉にしての旅路の、ごせのとも、

●湯元 紀州熊野湯の峰のと。同所には今も小栗判官の車坂、其の他小栗に關したる舊跡あり。一たび引けば云々これ説經古淨瑠璃以來の文句なり。

●飛鳥の社濱の宮 これは起請の上と呼びひたる神の名。

●和歌の浦 紀州の名所、和歌山を去ると二里餘。

●岩代峠 *

●新宮 熊野三所権現の一、本宮より十餘里南、伊勢の國境にあり。水野氏の居城。
 ●補陀落や 「ふだらくや岸打つ波はみくまの、那智のお山にひやく流津瀬」。
 ●那智は千手觀世音 紀州牟婁郡にあり、西國三十三所第一番の札所。熊野三山の一。
 ●花山法皇 冷泉帝の御子なり圓融帝の禪を受けて位に即く帝龍姫藤原恒子の卒するを悼み僧となり

(347)

一たび引けば千僧供養、二引引けば萬能の、フシ薬の湯
 元と聞からに、四百四病は消もせん、骨になつてもな
 をらぬは、わしがそさまを戀病、かはる心を案じては、
 神の御名さへぞつとする、飛鳥の社濱の宮、王子く
 は九十九所、百になつても思ひなき、世は和歌の浦、
 梢にかゝる藤代や、地岩代峠沙見坂、書寫す繪は残る
 とも、我は残らぬ身と聞かば、いとしや左こそ我夫の、
 涙にくれて筆捨松の、雫は袖に、フシみつじほの、新宮
 の宮居かうくと、出島に寄する磯の波、岸打つ波は
 補陀落や、那智は千手觀世音、いにしへ花山の法皇の
 後の別れを、戀したひ、十善の御身を捨て、高野西國
 熊野へ三度、後生前生の宿願かけて、發心門に入る人

花山寺に入り入覺と申す、やがて高野熊野等に参詣あり。西國三十三所はもと中山寺が一番なりしを法皇那智を第一に参拜ありしより那智を以て第一番と爲す。

●音無川 本宮と新宮との間にあり岩田川また同じ二川の熊野川に落合ふ所を巴が淵といふ。

●この秤 閻王の廳にありて地獄に墮する時は此の秤にかけられ罰の輕重をはかる。

●垂跡和光 佛衆生濟度の爲めに本地を隱し、或は神となり、或は種々の身を現するをいふ。

●三所権現 熊野本宮、新宮、那智の三所をいふ。

●死したる人の熊野詣 死人が熊野に詣る時は、逆さま後向に歩くといふ俗説あるによるなるべし。

は、神やうくらん御本社の、證誠殿の階を、おりてくだりて、待うけ悦び給ふとかや、地我はいかなる罪業の、其因縁の十二社を、巡る輪廻を離れねば、疑ひ深き音無川流れの、罪をかけて見る、ごうのはかりのおもりに、それさへかるき磐石の、いはた川にぞ着にける、垂跡和光の方便にや、名所く宮立まで、顯はれ動き見えければ、元信信心肝に染み、我書く筆とも思はれず目を閉ぎ、南無日本第一大靈驗、三所権現と伏し拜み、首を上て目を開けば南無三寶、先に立たる我妻は、眞逆さまに天を踏み、兩手をはこんで歩み行、はつと驚きこれなふ、淺ましの姿やな、誠や人の物語、死したる人の熊野詣は、或は逆さま後ろ向、生たる人

●つしまし
かしたる。

可憐なり、轉じて耻

にはかはると聞く、立居に付て宵より心にかゝる事ありしが、偕はそなたは死んだかと、こぼし染たる涙より、つきぬ歎きと成りにけり、地耻かしや心にはろくちを歩むと思へども、逆さまに見えけるかや、四十九日が其中は、娑婆の縁に結はれ、姿を見せて契りし物を、妹脊の中にこはけ立、愛想もつきば如何せん、變る姿のつしましや、相見ることこそ是かぎり、泣聲ばかり身をしばる、涙の霧や戀慕の霞、冥々、朦々朧々として、見えつかくれつ燈火の、フシ油煙に紛れ失せにけり、地元信五體をかつばと投げ、よし雨露に朽果し、骸骨なりともいだきとめ、肌身に添へん夫婦の友、何に怖氣の有るべきぞ、現世の逢瀬かなはずば、又

●極樂諸天 極樂は南瞻部洲即ち此の世界を去ると西方十萬億土にあり、諸天は四天或は三十三天などの稱あり。

●いつならはしの世渡りや
註)是より遠山の姿藤藤とあらはれての所作なり。

●三途八難の悪趣 三途は火塗、血塗、刀塗、八難は在地獄難、畜生難、在餓鬼難、在長壽天難、在北洲難、盲聾瘖癡難、世智辯聰難、生佛前後難をいふ。即ち八難は八處の障難にて、感應に苦樂異なるも皆佛を見ず、正法を聞ずとなり。悪趣は地獄、餓鬼、畜生

死して此世を去り、極樂諸天はおろかのこと、たとへ地獄の底までも、誘へ伴なへ連れだてと、座敷のくま、屏風押除け、障子を開き、やれ遠山はいづくにぞ、みやはいづくに我妻戸、あくる遺戸にやり手の形、あらはれ見えしぞ、あはれなる、いつならはしの世渡りや、阿波の鳴戸は越るとも、此うき舟のうき流れ、何とやり手の身ぞつらき、まぶの忍び路せきとなり、文の通ひの逆茂木に、人の思ひは、フシいましめながら、地我身はつゝむ戀衣、赤前垂の火焰に焦れ、三途八難の悪趣に墮す、苦みの涙目を眩し、生死をわかぬ迷ひの雲所々に名をかへて、數々色を飾しむくひ、身體一つが五つに別れ、五輪五行の苦を受る、いかなる世に

三惡道のとにして、三途といふも同じく、三途は亦八難のうちにも含せらるゝも、八難中殊に三途を劇とすといへり。
●五輪五行 五輪は空風水火地、五行は木火土金水なり。

●後世の道には遠山が (要註)遠山五たび名をかへ所をかへしを五輪にあてたる此一編中の作者の趣向どころ關目なり。四大、正しく四大種といふ、五輪のうち空をのぞきてのあとをいふ。

か脱れんと、叫びわななく袂のかけ、艷色あてなる二人の遊女、フシ左右に分れ見えたるぞや、地是こそは其はじめ、白粉紅花に粧ひし、後世の道には遠山が、仇の情の釣針に、人を敦賀のうき姿、松といはれし松が枝は、四大のもの木に、フシ歸るなり、地次は三國へ買流されて、姉女郎や朋輩に、賣負けまいぞ勝山と、名をかへ風をかへけるも、戀に我が張る我慢の山、ふもとの塵のちりひちの、土に歸すを御覽せと、フシ夕月出ることくにて、地後に高く現れしは流れ漂ふ河竹の、伏見に來ての淺香山、地さすが所も極樂を願へとつくる撞木町、安養世界の夜見世には、ともすべきともし火なく、吹消す風も吹かずして、一心の火をもとの火

●美酒霞酒 霞酒は濁酒の麴の溶けずして霞の如く交れる故にしか名づく。美酒といふも亦同じ。いづれも奈真の名物にして、霞酒は今もあれど、恐らく酒の質は昔しと異なるべし。

●四大の四苦 生、老、病、死の四苦。

●待夜の鐘云々 これは待宵侍従の故事なり、侍従は紀光清の女にして近衛帝の皇后多子に仕ふ、皇后或時侍従を召し、待宵と後朝とは孰れが苦しきと問はせ給ふ、侍従即ち「待宵に深く鐘の聲聞けば、あつた別れの鐘はものやはと詠じて答へ奉りぬ」と。一説に此の時歌は後徳大寺實定と關係ありし時

に、かへす間のかげぞかし、前に立たる花すよき、ほのく見えしまぼろしは、木辻の町の三山と、フシよばれし時のおもかげが、今は名のみ奈良坂や、この手かの手の枕の酒、雲霞と隔れど、解くれば同じかすりのの、水をかりなる戯も、終に迷ひの井堰にからみ、木は執心の斧に碎かれ、土は逢ふ夜の壁と隔たり、火はまた三世の縁をやく、四大の四苦を此身一に、重ね重て、空より出て空に入る、報も罪も色も情も、迷ふも悟るも待夜の鐘も、別れの鳥の聲々迄も、フシ地水火風の、五つの玉の緒、只一筋に結びあひたる姿なるぞや、地なふく惜みてもなほをしまるゝ、名残も縁もついでに行く、道ならばいざ伴はん、とは思へども夫の

の歌にて、これに對する物かはの蔵人が返事あれども、要なければ畧す。

●一見卒塔婆永離三惡道 「涅槃經」一見卒塔婆永離三惡道。何況造立者決定生安樂。とあり。卒塔婆の功德を説けるなり。

●三熊野本地の三尊 佛家よりいへば、熊野権現はいつれも垂跡なれば、皆本地佛あり、即ち本宮は本地阿彌陀、新宮は本地觀音、那智飛瀧権現は本地千手觀音といへり。

命長かれと、祈る心もさまぐくに、皆妄執のあた夢と、さめぐ脆き涙の露の玉の臺の床の内、連理の蓮かたしきて、ながき契りを待つぞや待たん、しるしはこれ此、一見卒塔婆永離三惡道、南無や三熊野本地の三尊、迎へ給へや道引給へと、唱ふる聲は伏屋に残つて、フシ形は見えず消にけり、元信抱きとゞめんと縋り付ば影もなく、うんと仰向にめくるめき、忽ち息切絶入りしを、名古屋揚屋門弟子驚き騒ぎ、薬様々呼び助け、やうく一間に三重一休めけり、夜もほのくと明け行く頃、管領の雜式、不破の道犬長谷部の雲谷誘引し、件左衛門が酒漬の死骸を昇せ、どやくくと亂れ入り、此所に名古屋山三春平やある、管領よりの御下知あり、

●かなぶら

鐵鞭なり。

對面せんと呼はつたり、名古屋運々せず出迎へば、雜式かなぶち引ならし、不破の伴左衛門を御手前が手にかけしこと紛なき上、父道犬願ひによつて吟味を逐らる所、盜賊の罪脱れがたく、曲事に行はる、條召捕來れとの御掟、尋常に繩をかゝられよとぞ仰ける、名古屋少しも騒がず懷中より、くつわの手形數通の文を取出し、彼様の愚蒙の返答は申すも似合ぬ事ながら、片口の御裁斷いかにしても輕々し、是此手形を御覽せ、葛城ことは三月二日に親方が暇を取り、拙者が本妻借宅見立の間、揚屋に預け置き所伴左衛門數通の艶書、斯の通り不義者の女敵なり、此方より願を申し、親道犬をも罪科に沈めんと存ぜし折から、かへつて我等を

召取とは定て夫は各々の聞違、それなら道犬か雲谷が事でがなござらう、地迹も走りもせぬ男、聞直してお出なされよと、フシ大様にこそ答へけれ、調道犬つゝと出、汚いくこりや山三、悴伴左衛門葛城を請出す手付として、金子五百兩懷中せり、女敵討は聞えたがなせ金子は盗んだ、總じて盗といふものも盗む時はうまいと、顯れた時は辛い苦い物ぢやげな、サア何と脱るゝ所は有まいと、地證據なき云分ながら名古屋も相手は死人なり、何をしるしの云譯と、フシ苦々敷ぞ見えにける、調四郎二郎斯と聞より飛んで出、いやく兎角の評議は御無用、盗人ならば盗人、切取ならば切取、科人は狩野の元信、繩を百筋千筋でもお懸けなされと、

大小ぬいでなげ出さんとする所を、名古屋をさへてし
 ばらくく、御心底忝けない去ながら、それまでに
 及ばぬこと平にくと押し止め、是道犬、某ぬす人でな
 い申譯が立ならば、おのれまた侍に、盗人と云かけし
 た其科はなんとする、時に雲谷進み出、イヤサ山三、
 盗人でない言譯立ば、命を助かるその方が仕合よ、道
 犬公は一子を殺され金子を取られ、何のあやまりある
 べきと、いはせもはてず、ヤアうぬらが存ずる詮議に
 あらず、御屋形にては一つ間へさへ入ざりしを忘れた
 か雲谷、地此穿鑿濟んでうぬも遁さぬ用心せよと、睨
 み付けければ道犬、山三くわき道へすへらすまい、
 五百兩の金子を身に付た伴左衛門、きりは切たが金は

知らぬと云ばとて云せふか、地盗人でないならば云譯
 せよとつめかくる、チ、サ云譯はして見せん其跡は合
 點か、イヤ先云譯から聞んと、せりあへば雜式、コ
 レく名古屋、問答までもなしその爲の我々、人に
 こそよれ兩方共に弓馬の身柄、盜賊と云かけ分明なら
 ぬ訴訟、且は上をかすむる越度、云譯立ば道犬は存分
 にはからふへし、又盜賊に極らば下知の如くお手前に、
 繩をかけ申すと理非明かに述らるゝ、名古屋勇んで罷
 出、名古屋山三春平は外の事は不調法、傾城の買やう
 と人切るやうは大名、おそらく宗匠ござんなれそれ
 へ、伴左衛門が死骸を是へ出されよ、地心得たりと
 役人共封切ほどき酒漬の、死骸は更に色かはらず、

フシ 只其時の如くなり、地名古屋袴のそば取て近々と
 寄り、調彼を討しは先月廿日、曉月の時鳥、名乗かけ
 しは欺さぬ證據、向ふ疵に切ふせとゞめをさゝんと乗
 かより、胸押開けば懷中に金子あり、此儘置いては誠
 の盗人來つてさがし取らんは必定、時には山三が盗み
 しと後日の難を察せし故、鳩尾先をるぐつて、金子は
 彼奴が身體のうち肺の臓に押込んだり、五臓の中にも
 肺は金、同氣もとめて朽も鎔もよもせまじ、地いで見
 せんと手をのばし、ぐつと入れ朱にそみたる純子の財
 布、引ずり出して、是見たか、是でも山三が盗人か、
 地弓矢取る身の仕方を見よと道犬にはつたと投付け、
 死骸を踏へ突立ば、雜式を始として、元信其外門弟等

●るふ (箋註) 流布なるべし、世
 間に知れ渡りたる御といふと。

出來たく、あつばれあつばれ御分別後學なりと勇を
 なす、道犬は言句も出ず、雲谷はひるまぬ顔、相手の
 云分立からは此方は切られ損、お歸りなされと、立と
 ころを、二人の雜式飛かより、てつぼうふり上打程に
 面も眉間も打さかれ、胴骨砕くる計りなり、頓て繩を
 かけさせ、道犬親子は世間るふの重罪上を犯すといひ、
 只今の始末諸人の見せしめ、親子諸共獄門に曝さるべ
 し、それく死骸の首を打て、承まはつて下郎共、か
 き首にしてたぶさを擲げ、地道犬が首に掛させ、儲雲
 谷は當座の慮外、罪の輕重いかがあらんと有ければ、
 元信春平詞をそろへ、もとは彼奴めが悪逆、騷動の始
 なり、古主の館に訴へ、長袖なれば流罪に行ひ申した

●まかせておける 當時流行の奴詞。まかせておけなり。

●家を彩色く 彩色をさいしくと動詞に使ひたる珍らし。

●壺の印 古法眼の印壺の中に元信とあればなり。

●夏毛の狩野の筆 筆を作るには種々の獸毛を用ふれど、鹿の夏毛を上品とするより、夏毛の鹿の音を狩野にかけたるなり。

し、尤もく二人ともに牢屋へやれと引立れども臍立ず、エ、怯卑者歩まずに任せておけに打入れて、
ながらの酒びたし地獄の鬼の晝食菜と、地たはふれ笑ひ歸らるゝ、悦ぶ中にも元信は、憂に沈む那智の瀧、
亂るゝ色をいさめんと、うたへや唄へ雅樂の介其外の門弟中、うれひは憂ひ祝儀は祝儀、未來の嫁入は十七日、現世の嫁は七百町、永く知行にすみ筆や、家を彩色く繪の具筆くまふで、
藁筆泥引筆その筆先に金銀も、わきていづみの壺の印、並び夏毛の狩野の筆末世の、寶となりけり

下之卷

●繪の六法 一に曰く氣韻生動、二に曰く骨法用筆、三に曰く應物寫形、四に曰く隨類傳彩、五に曰く經營位置、六に曰く傳模移寫。

●長康、張僧、陸探 張僧繇は金陵安樂寺の壁に四龍を畫き、點せず、曰く之を點すれば飛去らんと、疑ふものあり、因て其の一を點するに、龍忽ち壁を破りて昇天すといふ。畫龍點睛の語こゝに起る。陸探は晉の畫人、其の畫六法に適ふ、畫壁の稱あり。

●天然彩墨の妙手 土佐光信は彩色を施す妙なり、雪舟は之に反し多く丹青を用ひず、墨繪を得意とせり、而して之を合せたるもの狩野元信とす、故に彩墨の妙手といへり。

●祝髮 佛家にて髮を剃り落し、佛門に入るを祝髮といふ。

●太永七年 足利義晴の治世。新帝は後奈良帝なり、此の年即位享祿と改元。

●大嘗會 天皇即位の後、始めて行はせらるゝ新嘗祭なり。悠紀主基は其の祭壇の兩側なり。

地凡そ繪の道には六の法あり、長康張僧陸探の三人を異朝の三祖と學びきて、和國に筆の色を増す、狩野の四郎二郎元信、天然彩墨の妙手を得て、後柏原後奈良の院正親町の帝、三代四代の聖朝につかへ、祝髮の後越前の法眼玉川齋永仙と號し、末世の今に至るまで、古法眼と賞歎するは此元信の筆とかや、既に太永七年新帝、大嘗會悠紀主基の御屏風を書、從四位下越前守に補任せられ、數多の門弟上下の供人肩を怒す山科や、土佐の將監光信の、山庄に一案内せられける、フシ將監夫婦出迎ひ、今官祿にひいで給ふを見るにつけ、娘が事のみ忘れがたなふ候と、詞に先立涙なり、詞仰の如く某とても、彼人を先立世にまじる所存なけれど

●御ひけい 御底影なるべし。おかげといふと音讀したるものなり。

●時服 其の時候に適したる衣服。權者は六角家より此の度の出世を祝して贈りたる音物なり。

も、將監殿を世に立んと、惜からぬ世も捨かね申せし所に、次第く登庸し大嘗會の御屏風を仕り、叙爵に至る朝恩の上、地貴公の勅勘訴訟叶ひ、向後一家の結びをなし、相並んで繪所の門をひらくべしとの宣旨を蒙り参りたり、親御達を世に立なば草葉の陰の娘子の、一つの迷ひもはるべきかと、かたの如くに禁中方願取なし候とかたり給へば、將監夫婦、有がたや忝けなや歎きの中の悦びとは、我等が身にて候、貴殿の御ひけいにて勅勘をゆるさるゝも、一つは娘が光りぞと、フシなほく落涙せきあへず、かゝる所へ名古屋山三春平、樽肴黄金時服さまく音物持せて、將監に對面あり、雲谷不破が不屈ゆるゑ、調元信我等兩人永々沈淪

●先知 浪人する前に領したる地行なり。

致せしところ 善惡の是非落居し、三人の惡黨死罪流罪の嚴科に處せられ、某も先知に復し候、其節は姫君の御事に付、御自分さまく御懇志の趣き、主人御館満足致され、先當分御禮申さるゝ印目錄の通り、微少ながらと述べれば、地御使がらと申し御丁寧なる御事と、互の禮義淺からず、フシはらく時こそ移りけれ、調やゝ有て名古屋、ヤア承はれば娘子遠山、くつわの手前約束の年明て、今日これへ歸り給ふよし、さぞさぞお悦び推量致したと、いへ共人々のみこまれず兎角の返答なき所に、供の者共聲々に、遠山様はやあれ迄見えまする、迎ひにお出なされませありやゝふつてござるはと、地いふても更に心得ず、死して程ふる

●香車 香車は將棊の通語に楯といふより、遣手の事を香車といふ銀杏の前遠山の菩提を吊はん爲に太夫に扮し又平は妓夫、女房は遣手に扮して出たるなり。

●究立

*

遠山が、歸らん様はなみだながら立出見やれば、屋形の姫君いてふの前、かもじ入れずの二つ櫓、かものはなりのはすは袖、吃の又平日がら傘、さしづめ香車はフシ女房なり、いつならはしの道中も、心つければふりやすい、ホチクリふれく、雪の遠山が御影もよもや是こゝが、おれが内かとおつと入り、なふとつ様かゝ様今かへつたわいな、久しうで逢やしたと、地とんと坐りし居ずまゐは禿立見ることくなり、各は不審晴れず、名古屋は元より合點なれば、オ、いづれも御不審は尤々、長う申せばだんくあれども、必竟姫君を將監殿の娘にして、死したる人が再び蘇生られたと思召、元信に娶合せあれ姫君も一たびは、大事の命を助けられ

●取組 今銀杏前などが仕組んだ狂言のとなり。

し各々なれば斯無ふてからが親同前、地なまなか儀式立しては、養子といふて面白なさ、又平夫婦と談合して、血を分けた遠山に致したが我等の趣向、取組は御屋形の、御意でござると小みじかく、わけも聞える道も立、フシ金つかふたるしるしなり、地將監夫婦も悦び涙、ちひさい時のおみつが、成人顔見て嬉しいと抱き付てぞ泣給ふ、名古屋重ねて懐中より一通を取出し、これは田上郡七百町の御朱印、永代知行なされと項戴させ、偕田上郡は給所くの入組にて、地割なかく、むづかし、某が父主計の介天文の曆算に達し、鼠そろばんといふ物をたくみ、つもり物わり物人の聲にしたがつて、そろばんの面明白にあらはるゝ、是を以て

●剎那 瞬間といふに同じ。
 ●延喜の帝 醍醐天皇、延喜十五年陸平永寶を鑄させ玉ふ。
 ●駒曳錢 人の駒を牽き行く圖を錢の表に鑄造したもの。古へ厭勝に用ひたる錢といふ。

●そろべく候 *
 ●年は子の年 *

考へば間づもり知行高、剎那に相濟申すべしと有ければ、元信聞給ひ、それに付延喜の帝、陸平永寶駒曳錢を鑄させて民を賑はし給ふ、其駒は晉の韓幹が馬をうつされし、我又其駒の圖を傳へ覺へて候へば、駒曳錢を鑄て領内を賑はし申すべし、是は珍重然らば善はいそがしや、よめ入むこ入國入して、本祝言の儀式は重ねて、先々今宵は祝ふてざつとめでたう候べく、そろばんつぶに萬代、つもるぞ 三重 一ゆたかなる、フシ年は子の年、大黒めをと、ちからしだいに子まごもわき出る、地からは五穀手からはかねがわき出く子々孫々まで、長久榮花の家繁昌は、君が、惠の威徳なり

孕常盤

附 源氏冷泉節

解題

『孕常盤』は源義朝の妾常盤が、頼朝をはじめ今若、乙若、牛若等の幼兒を助命せんが爲めに、清盛の我姿色をよろこべるを幸ひ、其の意に従ひ身をまかせ、遂に平氏の胤を宿して女子を産みしといふ事實を取りて男子となし、清盛は其の出産を待焦れるに反し、常盤は敵の子を産む事を耻辱として、臨月に及んで館を逃れ出たれば、清盛は大に怒り之を捕へて刑に處せんとするところへ、馬子に身を棄して引廻しの馬の口を取れる牛若、産婆と化けて來れる辨慶並びに常盤の父梅津源左衛門等落合ひ折ふし産氣付きて産落したる男子は、梅津源左衛門が刺殺して源氏の耻辱を雪ぎ、牛若辨慶は警固の武士を追ひ、常盤を助けて其の場を逃れ出で、これより牛若は金賣吉次に伴はれて、奥州へ下る途中、三河國矢矧長者が許に宿り、淨瑠璃姫と契り名残を惜むまでを此の作の骨子とせり。『源氏冷泉節』は、源頼朝が伊豆に配流

中、伊東祐親の娘藤の前と通じ一子を擧げしを、祐親は科人の頼朝に娘を娶す事を苦々しく思ひ、且は平家への聞えを憚り、春樂といふ醫者に娘を托し、産みし子は川に沈めて亡きものとし、頼朝をも殺さんと謀り、藤の前を平家の目代山木判官へ嫁せんとせしより、頼朝を思ふ春樂は、源氏の耻辱として山木へ送らんよりは寧ろ藤の前を殺すに如すと、弟子の春甫に云ひ含めて藤の前を毒殺し、頼朝を助けて義兵を擧げ、義経は奥州より攻め上り、途中三河國に淨瑠璃御前をおとづれし所、淨瑠璃は既に世を去り、其の侍女冷泉、十五夜等に逢ひ、姫の事ども傳へ聞き、こゝに義経發奮して出陣すといふ事を作りたり。冷泉節といふ外題は此物語の一段を「冷泉節」といふ名より付けたり。「外題年鑑」には、「冷泉節」は貞享五年正月二日とあり、「孕常盤」は正徳三年七月十六日とありて、二作の間には二十二年の間隔ある如くなれど、「冷泉節」正本の表紙短冊に「孕常盤追加」の肩書あるより見れば、此の二作は「碁盤太平記」が「兼好法師物見車」の跡追として出でたる如く、二作同時に出たるものなる事を知るべし。此の事については、既に諸氏の説もあり、櫻庭篁村氏は「年鑑」の誤れる事を指摘し、且、文體より思へば、竹本座「孕常盤」は宇治の「伏見常盤」を出したるもの

にはあらぬか」と其の材源に言及し、藤井乙男氏は之に對し、「冷泉節」は上下二段の短篇なれば、是のみにては一日の狂言たり難し、「孕常盤」の切として出したるを「年鑑」には前狂言の名を逸し、正徳三年七月の再興行のみを記したるならん、「伏見常盤」と同物ならんとの説はうけ難し、「孕常盤」は常盤が既に清盛の妾となりたる後より筆を起して、少しも伏見に關したること見えず、且文章も貞享六年以前のものと思はれず。と實によき考へといふべし。貞享年代の「出世景清」「三世相」等に比するに、素より同時代の作とは思はれず、無論寶永正徳の頃の作なるべけれど、正徳三年を再興行の時とせられしには何か據る所あるにや。或は正徳三年の部に、「冷泉節」をも入るべかりしを、過ちて貞享五年へ紛れ込みしにはあらぬか。「年鑑」には此の如き間違ひは屢々あり。但し此の作の材源については、予未だ宇治の「伏見常盤」といふものを見れば、詳しくは論じ難きも、其の外題より推すに、舞曲の「伏見常盤」の改作なることいふまでもなし。よりにて舞曲と此の作とを對するに、此の材源が「伏見常盤」にはあらざるも、さりとて全く關係なしとはいふべからず。蓋し近松は此の作に限らず、何々の改作といふべきものも一つ材源に拘泥するが如きことは殆ど

なし。八方より材料を漁りて自由自在に綴り合せ、渾然融和の妙を成す。此の作も亦然り。重なる事實は「源平盛衰記」「義経記」に據り、矢矧長者の一段は「十二段草子」に據りし事はいふまでもなく、此の他部分くについては、謡曲もあれば、舞曲もあるべく、はた古淨瑠璃より奪ひし所もあるべし。

●祇園精舎の鐘の聲云々 「源平車音諸の書出し、祇園精舎の鐘の聲諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色盛者必衰の理を顯す、奢れる者も久しからず春の花の夢の如し、猛き心も終に亡びぬ風の前の塵に同じ、遠く異朝を訪へば夏の寒泥、秦の趙高漢の王莽梁の周伊唐の祿山皆舊主先皇の政事にも從はず、民間の憂世の亂れも知らざりしかば、久しからずして滅びにき、近く我朝をたづぬるに承平の將門、天慶の純友云々。此の文句を取れり。

平家物語

孕常盤

近松門左衛門作

一モイ 祇園精舎の鐘の聲諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色盛者必衰の理り、驕る者久しからず遠く異朝をとらふらふに、秦の趙高唐の祿山、近く本朝をうかゞふに、天慶の純友承平の將門、間近くは六波羅入道前の太政大臣平朝臣清盛公の有様こそ、心も詞も及ばれね、我身の榮華を極むるのみならず、嫡子小松の重盛内大臣の左大將、次男宗盛中納言の右大將、三男知盛權中納言、四男重平三位の中將、門脇の宰相

必衰の理を示したるなり。即ち此の二句は奢るもの久しからずの前提にて、暗に平家の驕奢を諷したるなり。

●異朝 本朝又は我朝に對していふ。おもに支那をさす。

●秦の趙高 趙高は秦始皇の寵臣、權を専らにしけるが、諸臣の心を試みんとて、鹿を指して馬といひ二世皇帝に獻し、群臣のうち鹿といひしものを罪し、遂に帝を弑し趙高も亦公子嬰の爲に族誅せらる

●唐の祿山 安祿山は胡人なり、唐玄宗政事に倦み酒色に荒むに乗じ、龍姬楊貴妃と結託して玄宗の信任を得、遂に反して帝を弑に逐ふ。祿山洛陽に都して帝と稱す。

されど少子を愛して嗣となさんとせしかば、長子安慶の爲めに殺されぬ。●天慶の純友承平の將門 平將門は鎮守府將軍長將の第三子、勇敢にして騎射に巧みなり、始め攝政忠平に事へ檢非違使たらんことを求めしも忠平の省みざりしより、關東に歸り攻剛をなす、曾て藤原純友と叡山に登り、王城を下敷し王位を窺寄し純友と約し、他日我も天子とならば卿は關白となさんと、即ち東西に別れて時機の到るを俟つ、承平六年將門關東に威を震ふと聞き、純友伊豫に旗を擧げ、東西相呼應して官軍に抗す、天慶二年將門は下總猿島に内裡を築き、自ら平親王と稱す、同年平貞盛藤原秀郷の爲に討たる。純友は同四年亡ぶ。之を世に天慶の亂といふ。是等みな和漢古今を問はず、驕奢に長じ我分限を忘れて非望を企てたるもの、一として終りを全ふしたるはなし。以て清盛入道の殷鑑遠からざるをいふ。●六波羅入道 六波羅は清盛の屋形のある所。故に六波羅入道といへば清盛のこと。●一門の公卿十六人 清盛の威權赫々、重盛以下平家の一族にして大臣納言等公卿の位に列するもの十六人の多きに及ぶ。●受領

經盛、前の大納言教盛、池の大納言賴盛、越前の三位通盛以下、一門の公卿十六人、其外諸國の受領衛府、八省すべて六十餘人、官錄前代に超過し榮華天下の目をそばめ、花族の三公英雄の公達も肩を並ぶる者はなし、されば一朝の怒に其身を忘るゝとや、院の御所を恨み奉り、天命をも顧ず、後白河の法皇を鳥羽の北殿に押籠、卿相雲客四十三人流罪に沈め、

衛府 受領は國司の官にあるもの、衛府は近衛、兵衛、衛門府にて左右に分るゝより六衛府の稱あり。●八省 中務、式部、治部、民部、兵部、刑部、大藏、宮内の八省をいふ。即ち公卿十六人、國司及び六衛府、八省の官人に至りては更に多く、要路に當る一門六十餘人に及びて前代未聞なりと。●花族の三公 三公は太政大臣、左右大臣にて此位に登る人は、花族と稱する家筋より出で、其他の家からは溢りに三公に登ると能はず。花族は又清華といふ。●後白河の法皇を鳥羽の北殿に押籠む 治承元年、重盛宗盛の近衛大將となるに當り、曾て此の官を求めて得ざりし藤原成親平氏を怨み、西光と隱謀を企て平氏を滅さんとす。事露顯に及び、法皇また此の事に與るものとして、清盛法皇を鳥羽に遷さんとせしが、重盛の諫る所となりて一旦思ひ止りぬ。されど同三年十一月重盛の薨去後遂に法皇を幽閉し奉る。●卿相雲客四十三人流罪 治承三年十一月、法皇を幽閉し奉ると同時に、法皇に事へたる關白基房、太政大臣師長以下北面に至るまで四十三人の官職を停め、諸國へ左遷す。此の事「源平盛衰記」に詳し。

●小松殿 重盛のこと。

●相國 大政大臣の尊稱。

●浮べる雲 不義の富貴を譬へていふ。「論語」に「疏飯を食ひ水を飲み、膝を曲げて之を枕とす、樂み其中にあり、不義にして富み且貴きは我に於て浮雲の如し」といふ語に基く。

●所勞 病患に罹りたること。

●西八條 清盛のありし所。

●よさん 典參。

●書寫山の衆徒 書寫山圓教寺、播州第一の大寺なり。衆徒は大勢の寺僧。

●惡法師 忍辱戒行を主とする僧

小松殿の教訓をも聊か用ひず、擅なる入道相國、驕る平家の行末を浮べる雲と頼みなく、思積りて雪折の小松殿の御所勞、良樂醫療の驗もなく、御病氣重らせ給ふとして、一門残らず西八條入道の館によさんあり、靈佛靈社の御祈禱の大法有るべきかと、評説とりくくなる處へ、調播州書寫山の衆徒中として訴へしは、去年の春より比叡の山育ちと申す惡法師、學問の爲とて登山い

にして兵杖を持する故に惡法師といふ
 能化指南 能化は僧の師範役、指南もまた同じ。

●人礫 松明を持たる人を礫の如く屋上へ放り上げしなり。

●學寮 學問所のこと。書寫山は大寺なれば、所化を教育する學校ありしなり。

●回祿 回祿は火の神の名。これより寺院などの火災に罹るを回祿といふ。

●西塔の武藏坊 西塔は叡山三塔の一。辨慶は叡山にて修業したる僧なり。

●護摩 佛前に壇を築き、火を燒きて祈り、一切の惡事を根絶すといふ修法。

●三衣 僧の着すべき三種の衣服即ち袈裟の三種なり。

たし候が、ならびなき強力劔術早業に訓練し、同學の兒法師を疵つけ、能化指南も恐れぬあふれ者、一ツ山もてあつかひ夜中に追拂ひ候へば、松明持たる下僧を搦んで、本堂の屋根へ人礫に打上げ、松明檜の檜皮に移り、折節山風烈しく、諸堂學寮一宇も残らず回祿に及び候名は西塔の武藏坊辨慶と申す惡法師、地搦取て候と引出す面がまち、筋骨高く頬骨荒れ、繩取六人宙に引立、睨み廻せる頬黒く、護摩に燻ぼる不動尊、フシ玉顔光るに異ならず、地清盛入道椽先に躍り出、調ヤア憎くい法師が面付かな、己れ如何なれば争ひ喧嘩を好み、諸人に傷けあまつさへ大伽藍を滅燼すは、頭を圓め三衣を着す法なるか、察するに叡山法師、平家を傾けふと

●淨海 清盛の法號。

●みせ笑ひ そら笑ひの類。

したまふ法皇に與し、己れを頼み方々を暴れさすると覺えたり、地サア眞直に申せ、偽らば是を見よ、淨海がこの握拳にて、しや頭微塵にはりくだかんと睨付給ひし面色は、白いと黒いと辨慶が、フシ二人あるかと凄じし、調武藏けらくとるせ笑ひ、さて色々のお尋ね一ツも辨慶存ぜぬ事、先づ諸人に傷け手を負はせし事、是は相手の臆病、何故其時に討留ぬと相手を御詮議なさるべし、又書寫山回祿の事は、松明持たる下僧を人礫に打て候へば、時節惡き山風辨慶が知らぬ事、風の神にお尋ねあらば明白に知れ申さん、且又出家の法に背くとは、さ宣ふ入道相國袈裟衣を懸け、頭を丸めながら法皇を押籠め、諸人を流罪死刑に行ひ、此法師が

●三千坊 坊は僧の居所にて叡山三塔における僧坊の數多きを形容して三千坊といふ。

しやかうへをはり砕いてくれんと、只今の握り拳、これも法師の道なるか、御心に問ひ給へ、又辨慶が争ひ好み喧嘩好きは、生れついでの癖なれば是も我等が存ぜぬ事、地親こそは知つらめ、定めて胎内に宿る時、父と母とが小夜の口説、争ひ紛れの天の逆鋒、逆立たる一滴がかたまつて、喧嘩好きの辨慶と、生れたさうなと、フシ空嘯いてぞ居たりける、地道の清盛理屈づめ、なまなか彼奴に物言はずな、打首か獄門か兎角方々計らはれよとありければ、地宗盛知盛詞を揃へ、もと叡山育ちと申せば彼を罪に行はれば、例の三千坊如何なる仇をか仕出さん、地おのれと亡ぶる御仕置、あらまほしとの給ふ處へ、筑後守貞義あはたゞしく參上し、

●貞義 筑後守平家貞の子にて、清盛の服心の士。

●五條橋 はじめは松原通りなり、即ち古への五條通りなり。今の五條橋は秀吉の時六條坊門に架せられたれ、これを五條橋通りといふ。されど欄干には今も青銅の擬寶珠左右に十六本ありて往昔の跡を存す。

●飯綱 飯綱使ひは、信州戸隠山の飯綱神社より起り、狐を使ふ妖術なり。

詞去る卯月下旬より五條の橋に、十六七の小童夜な往來を惱し、討れしもの九百餘人、夜廻がよりの役人、召捕んと働ども、蝶鳥などの如くにて力に及ばず、京中難儀仕るよし毎日の訟訴、地如何計ひ申さんと、言上すれば入道相國、ム、それは豫ても聞しこと、何條其小童、魔法飯綱を行ふとも、變化鬼神も討てば討つ、軍兵を差向けはや討取れと下知せらる、詞門協宰相進み出、仰せにては候へ共、左程の童一人に、軍兵を向けられんは却つて都の騒動、夜廻がよりの者共が、手に餘る白徒ならば、味方多く損ずべし、地然れば當家の耻辱と申し、殊に小松殿の御病中かたく御遠慮あるべき事、されば敵を以て敵を亡す手段、彼

●うい坊主 清盛の御意に叶ひしなげ。小見のことをういやつなどいふに同じ。

の法師めを放ち遣はして打合せて御覽あれ、相打に討れば二人の悪黨滅ぶる道理、さもなくても一人は手を濡さずの御誅罪、此旨如何と申さるれば、辨慶聞も敢ず、調ア、面白き御政道、元來某武藝を好み、日本に蔓る手柄したしと思へども、地手痛き奴も無つしに、洛中に持餘す、天狗冠者と勝負せんは嬉しやく、嬉しふて堪らぬと、フシすくく立てぞ悦びける、地入道も悦喜あり、それ繩解よ、出来いたくうい坊主、先づ太刀刀長刀などが入るならば、取らすへきかと宣へば、いやく此儘罷り出、行逢ふ人の太刀刀目に付たをもぎ取るべし、この法師生れてより人に物貰はず、お床に立たるあの長刀、御門にかよりし突棒さすまた、

●突棒さす又 刑具。

●鎮西八郎爲朝 源爲義の八男。臂力人に過ぎ好んで強弓を引く、勇を待みて人を凌ぐにより、爲義愛へて之を九州に放つ。故に自ら鎮西八郎と名乗る。保元の亂に、父と共に新院の御味方に参り、清盛及び兄義朝と戦ひ善射、一騎當千の働きをなすことは人の知る所なり。此鐵棒は即ち清盛が當時爲朝の手より分捕したる所なりと。

●七ツ道具 辨慶の七ツ道具といふは、鉞、鋸、鎚、鎌、熊手、鐵棒及び長刀を合せたるもの、此の七ツ道具の事は後人の作爲せしものなるべし。古き書には見えず。

●常盤御前 常盤は義朝の妾。もと近衛藤原皇后に仕ふ、姿色あり

火消道具の熊手鋸大槌など、貫ひは致さぬ欲さに取る、引寄せく一つに取てからげたり、入道なほも機嫌能く、さてく氣味よい法師めかな、千騎萬騎の軍兵の頭に立ん人相ありと、簾中に突と入り、白銀のつく打たる鐵の棒ひつさげ、是は源氏の大将鎮西八郎爲朝が得道具、去る平治の軍に義朝一家を攻滅し討取たるしるし、是にて童を打拉げ、遣はせぬぞサア取れと投出せば、辨慶一つに摺んで數を讀む、三本四本五本六本、これこそかたじけ七ツ道具と勇み行く、平家の威勢引換て、源氏は鬼に鐵棒の、武運の末ぞ三重頼もしき、世に連て、變れば變る常盤御前、我子の命助けんため清盛に従へば、心にのらぬ乗物や、フシ御供美

て義朝に歸し、今若乙若牛若の三子を擧ぐ。義朝亡びて後三子を連れて大和龍門に隠る。清盛これを捜せども知れざるより、常盤の母を捕ふ。常盤己む事を得ず、三子を携へて自首す。清盛常盤の美なるを見て喜び、遂に納れて妾となし。一女を擧ぐ。(但し此の作にては、女子を男子に作り替へたるなり。今若乙若は僧となり、牛若は鞍馬の僧覺日に附す。

●喜三太 又鬼三太に作る。父は法種といひ、鞍馬山の麓に住す。剛力を以て名あり。源の義經に事へ、厩馬の事を司る。依て御馬屋の喜三太と呼ぶ。堀河夜討の時、土佐坊を防ぎて功あり。

●船運 進みがたき貌。

●ればき 道の砂とらぬに響ふ。
●くらがりの牛 闇に牛を引くともいふ。物の辨別のつづぬ事に響ふ。但しこゝはさる意義あるにあらず。鞍馬の牛若といはん爲めに俚語を引きしのみ。

々しく侍きて、地小松殿の御祈禱に、清水詣の下向道
姿は花を飾れども、覺悟は出家同前の、心に衣胸に袈
裟、フシ五條の橋にぞ着き給ふ、地爰に源の牛若丸三年
の日參の、願も今年は秋の日や、早暮かゝる橋の上、
由々敷女乗物に、茶辨當擔げしは、折々鞍馬へ使に來
る喜三太といふ下郎、さては我母常盤御前、摺り違ふ
て通るならば、見知りし者もありやせん、人に心をつ
け顔に、戻られもせず般還と、編笠傾けおはせしに、
喜三太見付乗物へ知らせんと、詞あの若衆の道のねば
さは、あれこそほんの闇がりの牛、地鞍馬の牛とかす
らする、常盤はそれぞと心き、人目よぐまの遺瀨なく、
詞ハア、悲しや珠數を落した、我身の菩提は兎も角も、

●隨求陀羅尼 すみぐだらにと云は。普通光明清淨熾盛如意寶印心能勝大明王大隨求陀羅尼の畧。隨求とはすべての求願に隨つて成就を與ふるものといふ功德のある眞言なり。
●千手の眞言 千年千眼大悲心陀羅尼のことにて、觀音の功德を表はしたる眞言なり。
●半しやうぞく しゃうぞくは裝飾なるべく、水晶と琥珀にて粧ひたることをいふ。

平家の御代の御祈禱に、地二年此の方隨救陀羅尼百萬
遍、此の度小松様の御願の爲、千手の眞言十萬遍、唱
なへ込みたる大事の珠數、勿體なくも氣にかゝる、水
晶と琥珀と半しやうぞくの紫房、でしとだつまは珊瑚
樹ぞや、皆立ち歸へつて尋ねたも、詞拾ふたものゝ
あるならば、價を取らせ貰ふておじや、喜三太獨附け
置いて皆々早ふと宣へば、今迄落てはよもあるまじ、拾
ふた人を詮議せんと、フシ方々へこそ走りけれ、地常盤
輿より轉び出でやれ牛若か母なるは、鞍馬へ上しは七
つの年、それより喜三太に文の便りを聞くばかり、
十年振の我子の顔、見せてたもやと引留め、抱き付て
泣給へば、牛若夢の心地して、フシ涙に沈みおはせしが、

●督の殿 義朝のこと。督の殿は衛門府又は兵衛府の督の尊稱。

●師の御坊 鞍馬の僧正坊のこと。

●伏見の雪 永暦元年正月、三人の子を連れて木幡の里に雪に懺める事なすいふ。

故督の殿に後れしは三歳の時なれば、面影も覚え参らせず、母上の御顔は慥に覚え候が、詞見替す程の御簀れ、斯く由々敷御身にて何不足の候ぞ、敵清盛に御身を任せ、平家繁昌の祈禱小松殿の祈とて、地眞言陀羅尼に珠數の所作、清盛への追従か、心の變つた母上様其お心では牛若を不便とも思されじ、何しに父も戀しからん御涙は空事よ、恨めしの母上やと、フシ恨み啣ちて泣給ふ、母上わつと涙に暮れ、たましく逢て愛らしき、親子の詞をかけもせず情なの恨みやな、母が心を文にても、知らせんとは思ひしが、師の御坊や傍輩に、漏やせんと控へしを、知らで恨みも、フシ道理なり、督の殿討れ給ひてより、御身を母が懷に入れ、伏見の雪

●宇陀 舞曲「伏見常盤」に、常盤の故郷は大和國宇陀郡山里のものなりとあり。木幡の里のおほぢが家に一人かまはれたるも、こゝも住憂く暫らく宇陀に隠れぬたり。

●怨めしの眉目容 なまな 怒り我妻の美なるが爲に、當の敵の清盛に思ひを懸けらるゝこそ怨みなれ。

●氏の耻辱 源氏の耻辱なり。

に凍え伏し、大和の國宇陀とやらんに隠れしを、詞平家に探し出され、御身も二人の兄共も、殺さるゝ筈なりしに、清盛入道自ら心をかけ、地妾にせんといふ無念やな口惜や、源氏の大将義朝に枕を並べし此常盤指す敵の平家に辱しめらるゝ事怨めしの眉目容、面に焼鐵漆さし、顔を損ひ此無念、聞くまじと思ひしが待てしばしと思案をかへ、清盛が心に従ひさまぐに口説きしがば、色にひかるゝ愚の清盛さてこそは和御前達、命を助け、フシ置きしなり、母は女の道立たず、末代に名を捨るも、御身達を成人させ平家を滅し、源氏の代と翻へし、夫の敵も氏の耻辱も雪がんと思ふ爲ばかり、詞老入道の清盛光る源氏か業平か、何に色香の

●五逆罪

※

あるべきぞ、床を竝ぶる寢臥には、火炎の上に寝るよりも其苦しさを推量あれ、地語るも涙が翻るゝぞや、されども小松の重盛は日本の賢人、此人あらん限りは詞平家は亡び難しといふ、時しも重き病氣なり、自ら御祈禱の七日詣と偽り、清水の観音様に重盛の命を七日が中に取殺してたび給へと、地調伏の爲繰る數球は我身ながらも恐ろしや、聖人賢人の命を取るは、菩薩を殺すに同じくて、五逆罪に勝ると聞く、夫の爲子の爲、現世後生を取失ふ母が心を思遣り、恨みを晴れよ牛若と、搔口説き給ふにぞ、牛若も手を合せ、知らで恨みし恐れの段、眞平御免とばかりにて、悲歎の涙せきあへず、地常盤重て、詞聞けば此頃此橋にて、十六

●修羅前
戰場を修羅場といふより戰場のことないへり

七の小童の往來を惱すとは、疑ひもなくお事よの、大義を思ひ立つ者は無益の殺生せぬことぞ、地數珠落せしとは供人除けんたばかりこと、是を持て佛神を信心あれとてたびければ、牛若戴き懷中し、詞全く無益の殺生ならず、源の牛若が下人一人持ずして、大事は思ひ立られずと千人切を企て、手並を見届け召使はんと夜前まで九百九十九人斬て候へども、地是ぞと思ふ下人もなしと、語り給へば喜三太畏れ多く候へども、詞拙者を召され下されかし、外の事はいざ知らず、修羅前の御馬の口は蛇に綱つけても引廻し、雜兵の首四つ五つは寢起になりとも仕らんと、地申せば母も悦びて、ヲ、幸ひく跡は妾に任せ置き、直に供せよあれ

●馬屋を得たる 馬を取扱ふ事に
妙を得たるの意。

く下人共が立歸る、何を言ふ間もないはいの、氣早
な心持ちやんな、喜三太萬事に氣をつけよ、さらば
くと乗り給へば、名残盡せぬ親子の中振返りく、
をのれは馬屋を得たるとや、當分それは入らぬ事、馬
に乗るまで牛若が、チクリ草履を直せと、フン笠被ぎ、
地一町ばかり別れし處へ供の人々立歸り、調如何様に
尋ても御數珠は見え申さず、拾ひし者はこれなしと申
上れば、ヲ、其筈く、喜三太めが拾ひ隠せしを、袖
口より見付られ直に欠落したさうな、内府様の御祈禱
沙汰なしにして遣りやと、有さうに宣へば、扱はいさ
ずりの泥坊、憎やくくと口々に、言繰返す水晶の、數
珠より清き常盤の前、涙に暮れの日も入て、月は出け

●黒革威 黒札に黒絲を以て威し
たるもの。

●着長 大將の着る鎧をいふ。

●美精好の大口 美は精好を稱し
たる詞。精好は袴に用ゆる絹織物
の名。大口は大口袴。十二段草子
に「精好の大口に、顯紋紗の直垂」
などあり。
●見越入道 辨慶の大入道を形容
したるなり。

り 三重夕雲の、行衛はそれか夜嵐の、聲すみ渡る秋
の風、武藏野ならぬ武藏坊、何處にて取たりけん、緘
に緘せる黒革の大鎧大長刀、宛がら鬼神と夕顔の、五
條の橋の橋板を、チクリとどろくと踏鳴し、地童遅
しと待居たり、牛若は母上の教訓に力を得、そゞろ浮
立つ出立は、赤地の錦の着長に、美精好の大口重代の
御佩刀、取て被ぎし薄衣の行けた遙に見渡せば、二王
の様なる法師武者人か見越入道か、何にもせよ試みて、
押へて下人にせんものをと、ゆうくと歩み寄り給ふ、
辨慶は斯ごとも白柄の長刀欄干に横はし、仕懸を待て
ば牛若丸通りさまに長刀の、柄元をはつしと蹴上たり、
地すはしれものよ手並を見せんと、斬てかゝれば薄衣